

# 野 分

夏目漱石



一冊堂青空文庫



野分

夏目漱石

—

白井道也しらいどうやは文学者である。

八年前まえ大学を卒業してから田舎いなかの中学を二三箇所かしよ流して歩いた末、去年の春飄然ひようぜんと東京へ戻って来た。流すなとは門附かどづけに用いる言葉で飄然ひようぜんとは徂徠そらいに拘かわらぬ意味とも取れる。道也の進退をかく形容するの適否は作者といえども受合あわぬ。縛もつれたる糸の片端かたはしも

眼を着すればただ一筋の末とあらわるるに過ぎぬ。ただ一筋の出  
処の裏には十重二十重の因縁が絡んでいるかも知れぬ。鴻雁の北  
に去りて乙鳥の南に来るさえ、鳥の身になつては相当の弁解があ  
るはずじゃ。

始めて赴任したのは越後のどこかであつた。越後は石油の名所  
である。学校の在る町を四五町隔てて大きな石油会社があつた。  
学校のある町の繁栄は三分二以上この会社の御蔭で維持されてい  
る。町のものにつけては幾個の中学校よりもこの石油会社の方が  
遙かにありがたい。会社の役員は金のある点において紳士であ  
る。中学の教師は貧乏なところが下等に見える。この下等な教師

と金のある紳士が衝突すれば勝敗は誰が眼にも明かである。道也はある時の演説会で、金力と品性と云う題目のもとに、両者の必ずしも一致せざる理由を説明して、暗に会社の役員らの暴慢と、青年子弟の何らの定見もなくしていたずらに黄白万能主義を信奉するの弊とを戒めた。

役員らは生意気な奴だと云った。町の新聞は無能の教師が高慢な不平を吐くと評した。彼の同僚すら余計な事をして学校の位地を危うくするのは愚だと思った。校長は町と会社との関係を説いて、漫に平地に風波を起すのは得策でないと説諭した。道也の最後に望を属していた生徒すらも、父兄の意見を聞いて、身のほど

を知らぬ馬鹿教師と云い出した。道也は飄然<sup>ひょうぜん</sup>として越後を去った。

次に渡ったのは九州である。九州を中断してその北部から工業を除けば九州は白紙となる。炭礦<sup>たんこう</sup>の煙りを浴びて、黒い呼吸<sup>いき</sup>をせぬ者は人間の資格はない。垢光<sup>あかびか</sup>りのする背広の上へ蒼い顔<sup>あお</sup>を出して、世の中がこうの、社会がああの、未来の国民がなんのかのと白銅一個にさえ換算の出来ぬ不生産的な言説<sup>ごんせつ</sup>を弄するものに存在の権利のあろうはずがない。権利のないものに存在を許すのは実業家の御慈悲<sup>おじひ</sup>である。無駄口<sup>たが</sup>を叩く学者や、蓄音機の代理をする教師が露命をつなぐ月々幾片<sup>いくへん</sup>の紙幣は、どこから湧<sup>わ</sup>いてくる。手

の掌<sup>ひら</sup>をぽんと叩<sup>たた</sup>けば、自<sup>おの</sup>から降<sup>ず</sup>る幾億の富の、塵<sup>ちり</sup>の塵の末を舐<sup>な</sup>めさして、生かして置くのが学者である、文士である、さては教師である。

金<sup>かね</sup>の力で活<sup>い</sup>きておりながら、金を誹<sup>そし</sup>るのは、生んで貰った親に悪<sup>あく</sup>体<sup>たい</sup>をつくと同じ事である。その金を作ってくれる実業家を軽んずるなら食わずに死んで見るがいい。死ねるか、死に切れずに降参<sup>さん</sup>をするか、試<sup>た</sup>めして見ようと云<sup>い</sup>って抛<sup>ほう</sup>り出された時、道也はまた飄然と九州を去った。

第三に出現したのは中国<sup>へん</sup>辺<sup>いなか</sup>の田舎である。ここの気風はさほどに猛烈な現金主義ではなかった。ただ土着のものがむやみに幅を

利<sup>き</sup>かして、他県<sup>きん</sup>のものを外国人と呼ぶ。外国人と呼ぶだけならそれまでであるが、いろいろに手を廻<sup>ま</sup>わしてこの外国人を征服しようとする。宴会があれば宴会でひやかす。演説があれば演説であてこする。それから新聞で厭<sup>い</sup>味<sup>やみ</sup>を並べる。生徒にからかわせる。そうしてそれが何のためでもない。ただ他県<sup>きん</sup>のものが自分と同化せぬのが氣<sup>か</sup>に懸<sup>か</sup>るからである。同化は社会の要素に違<sup>ちが</sup>ない。仏蘭<sup>フラン</sup>西<sup>ス</sup>のタルドと云う学者は社会は模倣<sup>まほう</sup>なりとさえ云うたくらいだ。同化は大切かも知れぬ。その大切さ加減は道也といえども心得ている。心得ているどころではない、高等な教育を受けて、広義な社会観<sup>くわん</sup>を有している彼は、凡俗以上に同化の功徳<sup>くどく</sup>を認めている。

ただ高いものに同化するか低いものに同化するかが問題である。  
この問題を解釈しないでいたずらに同化するのには世のためにならぬ。自分から云えば一分いちぶんが立たぬ。

ある時旧藩主が学校を参観に来た。旧藩主は殿様で華族様である。所のものから云えば神様である。この神様が道也の教室へ這は入いって来た時、道也は別に意にも留めず授業を継続していた。神様の方では無論挨拶あいさつもしなかった。これから事が六むずかしくなつた。教場は神聖である。教師が教壇に立って業を授けるのは侍さむらいが物の具ものぐに身を固めて戦場に臨むようなものである。いくら華族でも旧藩主でも、授業を中絶させる権利はないとは道也の主張で

あつた。この主張のために道也はまた飄然<sup>ひょうぜん</sup>として任地を去つた。去る時に土地のものは彼を<sup>もく</sup>目して頑愚<sup>がんぐ</sup>だと評し合つたそうである。頑愚と云われたる道也はこの嘲罵<sup>ちやうば</sup>を背に受けながら飄然として去つた。

三<sup>み</sup>たび飄然と中学を去つた道也は飄然と東京へ戻つたなり再び動く景色<sup>けしき</sup>がない。東京は日本で一番<sup>せちがら</sup>世地辛い所である。田舎にいるほどの俸給を受けてさえ樂には暮せない。まして教職<sup>なげう</sup>を抛つて両手を袂<sup>たもと</sup>へ入れたままで遣<sup>や</sup>り切る<sup>き</sup>のは、立ちながらみいらとなる工夫<sup>くふう</sup>と評するよりほかに賞<sup>ほ</sup>めようのない方法である。

道也には妻<sup>さい</sup>がある。妻と名がつく以上は養うべき義務は附随し

てくる。自<sup>みづ</sup>からみいらとなるのを甘んじても妻を干<sup>ひ</sup>乾<sup>ぼし</sup>にする訳<sup>わけ</sup>には行かぬ。干乾にならぬよほど前から妻君はすでに不平である。

始めて越<sup>え</sup>後<sup>ちご</sup>を去る時には妻君に一部<sup>いちぶ</sup>始終<sup>しじゆう</sup>を話した。その時妻君はごもつともでござんすと云つて、甲<sup>か</sup>斐<sup>い</sup>甲<sup>が</sup>斐<sup>い</sup>しく荷物<sup>てぐしう</sup>の手拵<sup>しなえ</sup>を始めた。九州を去る時にもその顛<sup>てん</sup>末<sup>まつ</sup>を云つて聞かせた。今度はまたですかと云つたぎり何にも口を開かなかった。中国を出る時の妻君の言葉は、あなたのように頑<sup>がん</sup>固<sup>こ</sup>ではどこへいらしても落ちつけっこありませんわと云う訓戒<sup>くんかい</sup>的<sup>てき</sup>の挨拶<sup>あいさつ</sup>に変化していた。七年の間に三たび漂泊<sup>ひやくぱく</sup>して、三たび漂泊するうちに妻君はしだいと自分の傍<sup>たがひ</sup>を遠<sup>とお</sup>退<sup>の</sup>くようになった。

妻君が自分の傍を遠退くのは漂泊のためであろうか、俸禄ほうろくを棄すてるためであろうか。何度漂泊しても、漂泊するたびに月給が上がったらどうだろう。妻君は依然として「あなたのように……」と不服がましい言葉を洩もらしたろうか。博士にでもなつて、大学教授に転任してもやはり「あなたのように……」が繰り返されるであろうか。妻君の了簡りょうけんは聞いて見なければ分らぬ。

博士になり、教授になり、空むなしき名を空しく世間に謳うたわるるがため、その反響が妻君の胸に轟とどろいて、急に夫の待遇を変えらるならばこの細君は夫の知己ちぎとは云えぬ。世の中が夫を遇する朝夕ちようせきの模様で、夫の価値を朝夕に変える細君は、夫を評価する上におい

て、世間並せけんなみの一人である。嫁がぬ前、名を知らぬ前、の己おのれと異なるところが無い。従つて夫から見ればあかの他人である。夫を知る点において嫁ぐ前と嫁ぐ後のちとに變りがなければ、少なくともこの点において細君らしいところがないのである。世界はこの細君らしからぬ細君をもつて充滿している。道也は自分の妻さいをやはりこの同類と心得ているだろうか。至る所に容いれられぬ上に、至る所に起居を共にする細君さえ自分を解してくれないのだと悟つたら、定めて心細いだろう。

世の中はかかる細君をもつて充滿していると云つた。かかる細君をもつて充滿しておりながら、皆円満にくらしている。順境に

ある者が細君の心事をここまで解剖する必要がある。皮膚病に罹<sup>か</sup>ればこそ皮膚の研究が必要になる。病氣も無いのに汚ないものを顕微鏡<sup>けんびきよう</sup>で眺<sup>なが</sup>めるのは、事なきに苦しんで肥柄杓<sup>こえびしやく</sup>を振り廻すと一般である。ただこの順境が一転して逆落<sup>さかおと</sup>しに運命の淵<sup>ふち</sup>へころがり込む時、いかな夫婦の間にも気まずい事が起る。親子の羈絆<sup>きずな</sup>もぼつりと切れる。美しいのは血の上を薄く蔽<sup>おほ</sup>う皮の事であつたと気がつく。道也はどこまで気がついたか知らぬ。

道也の三たび去つたのは、好んで自から窮地<sup>おちい</sup>に陥るためではない。罪もない妻に苦勞を掛けるためではなおさらない。世間が己<sup>おの</sup>れを容れぬから仕方がないのである。世が容れぬならなぜこちら

から世に容れられようとはせぬ？ 世に容れられようとする刹那せつなに道也は奇麗きれいに消滅してしまうからである。道也は人格において流俗りゆうぞくより高いと自信している。流俗より高ければ高いほど、低いものの手を引いて、高い方へ導いてやるのが責任である。高いと知りながらも低きにつくのは、自から多年の教育を受けながら、この教育の結果がもたらした財宝を床下ゆかしたに埋うづむるようなものである。自分の人格を他に及ぼさぬ以上は、せつかくに築き上げた人格は、築きあげぬ昔と同じく無功力で、築き上げた労力だけを徒費した訳になる。英語を教え、歴史を教え、ある時は倫理さえ教えたのは、人格の修養に附随して蓄たくわえられた、芸を教えたのであ

る。単にこの芸を目的にして学問をしたならば、教場で書物を開いてさえいれば済む。書物を開いて飯を食って満足しているのは綱渡りが綱を渡って飯を食い、皿廻しが皿を廻わして飯を食うのと理論において異なるところはない。学問は綱渡りや皿廻しとは違う。芸を覚えるのは末の事である。人間が出来上るのが目的である。大小の区別のつく、軽重けいちようの等差を知る、好悪こうおの判然する、善悪の分界を呑み込んだ、賢愚、真偽、正邪の批判を謬あやまらざる大丈夫が出来上がるのが目的である。

道也はこう考えている。だから芸を售うって口を糊こするのを恥辱とせぬと同時に、学問の根底たる立脚地を離るるのを深く陋劣ろうれつと

心得た。彼が至る所に容れられぬのは、学問の本体に根拠地を構えての上の去就きよしゆうであるから、彼自身は内に顧かえりみて疚やましいところもなければ、意気地がないとも思いつかぬ。頑愚がんぐなどと云う嘲罵ちやうばは、掌てのひらへ載せて、夏の日の南軒なんけんに、虫眼鏡むしめがねで検査しても了解が出来ん。

三度みたたび教師となつて三度追い出された彼は、追い出されるたびに博士よりも偉大な手柄てがらを立てたつもりでいる。博士はえらかう、しかしたかが芸で取る称号である。富豪が製艦費を献納して従五位じゆごいをちようだいするのと大した変りはない。道也が追い出されたのは道也の人物が高いからである。正しき人は神の造れるす

べてのうちにて最も尊きものなりとは西の国の詩人の言葉だ。道を守るものは神よりも貴したつととは道也が追わるるごとに心のうちで繰り返す文句である。ただし妻君はかつてこの文句を道也の口から聞いた事がない。聞いても分かるまい。

わからねばこそ餓え死じにもせぬ先から、夫に対して不平なのである。不平な妻をさい気の毒と思わぬほどの道也ではない。ただ妻の歡心を得るために吾わが行く道を曲げぬだけが普通の夫と違うのである。世は単に人と呼ぶ。娶めとれば夫である。交まじわれば友である。手を引けば兄、引かるれば弟である。社会に立てば先覚者にもなる。校舎に入れば教師に違いない。さるを単に人と呼ぶ。人と呼

んで事足るほどの世間なら単純である。妻君は常にこの単純な世界に住んでいる。妻君の世界には夫としての道也のほかには学者としての道也もない、志士としての道也もない。道を守り俗に抗する道也はなおさらない。夫が行く先き先きで評判が悪くなるのは、夫の才が足らぬからで、到<sup>いた</sup>る所に職を辞するのは、自から求むる酔興<sup>すいきよう</sup>にほかならんとまで考えている。

酔興を三たび重ねて、東京へ出て来た道也は、もう田舎<sup>いなか</sup>へは行かぬと言い出した。教師ももうやらぬと妻君に打ち明けた。学校に愛想をつかした彼は、愛想をつかした社会状態を矯正<sup>きようせい</sup>するには筆の力によらねばならぬと悟ったのである。今まではいずこの果<sup>はて</sup>

で、どんな職業をしようとも、己おのれさえ真直であれば曲がったものは芋おがら殻のように向うで折れべきものと心得ていた。盛名はわが望むところではない。威望もわが欲するところではない。ただわが人格の力で、未来の国民をかたちづくる青年に、向上の眼まなこを開かしむるため、取捨しゅしゃふんべつ分別の好例を自家身上に示せば足るとのみ思い込んで、思い込んだ通りを六年余り実行して、見事に失敗したのである。渡る世間に鬼はないと云うから、同情は正しき所、高き所、物の理窟りくつのよく分かる所に聚あつまると早合点はやがてんして、この年月としつきを今度こそ、今度こそ、と経験の足らぬ吾身わがみに、待ち受けたのは生涯しょうがいの誤りである。世はわが思うほどに高尚なものではない、鑑

識のあるものでもない。同情とは強きもの、富めるものにのみ随<sup>したが</sup>う影にほかならぬ。

ここまで進んでおらぬ世を買い被<sup>かぶ</sup>って、一足飛<sup>いっそくと</sup>びに田舎へ行つたのは、地ならしをせぬ地面の上へ丈夫な家を建てようとあせるようなものだ。建てかけるが早い、風と云い雨と云う曲<sup>くせもの</sup>者が来て壊<sup>こわ</sup>してしまう。地ならしをするか、雨風を退<sup>あめかぜ</sup>治<sup>たいじ</sup>るかせぬうちは、落ちついてこの世に住めぬ。落ちついて住めぬ世に住めるようにしてやるのが天下の士の仕事である。

金<sup>かね</sup>も勢<sup>いきおい</sup>もないものが天下の士に恥じぬ事業を成すには筆の力に頼らねばならぬ。舌<sup>たすけ</sup>の援<sup>えん</sup>を藉<sup>か</sup>らねばならぬ。脳味<sup>のうみ</sup>噌<sup>そ</sup>を圧<sup>あつさく</sup>搾<sup>さく</sup>して利<sup>り</sup>

他の智慧を絞らねばならぬ。脳味噌は涸れる、舌は爛れる、筆は何本でも折れる、それでも世の中が云う事を聞かなければそれまでである。

しかし天下の士といえども食わずには働けない。よし自分だけは食わんで済むとしても、妻は食わずに辛抱する気遣はない。豊かに妻を養わぬ夫は、妻の眼から見れば大罪人である。今年の春、田舎から出て来て、芝琴平町の安宿へ着いた時、道也と妻君の間にはこんな会話が起った。

「教師をおやめなさるって、これから何をなさるおつもりですか」

「別にこれと云うつもりもないがね、まあ、そのうち、どうかなるだろう」

「その内<sup>うち</sup>どうかなるだろうって、それじゃまるで雲を攫<sup>つか</sup>むような話しじゃありませんか」

「そうさな。あんまり判然<sup>はんぜん</sup>としちやいない」

「そう呑氣<sup>のんき</sup>じゃ困りますわ。あなたは男だからそれでようござんしょうが、ちつとは私の身にもなつて見て下さらなくっちゃあ…」

「だからさ、もう田舎へは行かない、教師にもならない事にきめただよ」

「きめるのは御勝手ですけれども、きめたって月給が取れなけりや仕方がないじゃありませんか」

「月給がとれなくっても金がとれれば、よかろう」

「金がとれれば……そりやようござんすとも」

「そんなら、いいさ」

「いいさって、御金がとれるんですか、あなた」

「そうさ、まあ取れるだろうと思うのさ」

「どうして？」

「そこは今考え中だ。そう着、ちやく 早々計画が立つものか」  
そうそう

「だから心配になるんですわ。いくら東京にいますきめたって、

きめただけの思案<sup>しあん</sup>じゃ仕方がないじゃありませんか」

「どうも御前<sup>おまえ</sup>はむやみに心配性でいけない」

「心配もしますわ、どこへいらしても折合<sup>おりあい</sup>がわるくっちゃ、おやめになるんですもの。私が心配性なら、あなたはよつぽど癩癧<sup>かんしゃ</sup>持ち<sup>くも</sup>ですわ」

「そうかも知れない。しかしおれの癩癧は……まあ、いいや。どうにか東京で食えるようにするから」

「御兄<sup>おあにい</sup>さんの所へいらしって御頼みなすったら、どうでしょう」

「うん、それも好いがね。兄はいつたい人の世話なんかする男じゃないよ」

「あら、そう何でも一人できめて御おしまいになるから悪るいんですわ。昨日きのうもあんなに親切にいろいろ言っ下さったじゃありませんか」

「昨日か。昨日はいろいろ世話を焼くような事を言った。言ったがね……」

「言ってもいけないんですか」

「いけないよ。言うのは結構だが……あんまり当あてにならないからな」

「なぜ？」

「なぜって、その内だんだんわかるさ」

「じゃ御友達の方にでも願って、あしたからでも運動をなすつたらいいでしょう」

「友達って別に友達なんかありやしない。同級生はみんな散ってしまった」

「だって毎年年始状を御寄こしになる足立さんなんか東京で立派にしていらっしゃるじゃありませんか」

「足立か、うん、大学教授だね」

「そう、あなたのように高くばかり構えていらっしゃるから人に嫌われるんですよ。大学教授だねって、大学の先生になりや結構じゃありませんか」

「そうかね。じゃ足立の所へでも行って頼んで見ようよ。しかし金さえ取れば必ず足立の所へ行く必要はなからう」

「あら、まだあんな事を云っていらっしやる。あなたはよっぽど強情ね」

「うん、おれはよっぽど強情だよ」

## 二

午ごに逼せまる秋の日は、頂いただく帽とを透とおして頭蓋骨ずがいこつのなかさえ朗ほがらかならしめたかの感がある。公園の口ハ台はその口ハ台たるの故ゆえをもつ

てことごとく口ハ的に占領されてしまった。高柳君は、どこぞ空<sup>あ</sup>いた所はあるまいかと、さっきからちようど三度日比谷を巡回した。三度巡回して一脚の腰掛も思うように我を迎えないのを発見した時、重そうな足を正門のかたへ向けた。すると反対の方から同年輩の青年が早足に這<sup>はい</sup>入って来て、やあと声を掛けた。

「やあ」と高柳君も同じような挨拶<sup>あいさつ</sup>をした。

「どこへ行っただい」と青年が聞く。

「今ぐるぐる巡<sup>まわ</sup>って、休もうと思ったが、どこも空<sup>あ</sup>いていない。

駄<sup>だ</sup>目<sup>め</sup>だ、ただで掛けられる所はみんな人が先へかけている。なか  
な<sup>ぬ</sup>か<sup>け</sup>目<sup>め</sup>はないもんだな」

「天気がいいせいだよ。なるほど随分人が出ているね。——おい、あの孟宗藪もうそうやぶを回って噴水の方へ行く人を見たまえ」

「どれ。あの女か。君の知ってる人かね」

「知るものか」

「それじゃ何で見る必要があるのだい」

「あの着物の色さ」

「何だか立派なものを着ているじゃないか」

「あの色を竹藪の傍へ持つて行くと非常にあざやかに見える。あれは、こう云う透明な秋の日に照らして見ないと引き立たないんだ」

「そうかな」

「そうかなって、君そう感じないか」

「別に感じない。しかし奇麗きれいは奇麗だ」

「ただ奇麗だけじゃ可哀かわいそう想だ。君はこれから作家になるんだろ  
う」

「そうさ」

「それじゃもう少し感じが鋭敏でなくっちゃ駄目だぜ」

「なに、あんな方は鈍くってもいいんだ。ほかに鋭敏なところが  
沢山あるんだから」

「ハハハハそう自信があれば結構だ。時に君せつかく逢あったもの

だから、もう一遍あるこうじゃないか」

「あるくのは、真平まっぴらだ。これからすぐ電車へ乗って帰えらないと  
ひるめし  
午食を食い損そくなう」

「その午食を奢おごろうじゃないか」

「うん、また今度にしよう」

「なぜ？ いやかい」

「厭いやじゃない——厭いやじゃないが、始終御馳走ごちそうにばかりなるから」

「ハハハ遠慮か。まあ来たまえ」と青年は否応いやおうなしに高柳君を公

園の真中の西洋料理屋へ引っ張り込んで、眺望ちようぼうのいい二階へ陣を

取る。

注文の来る間、高柳君は蒼い顔へ両手で突っかい棒をして、さもつかれたと云う風に往來を見ている。青年は独りで「ふんだいぶ広いな」「なかなか繁昌すると見える」「なんだ、妙な所へ姿見の広告などを出して」などと半分口のうちに云うかと思つたら、やがて洋袴の隠袋へ手を入れて「や、しまった。煙草を買つてくるのを忘れた」と大きな声を出した。

「煙草なら、ここにあるよ」と高柳君は「敷島」の袋を白い卓布の上へ抛り出す。

ところへ下女が御詔を持ってくる。煙草に火を点ける間はなかつた。

「これは樽<sup>たる</sup>麦酒だね。おい君樽麦酒の祝杯を一つ<sup>あ</sup>挙げようじゃないか」と青年は琥珀<sup>こはく</sup>色の底から湧<sup>わ</sup>き上がる泡<sup>あわ</sup>をぐいと飲む。

「何の祝杯を挙げるのだい」と高柳君は一口飲みながら青年に聞いた。

「卒業祝いさ」

「今頃卒業祝いか」と高柳君は手のついた洋盃<sup>コップ</sup>を下へおろしてしまった。

「卒業は生涯<sup>しよづがい</sup>にたった一度しかないんだから、いつまで祝ってもいいさ」

「たった一度しかないんだから祝わないでもいいくらいだ」

「僕とまるで反対だね。——姉さん、このフライは何だい。え？  
鮭か。ここん所へ君、このオレンジの露をかけて見たまえ」と青  
年は人指指ひとさしゆびと親指の間からちゅうと黄色い汁を鮭の衣ころもの上へ落  
す。庭の面おもてにはらはらと降る時雨しぐれのごとく、すぐ油の中へ吸い込  
まれてしまった。

「なるほどそうして食うものか。僕は装飾についてるのかと思っ  
た」

姿見の札幌麦酒さっぽろビールの広告の本もとに、大きくなつて構えていた二人の  
男が、この時急に大きな破われるような声を出して笑い始めた。高  
柳君はオレンジをつまんだまま、厭な顔をして二人を見る。二人

はいっこう構わない。

「いや行くよ。いつでも行くよ。エへへへへ。今夜行こう。あんまり気が早い。ハハハハハ」

「エへへへへ。いえね、実はね、今夜あたり君を誘って繰り出そうと思っていたんだ。え？　ハハハハ。なにそれほどでもない。

ハハハハ。そら例のが、あれでしょう。だから、どうにもこうにもやり切れないのさ。エへへへへ、アハハハハハハ」

土鍋どなべの底のような赭あかい顔が広告の姿見に写って崩くずれたり、かた

まったり、伸びたり縮んだり、傍若無人ぼうじやくぶじんに動揺している。高柳君

は一種異様な厭な眼つきを転じて、相手の青年を見た。

「商人だよ」と青年が小声に云う。

「実業家かな」と高柳君も小声に答えながら、とうとうオレンジを絞るのをやめてしまった。

土鍋の底は、やがて勘定を払って、ついでに下女にからかって、二階を買い切ったような大きな声を出して、そうして出て行った。

「おい中野君」

「むむ？」と青年は鳥の肉を口いっぱい頬張ほおばっている。

「あの連中れんじゅうは世の中を何と思ってるだろう」

「何とも思うものかね。ただああやって暮らしているのさ」

「羨<sup>うら</sup>やましいな。どうかして——どうもいかな」

「あんなものが羨しくっちゃ大変だ。そんな考だから卒業祝に同意しないんだろう。さあもう一杯景気よく飲んだ」

「あの人が羨ましいのじゃないが、ああ云う風に余裕があるような身分が羨ましい。いくら卒業したってこう奔命<sup>ほんめい</sup>に疲れちゃ、少しも卒業のありがた味はない」

「そうかなあ、僕なんぞ嬉<sup>うれ</sup>しくってたまらないがなあ。我々の生命はこれからだぜ。今からそんな心細い事を云っちゃあしようがない」

「我々の生命はこれからなのに、これから先が覚束<sup>おぼつか</sup>ないから厭<sup>いや</sup>に

なつてしまふのさ」

「なぜ？ 何もそう悲観する必要はないじゃないか、大<sup>おお</sup>にやるさ。僕もやる気だ、いっしょにやろう。大に西洋料理でも食つて——そらビステキが来た。これでおしまいだよ。君ビステキの生<sup>なま</sup>焼<sup>やき</sup>は消化がいいつて云うぜ。こいつはどうか」和中野君は洋刀<sup>ナイフ</sup>を揮<sup>ふる</sup>つて厚<sup>あつぎ</sup>切りの一<sup>いっぺん</sup>片を中央<sup>まんなか</sup>から切断した。

「なあるほど、赤い。赤いよ君、見たまえ。血が出るよ」

高柳君は何にも答えずにむしゃむしゃ赤いビステキを食い始めた。いくら赤くてもけつして消化がよさそうには思えなかった。

人にわが不平を訴えんとするとき、わが不平が徹底せぬうち、

先方から中途半把な慰藉いしやを与えらるるのは快こころよくないものだ。わが不平が通じたのか、通じないのか、本当に気の毒がるのか、御お世辞せじに気の毒がるのか分らない。高柳君はビステキの赤さ加減を眺ながめながら、相手はなぜこう感情が粗大そだいだろうと思った。もう少し切り込みたいと云う矢先やさきへ持って来て、ざああと水を懸かけるのが中野君の例である。不親切な人、冷淡な人ならば始めからそれ相応の用意をしてかかるから、いくら冷たくても驚ろく氣遣きづかいはない。中野君がかような人であつたなら、出鼻をはたかれてもさほどに口惜くやしくはなかつたろう。しかし高柳君の眼に映ずる中野輝なかのきい一ちは美しい、賢ちこい、よく人情を解して事理を弁わきまえた秀才であ

る。この秀才が折々この癖を出すのは解かいしにくい。

彼らは同じ高等学校の、同じ寄宿舎の、同じ窓に机を並べて生活して、同じ文科に同じ教授の講義を聴いて、同じ年のこの夏に同じく学校を卒業したのである。同じ年に卒業したものは両手の指を二三度屈するほどいる。しかしこの二人ぐらい親しいものはなかった。

高柳君は口数をきかぬ、人交ひとまじわりをせぬ、厭世家えんせいかの皮肉屋と云われた男である。中野君は鷹揚おつような、円満な、趣味に富んだ秀才である。この兩人ふたりが卒然まじわりと交を訂ていしてから、傍目はためにも不審と思われるくらい昵懇じっこんな間柄あいだがらとなった。運命は大島おおしまの表と秩父ちちぶの裏とを縫い

合せる。

天下に親しきものがただ一人<sup>ひとり</sup>あつて、ただこの一人よりほかに親しきものを見出し得ぬとき、この一人は親でもある、兄弟でもある。さては愛人である。高柳君は単なる朋友<sup>ほうゆう</sup>をもつて中野君を目<sup>もく</sup>してはおらぬ。その中野君がわが不平を残りに聞িয়েくれぬのは残念である。途中で夕立に逢つて思う所へ行かずに引き返したようなものである。残りなく聞いてくれぬ上に、呑氣<sup>のんき</sup>な慰藉<sup>いしや</sup>をかぶせられるのはなおさら残念だ。膿<sup>うみ</sup>を出してくれと頼んだ腫物<sup>しゅもつ</sup>を、いい加減の真綿<sup>まわた</sup>で、撫<sup>な</sup>で廻わされたつてむず痒<sup>がゆ</sup>いばかりである。

しかしこう思うのは高柳君の無理である。御雛様<sup>おひなさま</sup>に芸者の立<sup>た</sup>て  
引<sup>ひ</sup>きがないと云って攻撃するのは御雛様の恋を解<sup>かい</sup>せぬものの言草<sup>いぐさ</sup>  
である。中野君は富裕<sup>ふゆう</sup>な名門に生れて、暖かい家庭に育ったほ  
か、浮世の雨風は、炬燵<sup>こたつ</sup>へあたって、椽側<sup>えんがわ</sup>の硝子戸<sup>ガラスど</sup>越しに眺<sup>なが</sup>めたば  
かりである。友禅<sup>ゆうぜん</sup>の模様はわかる、金屏<sup>きんびよう</sup>の冴<sup>さ</sup>えも解<sup>かい</sup>せる、銀燭<sup>ぎんしよく</sup>の  
耀<sup>かがや</sup>きもまばゆく思う。生きた女の美しさはなおさらに眼に映る。  
親の恩、兄弟の情、朋友の信、これらを知らぬほどの木強漢<sup>ぼつきやうかん</sup>では  
無論ない。ただ彼の住む半球には今までいつでも日が照ってい  
た。日の照っている半球に住んでいるものが、片足をとんと地に  
突いて、この足の下に真暗な半球があると気がつくのは地理学を

習った時ばかりである。たまには歩いていて、気がつかぬとも限らぬ。しかしさぞ暗い事だろうと身に沁しみてぞつとする事はあるまい。高柳君はこの暗い所に淋しく住んでいる人間である。中野君とはただ大地を踏まえる足の裏が向き合っているというほかに何らの交渉もない。縫い合わされた大島の表と秩父の裏とは覚束おぼつかなき針の目を忍んで繋つなぐ、細い糸の御蔭おかげである。この細いものを、するすると抜けば鹿児島県と埼玉県の間には依然として何百里の山河さんがよこたが横わっている。歯を病やんだ事のないものに、歯の痛みを持って行くよりも、早く歯医者者に馳かけつけるのが近道だ。そう痛がらんでもいいさと云われる病人は、けっして慰藉を受けたと

は思うまい。

「君などは悲観する必要がないから結構だ」と、ビステキを半分で断念した高柳君は敷島をふかしながら、相手の顔を眺めた。相手は口をもがもがさせながら、右の手を首と共に左右に振ったのは、高柳君に同意を表しないのと見える。

「僕が悲観する必要がない？ 悲観する必要がないとすると、つまりおめでたい人間と云う意味になるね」

高柳君は覺えず、薄い唇を動かしかけたが、微かな漣は頬まで広がらぬ先に消えた。相手はなお言葉をつづける。

「僕だって三年も大学にいて多少の哲学書や文学書を読んでは

じゃないか。こう見えても世の中が、どれほど悲観すべきものであるかぐらいは知ってるつもりだ」

「書物の上でだろう」と高柳君は高い山から谷底を見下ろしたように云う。

「書物の上——書物の上では無論だが、実際だって、これでなかなか苦痛もあり煩悶はんもんもあるんだよ」

「だって、生活には困らないし、時間は充分あるし、勉強はしたいだけ出来るし、述作は思う通りにやれるし。僕に較くらべると君は実に幸福だ」と高柳君今度はさも羨うらやましそうに嘆息する。

「ところが裏面はなかなかそんな気楽なんじゃないさ。これでも

いろいろ心配があつて、いやになるのだよ」と中野君は強いて心配の所有権を主張している。

「そうかなあ」と相手は、なかなか信じない。

「そう君まで茶かしちゃ、いよいよつまらなくなる。実は今日あたり、君の所へでも出掛けて、大に同情してもらおうかと思つていたところさ」

「訳をきかせなくっちゃ同情も出来ないね」

「訳はだんだん話すよ。あんまり、くさくさするから、こうやつて散歩に来たくらいなものさ。ちつとは察するがいい」

高柳君は今度は公然とにやにやと笑った。ちつとは察するつも

りでも、察しようがないのである。

「そうして、君はまたなんで今頃公園なんか散歩しているんだね」と中野君は正面から高柳君の顔を見たが、

「や、君の顔は妙だ。日の射<sup>さ</sup>している右側の方は大変血色がいいが、影になってる方は非常に色沢<sup>いろつや</sup>が悪い。奇妙だな。鼻を境に矛盾<sup>むじ</sup>が睨<sup>ゆん</sup>めこをしている。悲劇と喜劇の仮面<sup>めん</sup>を半々につぎ合せたようだ」と息もつがず、述べ立てた。

この無心の評を聞いた、高柳君は心の秘密を顔の上で読まれたように、はっと思うと、右の手で額の方から顙<sup>あご</sup>のあたりまで、ぐりりと撫<sup>な</sup>で廻わした。こうして顔の上の矛盾をかき混<sup>ま</sup>ぜるつもり

なのかも知れない。

「いくら天気がよくっても、散歩なんかする暇ひまはない。今日は新橋の先まで遺失品を探さがしに行ってその帰りがけにちよつとついでだから、ここで休んで行こうと思って来たのさ」と顔を攪かき廻した手を顎あごの下へかって依然として浮かぬ様子をする。悲劇の面めんと喜劇の面をまぜ返えしたから通例の顔になるはずであるのに、妙に濁ったものが出来上ってしまった。

「遺失品で、何を落したんだい」

「昨日電車きのうの中で草稿そうごうを失って——」

「草稿？ そりや大変だ。僕は書き上げた原稿が雑誌へ出るまで

は心配でたまらない。実際草稿なんてものは、吾々われわれに取って、命より大切なものだからね」

「なに、そんな大切な草稿でも書ける暇があるようだといいいんだけれども——駄目だ」と自分を軽蔑けいべつしたような口調くちようで云う。

「じゃ何の草稿だい」

「地理教授法の訳やくだ。あしたまでに届けるはずにしてあるのだから、今なくなっちゃ原稿料も貰えず、またやり直さなくっちゃならず、実に厭いやになっちゃう」

「それで、探さがしに行っても出て来こないのかい」

「来ない」

「どうしたんだろう」

「おおかた車掌が、うちへ持って行って、はたきでも<sup>こじり</sup>捲えたんだろう」

「まさか、しかし出なくっちゃ困るね」

「困るなあ自分の不注意と我慢するが、その遺失品係りの厭<sup>いや</sup>な奴<sup>やつ</sup>だ事<sup>こと</sup>って——実に不親切で、形式的で——まるで版行<sup>はんこう</sup>におしたよ  
うな事を。ぺらぺらと一通り述べたが以上、何を聞いても知りませ  
ん知りませんで持ち切っている。あいつは廿世紀の日本人を代表  
している模範的人物だ。あすこの社長もきつとあんな奴<sup>やつ</sup>に違<sup>ちが</sup>な  
い」

「ひどく癢しやくに障さわったものだね。しかし世の中はその遺失品係りの  
ようなばかりじゃないからいいじゃないか」

「もう少し人間らしいのがいるかい」

「皮肉な事を云う」

「なに世の中が皮肉なのさ。今の世のなかは冷酷の競進きようしん会見たよ  
うなものだ」と云いながら呑みかけの「敷島」を二階の欄干てすりか  
ら、下へ抛なげる途端とたんに、ありがとうと云う声がして、ぬっと門口かどぐち  
を出た二人連ふたりづれの中折帽の上へ、うまい具合に燃殻もえがらが乗った。

男は帽子から煙を吐いて得意になって行く。

「おい、ひどい事をするぜ」と中野君が云う。

「なに過<sup>あやま</sup>ちだ。——ありや、さっきの実業家だ。構<sup>かま</sup>うもんか抛<sup>ほう</sup>つて置け」

「なるほどさっきの男だ。何で今までぐずぐずしていたんだろう。下で球<sup>たま</sup>でも突いていたのか知らん」

「どうせ遺失品係りの同類だから何でもするだろう」

「そら気がついた——帽子を取ってはたいている」

「ハハハ滑稽<sup>こっけい</sup>だ」と高柳君は愉快そうに笑った。

「随分人が悪いなあ」と中野君が云う。

「なるほど善くないね。偶然とは申しながら、あんな事で仇<sup>かたき</sup>を打つのは下等だ。こんな真似をして嬉<sup>うれ</sup>しがるようでは文学士の価値<sup>ねうち</sup>

もめちやめちやだ」と高柳君は瞬時にしてまた元の浮かぬ顔にかえる。

「そうさ」と中野君は非難するような賛成するような返事をする。

「しかし文学士は名前だけで、その実は筆耕ひつこうだからな。文学士にもなつて、地理教授法の翻訳の下働きしたばたらをやつてるようじゃ、心細い訳わけだ。それでも僕が卒業したら、卒業したらって待つてくれた親もあるんだからな。考えると気の毒なものだ。この様子じゃいつまで待つててくれたって仕方がない」

「まだ卒業したばかりだから、そう急に有名にはなれないさ。そ

のうち立派な作物を出して、大に本領を發揮する時に天下は我々  
のものとなるんだよ」

「いつの事やら」

「そう急いたって、いけない。追々新陳代謝してくるんだから、  
何でも気を永くして尻を据えてかからなくっちゃ、駄目だ。な  
に、世間じゃ追々我々の真価を認めて来るんだからね。僕なんぞ  
でも、こうやって始終書いていると少しは人の口に乗るからね」

「君はいいさ。自分の好きな事を書く余裕があるんだから。僕な  
んか書きたい事はいくらでもあるんだけれども落ちついて述作な  
ぞをする暇はとてもない。実に残念でたまらない。保護者でも

あつて、気楽に勉強が出来ると名作も出して見せるがな。せめて、何でもいいから、月々きまつて六十円ばかり取れる口があるといいのだけれども、卒業前から自活はしていたのだが、卒業してもやっぱりこんなに困難するだろうとは思わなかった」

「そう困難じゃ仕方がない。僕のうちの財産が僕の自由になると、保護者になつてやるんだがな」

「どうか願います。——実に厭いやになつてしまふ。君、今考えると田舎の中学の教師の口だつて、容易にあるもんじゃないな」

「そうだろうな」

「僕の友人の哲学科を出たものなんか、卒業してから三年になる

が、まだ遊あすんでるぜ」

「そうかな」

「それを考えると、子供の時なんか、訳もわからずに悪い事をしたもんだね。もっとも今とその頃とは時勢が違ちがうから、教師の口も今ほど払ふ底ていでなかったかも知れないが」

「何をしたんだい」

「僕の国の中学校に白井道也しらいどうやと云う英語の教師がいたんだがね」

「道也た妙な名だね。釜かまの銘めいにありそうじゃないか」

「道也どうやと読むんだか、何だか知らないが、僕らは道也、道也って

呼んだものだ。その道也先生がね——やっぱり君、文学士だぜ。

その先生をとうとうみんなして追い出してしまった」

「どうして」

「どうしてって、ただいじめて追い出しちゃったのさ。なに良い先生なんだよ。人物や何かは、子供だからまるでわからなかったが、どうも悪るい人じゃなかったらしい……」

「それで、なぜ追い出したんだい」

「それがさ、中学校の教師なんて、あれでなかなか悪るい奴がいるもんだぜ。僕らあ煽動せんどうされたんだね、つまり。今でも覚えているが、夜よる十五六人で隊を組んで道也先生うちの家の前へ行ってワーって呐喊とっかんして二つ三つ石を投げ込んで来るんだ」

「乱暴だね。何だって、そんな馬鹿な真似まねをするんだい」

「なぜだかわからない。ただ面白いからやるのさ。おそろく吾々の仲間でなぜやるんだか知ってたものは誰もあるまい」

「気楽だね」

「実に気楽さ。知ってるのは僕らを煽動せんどうした教師ばかりだろう。

何でも生意気なまいきだからやれって云うのさ」

「ひどい奴だな。そんな奴が教師にいるかい」

「いるとも。相手が子供だから、どうしても云う事を聞くからかも知れないが、いるよ」

「それで道也先生どうしたい」

「辞職しちまった」

「可哀想に」  
かわいそう

「実に気の毒な事をしたもんだ。定めし転任先をさがす間活計に  
かつけい  
困ったろうと思つてね。今度逢つたら大に謝罪の意を表するつもりだ」  
おおい

「今どこにいるんだい」

「どこにいるか知らない」

「じゃいつ逢うか知れないじゃないか」

「しかしいつ逢うかわからない。ことによると教師の口がなくなつて死んでしまったかも知れないね。——何でも先生辞職する前に

教場へ出て来て云った事がある」

「何て」

「諸君、吾々は教師のために生きべきものではない。道のために生きべきものである。道は尊たつといものである。この理窟りくつがわからないうちは、まだ一人前になつたのではない。諸君も精出してわかるようにおなり」

「へえ」

「僕らは不相変あいかわらず教場内でワーッと笑つたあね。生意気だ、生意気だつて笑つたあね。——どっちが生意気か分りやしない」

「随分田舎の学校などにや妙な事があるものだね」

「なに東京だって、あるんだよ。学校ばかりじゃない。世の中はみんなこれなんだ。つまらない」

「時にだいぶ長話しをした。どうだ君。これから品川の妙花園みょうかえんまで行かないか」

「何しに」

「花を見にさ」

「これから帰って地理教授法を訳さなくっちゃならない」

「一日いちんちぐらい遊んだってよかろう。ああ云う美しい所へ行く

と、好い心持ちになって、翻訳もはかが行くぜ」

「そうかな。君は遊びに行くのかい」

「遊<sup>あそび</sup>かたがたさ。あすこへ行つて、ちよつと写生して来て、材料にしようと思つてゐるんだがね」

「何の材料に」

「出来たら見せるよ。小説をかいてゐるんだ。そのうちの一章に女が花園<sup>はなぞの</sup>のなかに立つて、小さな赤い花を余念<sup>よねん</sup>なく見詰<sup>みつ</sup>めていると、その赤い花がだんだん薄くなつてしまひに真白になつてしまふと云うところを書いて見たいと思ふんだがね」

「空想小説かい」

「空想的で神秘的で、それで遠い昔しが何だかなつかしいような気持のするものが書きたい。うまく感じが出ればいいが。まあ出

来たら読んでくれたまえ」

「妙花園なんざ、そんな参考にやならないよ。それよりかうちへ帰ってホルマン・ハントの画<sup>え</sup>でも見る方がいい。ああ、僕も書きたい事があるんだがな。どうしても時がない」

「君は全体自然がきらいだから、いけない」

「自然なんて、どうでもいいじゃないか。この痛切な二十世紀にそんな気楽な事が云っていられるものか。僕のは書けば、そんな夢見たようなものじゃないんだからな。奇麗<sup>きれ</sup>でなくっても、痛

くっても、苦しくっても、僕の内面の消息にどこか、触れていればそれで満足するんだ。詩的でも詩的でなくっても、そんな事は

構わない。たとい飛び立つほど痛くつても、自分で自分の身体からだを切って見て、なるほど痛いなと云うところを充分書いて、人に知らせてやりたい。呑気のんきなものや気楽なものはとうてい夢にも想像し得られぬ奥の方にこんな事実がある、人間の本体はここにあるのを知らないかと、世の道楽ものに教えて、おやそうか、おれは、まさか、こんなものとは思っていなかったが、云われて見るとなるほど一言いちごんもない、恐れ入ったと頭を下げさせるのが僕の願なんだ。君とはだいぶ方角が違う」

「しかしそんな文学は何だか心持ちがわるい。——そりや御随意だが、どうだい妙花園みょうかえんに行く気はないかい」

「妙花園へ行くひまがあれば一頁ぺーじでも僕の主張をかくがなあ。何だか考えると身体がむずむずするようだ。実際こんなに呑のん気にして、生焼なまやきのビステッキなどを食っちゃいけないんだ」

「ハハハまたあせる。いいじゃないか、さっきの商人見たような連中れんじゅうもいるんだから」

「あんなのがいるから、こっちはなお仕事がしたくなる。せめて、あの連中の十分ぶ一の金と時があれば、書いて見せるがな」

「じゃ、どうしても妙花園は不賛成かね」

「遅くなるもの。君は冬服を着ているが、僕はいまだに夏服だから帰りに寒くなって風でも引くといけない」

「ハハハハ妙な逃げ路を発見したね。もう冬服の時節だあね。着換えればいい事を。君は万事無精ぶしやうだよ」

「無精で着換えないんじゃない。ないから着換えないんだ。この夏服だって、まだ一文も払っていやしない」

「そうなのか」と中野君は気の毒な顔をした。

午飯ひるめしの客は皆去り尽して、二人が椅子いすを離れた頃はところどころの卓布たくふの上に麵麩屑パンくずが淋しく散らばっていた。公園の中は最前よりも一層賑にぎやかである。ロハ台は依然として、どこの何某なにがしか知らぬ男と知らぬ女で占領されている。秋の日は赫かつとして夏服の背中を通す。

### 三

檜ひのきの扉とびらに銀のような瓦かわらを載のせた門を這はい入ると、御影みかげの敷石に水を打って、斜ななめに十歩ばかり歩あゆませる。敷石の尽きた所に擦すり硝ガラ子の開スき戸が左右から寂然じやくねんと鎖とぎされて、秋の更ふくるに任すがごとく邸内は物静かである。

磨みがき上げた、枳まさの柱に象牙ぞうげの臍へそをちよつと押すと、しばらくして奥の方から足音が近づいてくる。がちやと鍵かぎをひねる。玄関の扉は左右に開かれて、下は鏡のようなたたきとなる。右の方に周まわ圍り一尺余しゃくよの朱泥しゅでいまがいの鉢はちがあつて、鉢のなかには棕櫚竹しゅろちくが二三

本靡なびくべき風も受けずに、ひそやかに控えている。正面には高さ四尺きんぴようの金屏さんじように、三条この小鍛冶かじが、異形いぎようのものを相槌あいづちに、霊夢れいむに叶かなう、御門みかどの太刀たちを丁ちようと打ち、丁と打っている。

取次に出たのは十八九のしとやかな下女である。白井道也しらいどうやと云う名刺を受取ったまま、あの若旦那様で？ と聞く。道也先生は首かたむを傾けてちよつと考えた。若旦那にも大旦那にも中野と云う人に逢うのは今が始めてである。ことによるとまるで逢えないで帰るかも計はかられん。若旦那か大旦那かは逢って始めてわかるのである。あるいは分らないで生涯しやうがいそれぎりになるかも知れない。今まで訪問に出懸でかけて、年寄か、小供か、跛ちんぱか、眼つかちか、要領を

得る前に門前から追い還かえされた事は何遍もある。追い還されさえしなければ大旦那か若旦那かは問うところでない。しかし聞かれた以上はどっちか片づけなければならん。どうでもいい事を、どうでもよくないように決断しろと逼せまらるる事は賢者けんじゃが愚物ぐぶつに対して払う租税である。

「大学を御卒業になった方ほうの……」とまで云ったが、ことによると、おやじも大学を卒業しているかも知れんと心づいたから

「あの文学をおやりになる」と訂正した。下女は何とも云わずに御辞儀おじぎをして立って行く。白足袋しろたびの裏だけが目立ってよごれて見える。道也先生の頭の上には丸く鉄を鑄い抜ぬいた、かな灯籠とうろうがぶら

下がっている。波に千鳥をすかして、すかした所に紙が張ってある。このなかへ、どうしたら灯ひがつけられるのかと、先生は仰向あおもむいて長い鎖くさりを眺ながめながら考えた。

下女がまた出てくる。どうぞこちらへと云う。道也先生は親指の凹くぼんで、前緒まえおのゆるんだ下駄を立派な沓脱くつぬぎへ残して、ひよる長い糸瓜へちまのようなからだを下女の後ろから運んで行く。

応接間は西洋式に出来ている。丸い卓テーブルには、薔薇ばらの花を模様もように崩くずした五六輪を、淡い色で織り出したテーブル掛かけを、雑作ぞうさもなく引き被かぶせて、末は同じ色合の絨毯じゅうたんと、続つづくがごとく、切れたるがごとく、波を描えがいて床ゆかの上に落ちている。暖炉だんろは塞ふさいだままの

一尺前に、二枚折にまいおりの小屏風こびょうぶを穴隠しに立ててある。窓掛は緞子どんすの海老茶色えびちやいろだから少々全体の装飾上調和を破るようだが、そんな事は道也先生の眼には入らない。先生は生れてからいまだかつてこんな奇麗きれいな室へやへ這入はいった事はないのである。

先生は仰いで壁間へきかんの額を見た。京の舞子が友禅ゆうぜんの振袖ふりそでに鼓つづみを調べている。今打って、鼓から、白い指が弾はじき返されたばかりの姿が、小指の先までよくあらわれている。しかし、そんな事に気がつく道也先生ではない。先生はただ気品のない画えを掛けたものだと思っただけである。向むこうの隅すみにヌーボー式の書棚があつて、美しい洋書の一部が、窓掛の隙間すきまから洩もれて射さす光線に、金文字の

甲羅こうらを干ほしている。なかなか立派である。しかし道也先生これには毫ごうも辟易へきえきしなかった。

ところへ中野君が出てくる。紬つむぎの綿入ちりめんに縮緬へこおびの兵子帯へこおびをぐるぐる巻きつけて、金縁きんぶちの眼鏡めがね越しに、道也先生をまぼしそうに見て、

「や、御待たせ申しまして」と椅子へ腰をおろす。

道也先生は、あやしげな、銘仙めいせんの上を蔽おおうに黒木綿くろもめんの紋付をもつてして、嘉平次平かへいじひらの下へ両手を入れたまま、

「どうも御邪魔をします」と挨拶あいさつをする。泰然たいぜんたるものだ。

中野君は挨拶が済んでからも、依然としてまぼしそうにしていたが、やがて思い切った調子で

「あなたが、白井道也とおっしゃるんで」と大なる好奇心をもつて聞いた。聞かんでも名刺を見ればわかるはずだ。それをかように聞くのは世馴れぬ文学士だからである。

「はい」と道也先生は落ちついている。中野君のあては外れた。

中野君は名刺を見た時はっと思つて、頭のなかは追い出された中学校の教師だけになっている。可哀想だと云う念頭に尾羽うち枯らした姿を目前に見て、あなたが、あの中学校で生徒からいじめられた白井さんですかと聞き糺したくてならない。いくら気の毒でも白井違いで気の毒がったのでは役に立たない。気の毒がるためには、聞き糺すためには「あなたが白井道也とおっしゃるん

で」と切り出さなくってはならなかった。しかしせつかくの切り出しようも泰然たる「はい」のために無駄死むだじにをしてしまった。初心しんなる文学士は二の句をつぐ元氣も作略さりやくもないのである。人に同情を寄せたいと思うとき、向むこうが泰然の具足で身を固めていては芝居にはならん。器用なものはこの泰然の一角いっかくを針で突き透とおしても思おもを遂とげる。中野君は好人物ながらそれほどに人を取り扱い得るほど世の中を知らない。

「実は今日御邪魔に上がったのは、少々御願があって参ったのですが」と今度は道也先生の方から打って出る。御願は同情の好敵手である。御願を持たない人には同情する張り合がない。

「はあ、何でも出来ます事なら」と中野君は快く承知した。

「実は今度江湖雑誌こうこざっしで現代青年の煩悶はんもんに対する解決と云う題で諸先生方の御高説を発表する計画がありまして、それで普通の大家ばかりでは面白くないと云うので、なるべく新しい方もそれぞれ訪問する訳になりましたので——そこで実はちよつと往つて来てくれと頼まれて来たのですが、御差支おさしつかえがなければ、御話を筆記して参りたいと思います」

道也先生は静かに懷ふところから手帳と鉛筆を取り出した。取り出しはしたものの別に筆記したい様子もなければ強しいて話させたい景色けしきも見えない。彼はかかる愚ぐな問題を、かかる青年の口から解決し

て貰いたいとは考えていない。

「なるほど」と青年は、耀<sup>かが</sup>やく眼を挙<sup>あ</sup>げて、道也先生を見たが、先生は宵越<sup>よいごし</sup>の麦酒<sup>ビール</sup>のごとく気の抜けた顔をしているので、今度は「さよう」と長く引っ張って下を向いてしまった。

「どうでしょう、何か御説はありますまいか」と催促を義理ずくめにする。ありませんと云ったら、すぐ帰る気かも知れない。

「そうですね。あつたって、僕のようなものの云う事は雑誌へ載<sup>の</sup>せる価値はありませんよ」

「いえ結構です」

「全体どこから、聞いていらしたんです。あまり突然じゃ纏<sup>まと</sup>つ

た話の出来るはずがないですから」

「御名前は社主が折々雑誌の上で拝見するそうで」

「いえ、どうしまして」と中野君は横を向いた。

「何でもよいですから、少し御話し下さい」

「そうですね」と青年は窓の外を見て躊躇ちゆうちゆうしている。

「せっかく来たものですから」

「じゃ何か話しましょう」

「はあ、どうぞ」と道也先生鉛筆を取り上げた。

「いったい煩悶と云う言葉は近頃だいぶはやるようだが、大抵は当座のもので、いわゆる三日坊主みっかぼうずのものが多し。そんな種類の煩

悶は世の中が始まってから、世の中がなくなるまで続くので、ちつとも問題にはならないでしょう」

「ふん」と道也先生は下を向いたなり、鉛筆を動かしている。紙の上を滑<sup>すべ</sup>らす音が耳立って聞える。

「しかし多くの青年が一度は必ず陷<sup>おち</sup>る、また必ず陷るべく自然から要求せられている深刻な煩悶が一つある。……」

鉛筆の音がする。

「それは何だと云うと——恋である……」

道也先生はぴたりと筆記をやめて、妙な顔をして、相手を見た。中野君は、今さら気がついたようにちよつとしよげ返った

が、すぐ気を取り直して、あとをつづけた。

「ただ恋と云うと妙に御聞きになるかも知れない。また近頃はあまり恋愛呼ばりをするのを人が遠慮するようであるが、この種の煩悶はんもんは大なる事実おおいであって、事実の前にはいかなるものも頭を下げねばならぬ訳だからどうする事も出来ないのである」

道也先生はまた顔をあげた。しかし彼の長い蒼白あおしろい相貌そうぼうの一微いちみ塵じんだも動いておらんから、彼の心のうちは無論わからない。

「我々が生涯しょうがいを通じて受ける煩悶はんもんのうちで、もつとも痛切なもつとも深刻な、またもつとも劇烈な煩悶は恋よりほかにないだろうと思うのです。それですね、こう云う強大な威力のあるものだ

から、我々が一度<sup>ひとた</sup>びこの煩悶の炎火<sup>えんか</sup>のうちに入ると非常な変形を  
うけるのです」

「変形？　ですか」

「ええ形を変ずるのです。今まではただふわふわ浮いていた。世  
の中と自分の関係がよくわからないで、のんびんぐらりん暮らし  
していたのが、急に自分が明瞭<sup>めいりょう</sup>になるんです」

「自分が明瞭とは？」

「自分の存在がです。自分が生きているような心持が確然と出  
てくるのです。だから恋は一方から云えば煩悶に相違ないが、し  
かしこの煩悶を経過しないと自分の存在を生涯悟<sup>さと</sup>る事が出来ない

のです。この浄罪界に足を入れたものでなければ、けっして天国へは登れまいと思うのです。ただ楽天だっしょうがない。恋の苦<sup>くるし</sup>みを嘗<sup>な</sup>めて人生の意義を確かめた上の楽天でなくっちゃ、うそです。それだから恋の煩悶はけっして他の方法によって解決されない。恋を解決するものは恋よりほかにはないです。恋は吾人<sup>ごじん</sup>をして煩悶せしめて、また吾人をして解脱<sup>げだつ</sup>せしむるのである。……」

「そのくらいなところで」と道也先生は三度目に顔を挙げ<sup>あ</sup>げた。

「まだ少しあるんですが……」

「承<sup>うけたまわ</sup>るのはいいですが、だいたい多数の意見を載せるつもりですから、かえってあとから削除<sup>さくじょ</sup>すると失礼になりますから」

「そうですか、それじゃそのくらいにして置きましょう。何だかこんな話をするのは始めてですから、さぞ筆記しにくかったでしょう」

「いいえ」と道也先生は手帳を懐<sup>ふところ</sup>へ入れた。

青年は筆記者が自分の説を聴いて、感心の余り少しは賛辞でも呈するかと思つたが、相手は例のごとく泰然としてただいいえと云つたのみである。

「いやこれは御邪魔をしました」と客は立ちかける。

「まあいいでしょう」と中野君はとめた。せめて自分の説を少々でも批評して行つて貰いたいのである。それでなくても、せん

だって日比谷で聞いた高柳君の事をちよつと好奇心から、あたつて見たいのである。一言<sup>いちごん</sup>にして云えば中野君はひまなのである。

「いえ、せっかくですが少々急ぎますから」と客はもう椅子<sup>いす</sup>を離れて、一步テーブルを退<sup>しりぞ</sup>いた。いかにひまな中野君も「それでは」とついに降参して御辞儀<sup>おじぎ</sup>をする。玄関まで送って出た時思い切つて

「あなたは、もしや高柳周作<sup>たかやなぎしゅうさく</sup>と云う男を御存じじやないですか」と念晴<sup>ねんば</sup>らしのため聞いて見る。

「高柳？ どうも知らんようです」と沓脱<sup>くつぬぎ</sup>から片足をタタキへおろして、高い背を半分後ろへ振<sup>ね</sup>じ向けた。

「ことし大学を卒業した……」

「それじゃ知らん訳だ」と両足ともタタキの上へ運んだ。

中野君はまだ何か云おうとした時、敷石をがらと車の軋きしる音がして梶棒かじぼうは硝子ガラスの扉とびらの前にとまった。道也先生が扉を開く途とた端んに車上の人はひらり厚い雪駄せったを御影みかげの上に落した。五色の雲がわが眼を掠かすめて過ぎた心持ちで往来へ出る。

時計はもう四時過ぎである。深い碧みどりの上へ薄いセピアを流した空のなかに、はつきりせぬ鳶とびが一羽舞っている。雁かりはまだ渡つて来ぬ。向むこうから袴はかまの股立ももだちを取った小供が唱歌を謡うたいながら愉快そうにあるいて来た。肩に担かついだ笹ささの枝には草の穂で作った梟ふくろが

踊りながらぶら下がって行く。おおかた雑子ヶ谷へでも行つたのだらう。軒の深い菓物屋くだものやの奥の方に柿ばかりがあかるく見える。夕暮に近づくとはとなくうそ寒い。

薬王寺前やくおうじまえに来たのは、帽子の庇ひさしの下から往来ゆききの人の顔がしかと見分けのつかぬ頃である。三十三所じよと彫ほつてある石標せきひょうを右に見て、紺屋こんやの横町を半丁ほど西へ這入はいるとわが家の門口かどぐちへ出る、家のなかいえは暗い。

「おや御帰り」と細君が台所で云う。台所も玄関も大した相違のないほど小さな家である。

「下女はどっかへ行つたのか」と二畳の玄関から、六畳の座敷へ

通る。

「ちよつと、柳町まで使に行きました」と細君はまた台所へ引き返す。

道也先生は正面の床の片隅に寄せてあつた、洋灯を取つて、椽側へ出て、手ずから掃除を始めた。何か原稿用紙のようなもので、油壺を拭き、ほやを拭き、最後に心の黒い所を好い加減になすくつて、丸めた紙は庭へ棄てた。庭は暗くなつて様子が頓とわからない。

机の前へ坐つた先生は燐寸を擦つて、しゅつと云う間に火をランプに移した。室はたちまち明かになる。道也先生のために云え

ばむしろ明かるくならぬ方が増しである。床はあるが、言訳ばかりで、現に幅も何も懸っておらん。その代り累々と書物やら、原稿紙やら、手帳やらが積んである。机は白木の三宝を大きくしたくらいな単簡なもので、インキ壺と粗末な筆硯のほかには何物をも載せておらぬ。装飾は道也先生にとって不必要であるのか、または必要でもこれに耽る余裕がないのかは疑問である。ただ道也先生がこの一点の温気なき陋室に、晏如として筆硯を呵するの勇氣あるは、外部より見て争うべからざる事実である。ことによると先生は装飾以外のあるものを目的にして、生活しているのかも知れない。ただこの争うべからざる事実を確めれば、確かめるほ

ど細君は不愉快である。女は装飾をもつて生れ、装飾をもつて死ぬ。多数の女はわが運命を支配する恋さえも装飾視して憚<sup>はば</sup>からぬものだ。恋が装飾ならば恋の本尊たる愛人は無論装飾品である。否<sup>いな</sup>、自己自身すら装飾品をもつて甘んずるのみならず、装飾品をもつて自己を目<sup>もく</sup>してくれぬ人を評して馬鹿と云う。しかし多数の女はしかく人世を觀<sup>かん</sup>ずるにもかかわらず、しかく觀ずるとはけっして思わない。ただ自己の周圍を纏綿<sup>てんめん</sup>する事物や人間がこの装飾用の目的に叶<sup>かな</sup>わぬを発見するとき、何となく不愉快を受ける。不愉快を受けると云うのに周圍の事物人間が依然として旧態をあらためぬ時、わが眼に映ずる不愉快を左右前後に反射して、これで

も改めぬかと云う。ついにはこれでもか、これでもかと念入りの不愉快を反射する。道也の細君がここまで進歩しているかは疑問である。しかし普通一般の女性であるからには装飾気なきこの空気のうちに生息<sup>せいそく</sup>する結果として、自然この方向に進行するのが順当であろう。現に進行しつつあるかも知れぬ。

道也先生はやがて懐<sup>ふところ</sup>から例の筆記帳を出して、原稿紙の上へ写し始めた。袴<sup>はかま</sup>を着けたままである。かしこまったままである。袴を着けたまま、かしこまったまままで、中野輝一<sup>なかのきいち</sup>の恋愛論を筆記している。恋とこの室<sup>へや</sup>、恋とこの道也とはとうてい調和しない。道也は何と思って浄書しているかしらん。人は様々である、世も

様々である。様々の世に、様々の人が動くのもまた自然の理である。ただ大きく動くものが勝ち、深く動くものが勝たねばならぬ。道也は、あの金縁きんぐちの眼鏡めがねを掛けた恋愛論よりも、小さくかつ浅いと自覚して、かく慎重に筆記を写し直しているのであるうか。床とこの後ろうしで※こおろぎ（虫十車）が鳴いている。

細君が襖ふすまをすうと開けた。道也は振り向きもしない。「まあ」と云ったなり細君の顔は隠れた。

下女は帰ったようである。煮豆にまめが切れたから、てっか味噌みそを買って来たと云っている。豆腐とうふが五厘高くなつたと云っている。裏の専念寺で夕ゆづべの御務おつとめをかあんかあんやっている。

細君の顔がまた襖の後ろから出た。

「あなた」

道也先生は、いつの間にやら、筆記帳を閉じて、今度はまた別の紙へ、何か熱心に認<sup>したた</sup>めている。

「あなた」と妻君は二度呼んだ。

「何だい」

「御飯です」

「そうか、今行くよ」

道也先生はちよつと細君と顔を合せたぎり、すぐ机へ向った。

細君の顔もすぐ消えた。台所の方でくすくす笑う声がする。道也

先生はこの一節をかき終るまでは飯も食いたくないのだろう。やがて句切りのよい所へ来たと見えて、ちよつと筆を擱おいて、傍そばへ積んだ草稿をはぐつて見て「二百三十一頁ページ」と独語した。著述でもしていると見える。

立って次の間へ這入はいる。小さな長火鉢ながひばちに平鍋ひらなべがかかって、白い豆腐が煙りを吐はいて、ふるふる顫ふるえている。

「湯豆腐かい」

「はあ、何にもなくて、御氣の毒ですが……」

「何、なんでもいい。食ってさえいれば何でも構わない」と、膳ぜんにして重箱じゅうけいをかねたるごとき四角なものの前へ坐はつて箸はしを執とる。

「あら、まだ袴はかまを御脱ぎなさらないの、随分ね」と細君は飯を盛った茶碗を出す。

「忙いそがしいものだから、つい忘れた」

「求めて、忙おもがしい思いをしていらつしやるのだから、……」と

云ったぎり、細君は、湯豆腐の鍋なべと鉄瓶てつびんとを懸かけ換かえる。

「そう見えるかい」と道也先生は存外平気である。

「だって、樂で御金の取れる口は断っておしまいなすって、忙がしくって、一文にもならない事ばかりなさるんですもの、誰だだつて酔興すいきやうと思いますわ」

「思われてもしょうがない。これがおれの主義なんだから」

「あなたは主義だからそれでいいでしょうさ。しかし私は……」

「御前は主義が嫌だと云うのかね」

「嫌も好もないんですけれども、せめて——人並には——なんぼ私だって……」

「食えさえすればいいじゃないか、贅沢を云や誰だって際限はない」

「どうせ、そうでしょう。私なんざどんなになっても御構いなすっちゃ下さらないのでしょ」

「このてっか味噌は非常に辛いな。どこで買って来たのだ」

「どこですか」

道也先生は頭をあげて向の壁を見た。鼠色の寒い色の上に大きな細君の影が写っている。その影と妻君とは同じように無意義に道也の眼に映じた。

影の隣りに糸織かとも思われる、女の晴衣が衣紋竹につるしてかけてある。細君のものにしては少し派出所過ぎるが、これは多少景気のいい時、田舎で買ってやったものだ。と今だに記憶している。あの時分は今とはだいぶ考えも違っていた。己れと同じような思想やら、感情やら持っているものは珍らしくあるまいと信じていた。したがって文筆の力で自分から卒業して世間を警醒しようとうと云う気にもならなかった。

今はまるで反対だ。世は名門を謳歌おうかする、世は富豪を謳歌する、世は博士、学士までをも謳歌する。しかし公正な人格に逢うて、位地を無にし、金銭を無にし、もしくはその学力、才芸を無にして、人格そのものを尊敬する事を解しておらん。人間の根本義たる人格に批判の標準を置かずして、その上うわ皮かわたる附属物をもつてすべてを律しようとする。この附属物と、公正なる人格と戦うとき世間は必ず、この附属物に雷同らうどうして他の人格を蹂躪じゅうりくせんと試みる。天下一人いちにんの公正なる人格を失うとき、天下一段の光明を失う。公正なる人格は百の華族、百の紳商しんしょう、百の博士をもつてするも償つぐないがたきほど貴たつときものである。われはこの人格を維持せ

んがために生れたるのほか、人世において何らの意義をも認め得ぬ。寒に衣し、餓に食するはこの人格を維持するの一便法に過ぎぬ。筆を呵し硯を磨するのもまたこの人格を他の面上に貫徹するの方策に過ぎぬ。——これが今の道也の信念である。この信念を抱いて世に処する道也は細君の御機嫌ばかり取ってはおれぬ。

壁に掛けてあつた小袖を眺めていた道也はしばらくして、夕飯を済ましながら、

「どこぞへ行つたのかい」と聞く。

「ええ」と細君は二字の返事を与えた。道也は黙って、茶を飲んでゐる。末枯るる秋の時節だけにすこぶる閑静な問答である。

「そう、べんべんと真田さなだの方を引っ張つとく訳わけにも行きませず、家主の方もどうかしなければならず、今月の末になると米薪こめまきの払はらいでまた心配しなくっちゃなりませんから、算段さんだんに出掛でけたんです」と今度は細君の方から切り出した。

「そうか、質屋へでも行つたのかい」

「質に入れるようなものは、もうありやしませんわ」と細君は恨うらめしそうに夫の顔を見る。

「じゃ、どこへ行つたんだい」

「どこって、別に行く所ありませんから、御兄おあにいさんの所へ行き  
ました」

「兄の所<sup>ところ</sup>？ 駄目<sup>だめ</sup>だよ。兄の所<sup>ところ</sup>なんぞへ行<sup>い</sup>ったって、何になるものか」

「そう、あなたは、何でも始<sup>は</sup>から、けなしておしまいなさるか  
ら、よくないんです。いくら教育<sup>きょういく</sup>が違<sup>ちが</sup>うからって、気性<sup>きしょう</sup>が合<sup>あ</sup>わな  
いからって、血<sup>ち</sup>を分<sup>わ</sup>けた兄弟<sup>けいだい</sup>じゃありませんか」

「兄弟<sup>けいだい</sup>は兄弟<sup>けいだい</sup>さ。兄弟<sup>けいだい</sup>でないとは云<sup>い</sup>わん」

「だからさ、膝<sup>ひざ</sup>とも談合<sup>だんごう</sup>と云<sup>い</sup>うじゃありませんか。こんな時<sup>とき</sup>に  
は、ちつと相談<sup>さうだん</sup>にいらっしやるがいいじゃありませんか」

「おれは、行<sup>い</sup>かんよ」

「それが瘦<sup>やせ</sup>我慢<sup>がまん</sup>ですよ。あなたはそれが癖<sup>くせ</sup>なんですよ。損<sup>そん</sup>じや

あ、ありませんか、好んで人に嫌きらわれて……」

道也先生は空然くうぜんとして壁に動く細君の影を見ている。

「それで才覚が出来たのかい」

「あなたは何でも一足飛いっそくとびね」

「なにが」

「だって、才覚が出来る前にはそれぞれ魂胆こんたんもあれば工面くめんもある  
じゃありませんか」

「そうか、それじゃ最初から聞き直そう。で、御前が兄のうちへ  
行ったんだね。おれに内所ないしょで」

「内所だって、あなたのためじゃありませんか」

「いいよ、ためでいいよ。それから」

「で御兄おあにいさんに、御目に懸かっているいろいろ今までの御無沙汰ごぶさたの御詫おわびやら、何やらして、それから一部始終いちぶしじゆうの御話をしたんです」

「それから」

「すると御兄おあにいさんが、そりや御前には大変気の毒だつて大変私わたくしに同情して下さい……」

「御前に同情した。ふうん。——ちよつとその炭取を取れ。炭をつがないと火種ひだねが切れる」

「で、そりや早く整理しなくっちゃ駄目だ。全体なぜ今まで抛ほうつて置いたんだつておっしゃるんです」

「旨い事を云わあ」  
うま

「まだ、あなたは御兄さんおあにいを疑っていらっしやるのね。罰があたりますよ」

「それで、金でも貸したのかい」

「ほらまた一足いっそくと飛びをなさる」

道也先生は少々おかしくなったと見えて、にやりと下を向きながら、黒く積んだ炭を吹き出した。

「まあどのくらいあれば、これまでの穴が奇麗きれいに埋うまるのかと御聞きになるから、——よっぽど言い悪にくかったんですけれども——とうとう思い切ってね……」でちよつと留めた。道也はしきりに吹

いている。

「ねえ、あなた。とうとう思い切ってね——あなた。聞いていらっしやらないの」

「聞いてるよ」と赫<sup>かっ</sup>気で赤くなつた顔をあげた。

「思い切って百円ばかりと云つたの」

「そうか。兄は驚ろいたろう」

「そうしたらね。ふうんて考えて、百円と云う金は、なかなか容易に都合がつく訳のものじゃない……」

「兄の云いそうな事だ」

「まあ聞いていらっしやい。まだ、あとが有るんです。——しか

し、ほかの事とは違ふから、是非なければ困ると云うならおれが保証人になつて、人から借りてやつてもいいって仰しやるんです」

「あやしいものだ」

「まあさ、しまいまで御聞きなさい。——それで、ともかくも本人に逢つて篤とくと了簡りようけんを聞いた上にしようとするところまでに漕こぎつけて来たのです」

細君は大功名をしたように頬骨ほおぼねの高い顔を持ち上げて、夫おつとを覗のぞき込んだ。細君の眼つきが云う。夫は意気地いくじなしである。終日終夜、机と首っ引をして、兀々こつこつと出精しゅっせいしながら、妻さいと自分を安らか

に養うほどの働きもない。

「そうか」と道也は云ったぎり、この手腕に対して、別段に感謝の意を表しようともせぬ。

「そうかじゃ困りますわ。私がここまで拵えたのだから、あとは、あなたが、どうとも為さ<sup>な</sup>らなくっちゃあ。あなたの楫<sup>かじ</sup>のとりようでせつかくの私の苦心も何の役にも立たなくなりますわ」

「いいさ、そう心配するな。もう一カ月もすれば百や貳百の金は手に這<sup>はい</sup>入る見込があるから」と道也先生は何の苦もなく云って退<sup>の</sup>けた。

江湖雑誌<sup>こうこざっし</sup>の編輯<sup>へんしゆつ</sup>で二十円、英和字典の編纂<sup>へんさん</sup>で十五円、これが道

也のきまつた収入である。但ただしこのほかに仕事はいくらでもする。新聞にかく、雑誌にかく。かく事においては毎日毎夜筆を休ませた事はないくらいである。しかし金にはならない。たまさか二円、三円の報酬が彼の懐ふところに落つる時、彼はかえって不思議に思うのみである。

この物質的に何らの機能もない述作的労力の裡うちには彼の生命がある。彼の気魄きはくが滴々てきてきの墨汁ぼくじゅうと化して、一字一画に満腔まんこうの精神が飛動している。この断篇が読者の眼に映じた時、瞳裏とうりに一道の電流を呼び起して、全身の骨肉が刹那せつなに震えふるかすと念じて、道也は筆を執とる。吾輩は道を載のす。道を遮さえぎるものは神といえども許さ

ずと誓って紙に向う。誠は指頭しとうより迸ほとばしって、尖とがる毛穎もうえいの端たんに紙を  
焼く熱気あるがごとき心地にて句を綴つづる。白紙が人格と化して、  
淋漓りんりとして飛騰ひとうする文章があるとすれば道也の文章はまさにこれ  
である。されども世は華族、紳商、博士、学士の世である。附属  
物が本体を踏み潰つぶす世である。道也の文章は出るたびに黙殺せら  
れている。妻君は金にならぬ文章を道楽文章と云う。道楽文章を  
作るものを意気地いくじなしと云う。

道也の言葉を聞いた妻君は、火箸ひばしを灰のなかに刺したまま、  
「今でも、そんな御金が這入はいる見込があるんですか」と不思議そ  
うに尋ねた。

「今は昔より下落したと云うのかい。ハハハハハ」と道也先生は大きな声を出して笑った。妻君は毒氣どっきを抜かれて口をあける。

「どうりや一勉強ひとべんきょうやろうか」と道也は立ち上がる。その夜彼は彼の著述人格論を二百五十頁までかいた。寝たのは二時過である。

## 四

「どこへ行く」と中野君が高柳君をつらまえた。所は動物園の前である。太い桜の幹みきが黒ずんだ色のなかから、銀のような光りを秋の日に射返して、梢こずえを離れる病葉わくらばは風なき折々こゝろ行人じんの肩にかか

る。足元には、ここかしこに枝を辞したる古い奴<sup>やつ</sup>ががさついている。

色は様々である。鮮血を日に曝<sup>さら</sup>して、七日<sup>なぬか</sup>の間日<sup>ひ</sup>ごとにその変化を葉裏に印して、注意なく一枚のなかに畳み込めたら、こんな色になるだろうと高柳君はさつきから眺<sup>なが</sup>めていた。血を連想した時高柳君は腋<sup>わき</sup>の下から何か冷たいものが襯衣<sup>シャツ</sup>に伝わるような気分がした。ごほんと取り締りのない咳<sup>せき</sup>を一つする。

形も様々である。火にあぶったかき餅<sup>もち</sup>の状<sup>なり</sup>は千差万別であるが、我も我もとみんな反<sup>そ</sup>り返<sup>かえ</sup>る。桜の落葉もがさがさに反<sup>そ</sup>り返<sup>かえ</sup>つて、反り返ったまま吹く風に誘われて行く。水気<sup>みずけ</sup>のないものには

未練も執着もない。飄々<sup>ひょうひょう</sup>としてわが行末を覚束<sup>おぼつか</sup>ない風に任せて平気なのは、死んだ後の祭り<sup>あと</sup>に、から騒ぎにはしゃぐ了簡<sup>りょうけん</sup>かも知れぬ。風にめぐる落葉と攫<sup>さら</sup>われて行くかな屑<sup>くず</sup>とは一種の氣狂<sup>きちがい</sup>である。ただ死したるものの氣狂である。高柳君は死と氣狂とを自然界に点綴<sup>てんてつ</sup>した時、瘠<sup>や</sup>せた両肩を聳<sup>そび</sup>やかして、またごほんと云うつろな咳<sup>せき</sup>を一つした。

高柳君はこの瞬間に中野君からつらまえられたのである。ふと氣がついて見ると世は太平である。空は朗らかである。美しい着物<sup>もの</sup>をきた人が続々行く。相手は薄羅紗<sup>うすらしや</sup>の外套<sup>がいとう</sup>に恰好<sup>かつこう</sup>のいい姿を包んで、顚<sup>あご</sup>の下に真珠の留針<sup>とめはり</sup>を輝かしている。——高柳君は相手の

姿を見守ったなり黙っていた。

「どこへ行く」と青年は再び問うた。

「今図書館へ行った帰りだ」と相手はようやく答えた。

「また地理学教授法じゃないか。ハハハハ。何だか不景気な顔をしているね。どうかしたかい」

「近頃は喜劇の面をどこかへ遺失してしまった」

「また新橋の先まで探がしに行つて、拳突を喰ったんじゃないか。つまらない」

「新橋どころか、世界中探がしてあるいても落ちていそうもない。もう、御やめだ」

「何を」

「何でも御やめだ」

「万事御やめか。当分御やめがよからう。万事御やめにして僕と  
いっしょに来たまえ」

「どこへ」

「今日はそこに慈善音楽会があるんで、切符を二枚買わされたん  
だが、ほかに誰も行き手<sup>い</sup>がないから、ちようどいい。君行きたま  
え」

「いらない切符などを買うのかい。もつたいたない事をするんだ  
な」

「なに義理だから仕方がない。おやじが買ったんだが、おやじは西洋音楽なんかわからないからね」

「それじゃ余った方を送ってやればいいのに」

「実は君の所へ送ろうと思ったんだが……」

「いいえ。あすこへさ」

「あすことは。——うん。あすこか。何、ありや、いいんだ。自分でも買ったんだ」

高柳君は何とも返事をしないで、相手を真正面から見ている。

中野君は少々恐縮の微笑を洩<sup>も</sup>らして、右の手に握ったままの、山<sup>や</sup>羊<sup>ぎ</sup>の手袋で外套<sup>がいとう</sup>の胸をぴしゃぴしゃ敲<sup>たた</sup>き始めた。

「穿<sup>は</sup>めもしない手袋を握<sup>は</sup>つてあるいてるのは何のためだい」

「なに、今ちよつと隠<sup>ポケット</sup>袋から出したんだ」と云いながら中野君は、すぐ手袋をかくしの裏<sup>うち</sup>に収めた。高柳君の癩<sup>かんしゃく</sup>癩はこれで少々治<sup>さ</sup>まつたようである。

ところへ後ろからエーイと云う掛<sup>ひづめ</sup>声がして蹄の音が風を動かしてくる。兩人<sup>ふたり</sup>は足早に道傍<sup>みちばた</sup>へ立ち退<sup>の</sup>いた。黒塗<sup>くろぬり</sup>のランドー<sup>おおい</sup>の蓋を、秋の日の暖かきに、払い退けた、中には絹帽<sup>シルクハット</sup>が一つ、美しい紅<sup>くれな</sup>いの日傘<sup>ひがさ</sup>が一つ見えながら、兩人の前を通り過ぎる。

「ああ云う連中が行くのかい」と高柳君が顎<sup>あご</sup>で馬車の後ろ影を指<sup>さ</sup>す。

「あれは徳川侯爵だよ」と中野君は教えた。

「よく、知ってるね。君はあの人の家来かい」

「家来じゃない」と中野君は真面目に弁解した。高柳君は腹のなかでまたちよつと愉快を覚えた。

「どうだい行こうじゃないか。時間がおくれるよ」

「おくれると逢えないと云うのかね」

中野君は、すこし赤くなった。怒ったのか、弱点をつかれたためか、恥ずかしかつたのか、わかるのは高柳君だけである。

「とにかく行こう。君はなんでも人の集まる所やなにかを嫌ってばかりいるから、一人坊<sup>ひとりぼ</sup>っちになつてしまふんだよ」

打つものは打たれる。参るのは今度こそ高柳君の番である。一人坊っちと云う言葉を聞いた彼は、耳がしいんと鳴って、非常に淋しい気持がした。

「いやかい。いやなら仕方がない。僕は失敬する」

相手は同情の笑を湛<sup>たた</sup>えながら半歩踵<sup>くびす</sup>をめぐらしかけた。高柳君はまた打たれた。

「いこう」と単簡<sup>たんかん</sup>に降参する。彼が音楽会へ臨むのは生れてから、これが始めてである。

玄関にかかった時は受付が右へ左りへの案内で忙殺<sup>ぼうさつ</sup>されて、接待掛りの胸につけた、青いリボンを見失うほど込み合っていた。

突き当りを右へ折れるのが上等で、左りへ曲がるのが並等である。下等はないそうだ。中野君は無論上等である。高柳君を顧みながら、こつちだよと、さも物馴ものなれたさまに云う。今日に限つて、特別に下等席を設けて貰つて、そこへ自分だけ這入はいつて聴きいて見たいと一人坊つちの青年は、中野君のあとをつきながら階段を上ぼりつつ考えた。己おのれの右を上のぼる人も、左りを上る人も、またあとからぞろぞろついて来るものも、皆異種類の動物で、わざと自分を包囲して、のっぴきさせず二階の大広間へ押し上げた上、あとから、慰み半分に手を拍うつて笑う策略さくりやくのように思われた。後ろを振り向くと、下から緑みどりの滴したたる束髪そくはつの脳巔のうてんが見え

る。コスメチックで奇麗きれいな一直線を七分三分の割合に鍊ねり出した頭蓋骨ずがいこつが見える。これらの頭が十も二十も重なり合って、もう高柳周作は一步でも退く事はならぬとせり上がってくる。

樂堂の入口を這はい入ると、霞かすみに酔うた人のようにぼうつとした。

空を隠す茂みのなかを通り抜けて頂いただきに攀よじ登った時、思いも寄らぬ、眼の下に百里の眺めながが展開する時の感じはこれである。演奏台は遙はるかの谷底にある。近づくためには、登り詰めた頂から、規則正しく排列された人間の間を一直線に縫うがごとくに下りて、自然と逼せまる擂鉢すりばちの底に近寄らねばならぬ。擂鉢すりばちの底は半円形を劃して空に向って広がる内側面には人間の堀へいが段々に横輪をえがい

ている。七八段を下りた高柳君は念のために振り返って摺鉢の側面を天井まで見上げた時、目がちらちらしてちよつと留つた。cuse me と云つて、大きな異人が、高柳君を蔽いかぶせるようにして、一段下へ通り抜けた。駝鳥の白い毛が鼻の先にふらつて、品のいい香りがふんとする。あとから、脳巔の禿げた大男が絹帽を大事そうに抱えて身を横にして女につきながら、二人を擦り抜ける。

「おい、あすここに椅子が二つ空いている」と物馴れた中野君は階段を横へ切れる。並んでいる人は席を立てて二人を通す。自分だけであつたら、誰も席を立ててくれるものはあるまいと高柳君は

思った。

「大変な人だね」と椅子に腰をおろしながら中野君は満場を見廻わす。やがて相手の服装に気がついた時、急に小声になって、

「おい、帽子をとらなくっちゃ、いけないよ」と云う。

高柳君は卒然として帽子を取って、左右をちよつと見た。三四人の眼が自分の頭の上に注<sup>そそ</sup>がれていたのを発見した時、やっぱり包囲攻撃だと思った。なるほど帽子を被<sup>かぶ</sup>っていたものはこの広い演奏場に自分一人である。

「外套<sup>がいとう</sup>は着ていてもいいのか」と中野君に聞いて見る。

「外套は構わないんだ。しかしあつ過ぎるから脱ごうか」と中野

君はちよつと立ち上がつて、外套の襟えりを三寸ばかり颯さと返したら、左の袖そでがするりと抜けた、右の袖を抜くとき、領えりのあたりをつまんだと思つたら、裏を表おもてに、外套ははや置まれて、椅子いすの背中せなかを早くも隠した。下は仕立したておろしのフロックに、近頃流行はやる白いスリッパが胴衣チョッキの胸開むねあきに沿うて細い筋を奇麗きれいにあらわしている。高柳君はなるほどいい手際てぎわだと羨ましく眺めていた。中野君はどう云いうものか容易に坐らない。片手を椅子の背に凭もたせて、立ちながら後ろから、左右へかけて眺めている。多くの人の視線は彼の上に落ちた。中野君は平気である。高柳君はこの平気をまた羨ましく感じた。

しばらくすると、中野君は千以上陳列せられたる顔のなかで、  
ようやくあるものを物色し得たごとく、豊かなる双頬そつきょうに愛嬌あいぎょうの渦うず  
を浮かして、軽く何人なんびとにか会釈えしやくした。高柳君は振り向かざるを得  
ない。友の挨拶あいさつはどの辺へんに落ちたのだろうと、こそばゆくも首を  
振ねじ向けて、斜ななめに三段ばかり上を見ると、たちまち目つかつ  
た。黒い髪かみのただ中に黄の勝った大きなリボンの蝶ちょうを颯さつとひらめ  
かして、細くうねる頸筋くびすじを今真直に立て直す女の姿が目つかつ  
た。紅くれないは眼の縁ふちを薄く染めて、潤うるった眼睫まつげの奥から、人の世を  
夢の底に吸い込むような光りを中野君の方に注いでいる。高柳君  
はすわやと思った。

わが穿く袴は小倉である。羽織は染めが剥げて、濁った色の上に垢が容赦なく日光を反射する。湯には五日前に這入ったぎりだ。襯衣を洗わざる事は久しい。音楽会と自分とはとうてい両立するものでない。わが友と自分とは？——やはり両立しない。友のハイカラ姿とこの魔力ある眼の所有者とは、千里を隔てても無線の電気がかかるべく作られている。この一堂の裡に綺羅の香りを嗅ぎ、和楽の温かみを吸うて、落ち合うからは、二人の魂は無論の事、溶けて流れて、かき鳴らす箏の線の細きうちにも、めぐり合わねばならぬ。演奏会は数千の人を集めて、数千の人はことごとく双手を挙げながらこの二人を歓迎している。同じ数千の人

はことごとく五指を弾いて、われ一人を排斥している。高柳君はこんな所へ来なければよかったと思った。友はそんな事を知りようがない。

「もう時間だ、始まるよ」と活版に刷った曲目を見ながら云う。

「そうか」と高柳君は器械的に眼を活版の上に落した。

一、バイオリン、セロ、ピアノ合奏とある。高柳君はセロの何物たるを知らぬ。二、ソナタ……ベートーベン作とある。名前だけには心得ている。三、アダジヨ……パージュアル作とある。これも知らぬ。四、と読みかけた時拍手の音が急に梁を動かして起つた。演奏者はすでに台上に現われている。

やがて三部合奏曲は始まった。満場は化石したかのごとく静かである。右手の窓の外に、高い樅もみの木が半分見えて後ろは遐はるかの空の国に入る。左手の碧みどりりの窓掛けを洩もれて、澄み切った秋の日が斜ななめに白い壁を明らかに照らす。

曲は静かなる自然と、静かなる人間のうちに、快よく進行する。中野は絢爛けんらんたる空気の振動を鼓膜こまくに聞いた。声にも色があると嬉うれしく感じている。高柳は樅の枝を離るる鳶とびの舞う様さまを眺めている。鳶が音楽に調子を合せて飛んでいる妙だなと思った。

拍手がまた盛さかんに起る。高柳君ははっと気がついた。自分はやはり異種類の動物のなかに一人坊ひとりぼちでおったのである。隣りを見

ると中野君は一生懸命に敲たたいている。高い高い鳶とんの空から、己おのれをこの窮屈きゆうくつな谷底に呼び返したものの一人は、われを無理矢理にここへ連れ込んだ友達である。

演奏は第二に移る。千余人の呼吸は一度にやむ。高柳君の心はまた豊かになった。窓の外を見ると鳶はもう舞っておらぬ。眼を移して天井てんじやうを見る。周囲一尺もあるうと思われる梁の六角形に削けずられたのが三本ほど、樂堂を豎たてに貫つらぬいている、後ろはどこまで通っているか、頭かしらを回めぐらさないから分らぬ。所々に模様くずに崩した草花が、長い蔓つると共に六角を絡からんでいる。仰向あおもむいて見ていると広い御寺のなかへでも這入はいった心持になる。そうして黄色い声や青

い声が、梁を纏まとう唐草からくさのように、纏もつれ合つて、天井から降ふつてくる。高柳君は無む人にんの境きように一人坊たつちで佇たたずんでいる。

三度目の拍手が、断わりもなくまた起る。隣りの友達は一ひと倍ばいけたたましい敲たたき方をする。無む人にんの境きようにおつた一人坊たつちが急に、霰あられのごとき拍手のなかに包囲たういされた一人坊たつちとなる。包囲たういはなかなか已やまぬ。演奏者が闌たつを排はいしてわが室しつに入らんとする間ま際わになおなお烈はげしくなつた。ヴァイオリンを温かに右の腋下えきかに護まもりたる演奏者は、ぐるりと戸側とぎわに体たいを回めぐらして、薄紅葉うすもみじを点じた裾模様すそもようを台上に動かして来る。狂うばかりに咲き乱れたる白菊の花束を、飄ひるがえる袖そでの影に受けとつて、なよやかなる上軀じょうくを聴衆

の前に、少しかがめたる時、高柳は感じた。——この女の樂を聴きいたのは、聴かされたのではない。聴かさぬと云うを、ひそかに忍び寄りて、偷ぬすみ聴いたのである。

演奏は喝采かつさいのどよめきの静まらぬうちにまた始まる。聴衆はとつさの際にことごとく死んでしまう。高柳君はまた自由になつた。何だか広い原にただ一人立つて、遙はるかの向うから熟柿じゅくしのような色の暖かい太陽が、のつと上のぼってくる心持ちがする。小供のうちにはこんな感じがよくあつた。今はなぜこう窮屈ひんせきになつたろう。右を見ても左を見ても人は我を擯斥ひんせきしているように見える。たつた一人の友達さえ肝心かんじんのところで無残むざんの手をばちばち敲たたく。たよ

る所がなければ親の所へ逃げ帰れと云う話もある。その親があれば始からこんなにはならなかつたろう。七つの時おやじは、どこかへ行つたなり帰つて来ない。友達はそれから自分と遊ばなくなつた。母に聞くと、おとっさんは今に帰る今に帰ると云つた。

母は歸らぬ父を、帰ると云つてだましたのである。その母は今でもいる。住み古<sup>ふる</sup>るした家を引き払つて、生れた町から三里の山奥に一人佗<sup>わ</sup>びしく暮らしている。卒業をすれば立派になつて、東京へでも引き取るのが子の義務である。逃げて帰れば親子共餓<sup>う</sup>えて死ななければならん。——たちまち拍手の聲が一面に湧<sup>わ</sup>き返る。

「今のは面白かつた。今までのうち一番よく出来た。非常に感じ

をよく出す人だ。——どうだい君」と中野君が聞く。

「うん」

「君面白くないか」

「そうさな」

「そうさなじゃ困ったな。——おいあすこの西洋人の隣りにいる、細かい友禅こま ゆうぜんの着物はを着ている女があるだろう。——あんな模様はが近頃流行はやんだ。派出はでだろう」

「そうかなあ」

「君はカラー・センスのない男だね。ああ云う派出な着物は、集会の時や何かにはごくいいのだね。遠くから見て、見醒みざめがしな

い。うつくしくつていい」

「君のあれも、同じようなのを着ているね」

「え、そうかしら、何、ありや、いい加減かげんに着ているんだろう」

「いい加減に着ていれば弁解になるのかい」

中野君はちよつと会話をやめた。左の方に鼻眼鏡はなめがねをかけて揉上もみあげを容赦ようしゃなく、耳の上で剃り落した男が帳面を出してしきりに何か書いている。

「ありや、音楽の批評でもする男かな」と今度は高柳君が聞いた。

「どれ、——あの男が、あの黒服を着た。なあに、あれはね。画えか

工<sup>き</sup>だよ。いつでも来る男だがね、来るたんびに写生帖を持って来て、人の顔を写している」

「断わりなしにか」

「まあ、そうだろう」

「泥棒だね。顔泥棒だ」

中野君は小さい声でくくと笑った。休憩時間は十分<sup>ぶん</sup>である。廊下へ出るもの、喫煙に行くもの、用を足<sup>た</sup>して帰るもの、が高柳君の眼に写る。女は小供の時見た、豊<sup>とよくに</sup>国の田舎<sup>いなか</sup>源<sup>げん</sup>氏<sup>じ</sup>を一枚一枚はぐって行く時の心持である。男は芳年<sup>よしとし</sup>の書いた討ち入り当夜の義士が動いてるようだ。ただ自分が彼らの眼にどう写るであらうか

と思うと、早く帰りたくなる。自分の左右前後は活動している。うつくしく活動している。しかし衣食のために活動しているのではない。娯楽のために活動している。胡蝶こちょうの花に戯たわむるがごとく、浮藻うきもの漣さざなみに靡なびくがごとく、実用以上の活動を示している。この堂に入るものは実用以上に余裕のある人でなくてはならぬ。

自分の活動は食うか食わぬかの活動である。和煦わくの作用ではない。肅殺しゅくさつの運行である。儼げんたる天命に制せられて、無条件に生を享うけたる罪業ざいごうを償つぐなわんがために働らくのである。頭から云えば胡蝶のごとく、かく翩へん々ぺんたる公衆のいづれを捕とらえ来きたつて比較されても、少しも恥はずかしいとは思わぬ。云いたき事、云うて人が点頭うなずく

事、云うて人が尊ぶ事はないから云わぬのではない。生活の競争にすべての時間を捧げて、云うべき機会を与えてくれぬからである。吾が云いたくて云われぬ事は、世が聞きたくても聞かれぬ事は、天がわが手を縛るからである。人がわが口を箝するからである。巨万の富をわれに与えて、一錢も使うなかれと命ぜられたる時は富なき昔しの心安きに帰る能わずして、命を下せる人を逆しまに詛わんとす。われは呪い死にに死なねばならぬか。——たちまち咽喉が塞がって、ごほんごほんと咳き入る。袂からハンケチを出して痰を取る。買った時の白いのが、妙な茶色に変わっている。顔を挙げると、肩から観世よりのように細い金鎖りを懸ける。

て、朱に黄を交えた厚板の帯の間に時計を隠した女が、列のはずれに立って、中野君に挨拶あいさつしている。

「よう、いらっしやいました」と可愛らしい二重瞼ふたえまぶたを細めに云う。

「いや、だいぶ盛会ですね。冬田さんは非常な出来でしたな」と中野君は半身を、女の方へ向けながら云う。

「ええ、大喜びで……」と云い捨てて下りて行く。

「あの女を知ってるかい」

「知るものかね」と高柳君は拳突けんつくを喰わす。

相手は驚ろいて黙ってしまった。途端とたんに休憩後の演奏は始ま

る。「四葉の苜蓿花」<sup>よつば うまごやし</sup>とか云うものである。曲の続く間は高柳君はうつらうつらと聴いている。ぱちぱちと手が鳴ると熱病の人が夢から醒めた<sup>さ</sup>ように我に帰る。この過程を二三度繰り返して、最後の幻覚から喚び醒<sup>よ</sup>まされた時は、タンホイゼルのマーチで銅鑼<sup>どら</sup>を敲<sup>たた</sup>き大喇叭<sup>おおらつぱ</sup>を吹くところであつた。

やがて、千余人の影は一度に動き出した。二人の青年は揉<sup>も</sup>まれながらに門を出た。

日はようやく暮れかかる。図書館の横手に聳<sup>そび</sup>える松の林が緑りの色を微<sup>かす</sup>かに残して、しだいに黒い影に変わって行く。

「寒くなつたね」

高柳君の答は力の抜けた咳せき二つであつた。

「君さつきから、咳をするね。妙な咳だぜ。医者にでも見て貰つたら、どうだい」

「何、大丈夫だ」と云いながら高柳君は尖とがつた肩を二三度ゆすぶつた。松林を横切つて、博物館の前に出る。大きな銀杏いちょうに墨汁ぼくじゅうを点てんじたような滴々てきてきの烏からすが乱れている。暮れて行く空に輝くは無数の落葉である。今は風さえ出た。

「君にさんちまえ二三日前に白井道也しらいどうやと云う人が来たぜ」

「道也先生？」

「だろうと思うのさ。余り沢山ある名じゃないから」

「聞いて見たかい」

「聞こうと思ったが、何だかきまりが悪かったからやめた」

「なぜ」

「だって、あなたは中学校で生徒から追い出された事はありませんかとも聞けまいじゃないか」

「追い出されましたかと聞かなくってもいいさ」

「しかし容易に聞きにくい男だよ。ありゃ、困る人だ。用事よりほかに云わない人だ」

「そんなになったかも知れない。元来何の用で君の所へなんぞ来たのだい」

「なあに、江湖雑誌こうこざっしの記者だって、僕の所へ談話の筆記に来たのさ」

「君の談話をかい。——世の中も妙な事になるものだ。やっぱり金が勝つんだね」

「なぜ」

「なぜって。——可哀想かわいそうに、そんなに零落れいらくしたかなあ。——君道也先生、どんな、服装なりをしていた」

「そうさ、あんまり立派じゃないね」

「立派でなくつても、まあどのくらいの服装をしていた」

「そうさ。どのくらいとも云い悪いにくが、そうさ、まあ君にぐらいな

ところだろう」

「え、このくらいか、この羽織ぐらいなところか」

「羽織はもう少し色が好いよ」

「袴はかまは」

「袴もめんは木綿じゃないが、その代りもつと皺しわ苦茶だ」

「要するに僕と伯仲はくちゆうの間か」

「要するに君と伯仲の間だ」

「そうかなあ。——君、背せいの高い、ひよろ長い人だぜ」

「背の高い、顔の細長い人だ」

「じゃ道也先生に違ない。——世の中は随分無慈悲むじひなものだな

あ。――君番地を知ってるだろう」

「番地は聞かなかった」

「聞かなかった？」

「うん。しかし江湖雑誌こうこざっしで聞けばすぐわかるさ。何でもほかの雑誌や新聞にも関係しているかも知れないよ。どこかで白井道也と云う名を見たようだ」

音楽会の帰りの馬車や車は最前さいぜんから絡繹らくえきとして二人を後ろから追い越して夕暮を吾家わがやへ急ぐ。勇ましく馳かけて来た二挺ちようの人力じんりきがまた追い越すのかと思ったら、大仏を横に見て、西洋軒のなかに掛声ながら引き込んだ。黄昏たそがれの白き靄もやのなかに、逼せまり来る暮色を

弾き返すほどの目覚しき衣は由ある女に相違ない。中野君はぴたりと留まった。

「僕はこれで失敬する。少し待ち合せている人があるから」  
「西洋軒で会食すると云う約束か」

「うんまあ、そうさ。じゃ失敬」と中野君は向へ歩き出す。高柳君は往来の真中へたった一人残された。

淋しい世の中を池の端へ下る。その時一人坊っちの周作はこう思った。「恋をする時間があれば、この自分の苦痛をかいて、一篇の創作を天下に伝える事が出来るだろうに」

見上げたら西洋軒の二階に奇麗な花瓦斯がついていた。

## 五

ミルクホールに這入る。上下を擦り硝子にして中一枚を透き通しにした腰障子に近く据えた一脚の椅子に腰をおろす。焼麴麴を噛つて、牛乳を飲む。懷中には二十円五十銭ある。ただ今地理学教授法の原稿を四十一頁渡して金に換えて来たばかりである。一頁五十銭の割合になる。一頁五十銭を超ゆべからず、一カ月五十頁を超ゆべからずと申し渡されてある。

これで今月はどうか、こうか食える。ほかからくれる十円近くの金は故里の母に送らなければならない。故里はもう落鮎の時節

である。ことによると崩れ<sup>くず</sup>かかった藁<sup>わら</sup>屋根<sup>やね</sup>に初霜<sup>はつしも</sup>が降ったかも知れない。鶏<sup>にわとり</sup>が菊の根方を暴<sup>あ</sup>らしている事だろう。母は丈夫かしら。

向うの机を占領している学生が二人、西洋菓子を食べながら、団子坂<sup>だんござか</sup>の菊人形の収入について大<sup>おお</sup>に論じている。左に蜜柑<sup>みかん</sup>をむきながら、その汁<sup>しる</sup>を牛乳の中へたらしている書生がある。一房絞<sup>ひとふさしぼ</sup>つては、文芸倶楽部<sup>ぶんげいくらぶ</sup>の芸者の写真を一枚はぐり、一房絞<sup>しぼ</sup>つては一枚はぐる。芸者の絵が尽きた時、彼はコップの中を匙<sup>さじ</sup>で攪<sup>か</sup>き廻して妙な顔をしている。酸<sup>さん</sup>で牛乳が固まったので驚ろいているのだらう。

高柳君はそこに重ねてある新聞の下から雑誌を引きずり出して、あれこれと見る。目的の江湖雑誌こうこざっしは朝日新聞の下に折れていた。折れてはいるがまだ新らしい。四五日前に出たばかりのである。折れた所は六号活字で何だか色鉛筆の赤い圈点けんでんが一面についている。僕の恋愛観と云う表題の下に中野春台なかのしゅんたいとある。春台は無論輝一きいちの号である。高柳君は食い欠いた焼麺麰やきパンを皿の上へ置いたなり「僕の恋愛観」を見ていたがやがて、にやりと笑った。恋愛観の結末に同じく色鉛筆で色情狂※と書いてある。高柳君は頁をはぐった。六号活字はだいぶ長い。もっともいろいろの人の名前が出ている。一番始めには現代青年の煩悶はんもんに対する諸家の解決

とある。高柳君は急に読んで見る気になった。——第一は静心の工夫を積みと云う注意だ。積みとはどう積むのかちつともわからない。第二は運動をして冷水摩擦をやれと云う。簡単なものである。第三は読書もせず、世間も知らぬ青年が煩悶する法がないと論じている。無いと云っても有れば仕方がない。第四は休暇ごとに必ず旅行せよと勧告している。しかし旅費の出処は明記してない。——高柳君はあとを読むのが厭になった。颯と引っくりかえして、第一頁をあける。「解脱と拘泥……憂世子」と云うのがある。標題が面白いのでちよつと目を通す。

「身体の局部がどこぞ悪いと気にかかる。何をしていても、それ

がコ・ダ・ワ・つて来る。ところが非常に健康な人は行住坐臥ぎようじゆうざがともにわが身体しんたいの存在を忘れている。一点の局部じくぶだにわが注意を集注しゅうしゆすべき患所かんしよがないから、かく安々と胖ゆたかなのである。瘠やせて蒼あおい顔かおをしている人に、君は胃が悪いだろうと尋ねて見た事がある。するとその男が答えて、胃は少しも故障がない、その証拠には僕はこの年になるが、いまだに胃がどこにあるか知らないと言った。その時は笑って済んだが、後あとで考えて見ると大おおに悟さとった言葉である。この人は全く胃が健康だから胃に拘泥こうでいする必要がない、必要がないから胃がどこにあっても構わないのと見える。自在飲じざいりん、自在じざい、自在食じざいしょく、いっそう平気である。この男は胃において悟さとを開いたもの

である。……」

高柳君はこれは少し妙だよと口のなかで云った。胃の悟りは妙だと云った。

「胃について道い得べき事は、惣身そうしんについても道い得べき事である。惣身について道い得べき事は、精神についても道い得べき事である。ただ精神生活においては得失の両面において等しく拘泥こうでいを免かれぬところが、身体からだより煩いわずらになる。

「一能いちのうの士しは一能に拘泥こうでいし、一芸いちげいの人は一芸に拘泥して己おのれを苦しめている。芸能は氣の持ちようではすぐ忘れる事も出来る。わが欠点に至っては容易に解脱げだつは出来ぬ。

「百円や二百円もする帯をしめて女が音楽会へ行くとこの帯が妙に気になって音楽が耳に入らぬ事がある。これは帯に拘泥こうでいするからである。しかしこれは自慢の例じゃ。得意の方は前云う通り崇たたりを避け易やすい。しかし不面目ふめんぼくの側はなかなか強情に崇たたる。昔しさる所で一人の客に紹介された時、御互に椅子の上で礼をして双方共頭かしらを下げた。下げながら、向うの足を見るとその男の靴足袋くつたびの片々かたかたが破れて親指の爪が出ている。こちらが頭を下げると同時に彼は満足な足をあげて、破れ足袋やたびの上に加えた。この人は足袋の穴に拘泥していたのである。……」

おれも拘泥している。おれのからだは穴だらけだと高柳君は思

いながら先へ進む。

「拘泥は苦痛である。避けなければならぬ。苦痛そのものは避けがたい世であろう。しかし拘泥の苦痛は一日で済む苦痛を五日、なぬか七日に延長する苦痛である。いらざる苦痛である。避けなければならぬ。

「自己が拘泥するのは他人が自己に注意を集注すると思うからで、つまりは他人が拘泥するからである。……」

高柳君は音楽会の事を思いだした。

「したがって拘泥を解脱するには二つの方法がある。他人がいくら拘泥しても自分は拘泥せぬのが一つの解脱法である。人が目を

峙<sup>そばだ</sup>てても、耳<sup>そび</sup>を聳<sup>そび</sup>やかしても、冷評<sup>れいへい</sup>しても罵詈<sup>ばり</sup>しても自分<sup>自分</sup>だけは拘泥<sup>こうど</sup>せずにさっさと事を運んで行く。大久保彦左衛門<sup>おおくぼひこざえもん</sup>は盥<sup>たらい</sup>で登城<sup>とじょう</sup>した事がある。……」

高柳君は彦左衛門<sup>つらや</sup>が羨ましくなつた。

「立派<sup>いしやう</sup>な衣装<sup>いしやう</sup>を馬士<sup>まご</sup>に着せると馬士はすぐ拘泥<sup>こうど</sup>してしまう。華族や大名はこの点において解脱<sup>げつた</sup>の方を得ている。華族や大名に馬士の腹掛<sup>はらがけ</sup>をかけさすと、すぐ拘泥<sup>こうど</sup>してしまう。釈迦<sup>しやくか</sup>や孔子<sup>こうし</sup>はこの点において解脱<sup>げつた</sup>を心得ている。物質界<sup>おもき</sup>に重<sup>おも</sup>を置かぬものは物質界に拘泥<sup>こうど</sup>する必要がないからである。……」

高柳君は冷め<sup>さ</sup>かかった牛乳をぐつと飲んで、ううと云つた。

「第二の解脱法は常人じょうじんの解脱法である。常人の解脱法は拘泥まぬを免  
かるのではない、拘泥せねばならぬような苦しい地位に身を置  
くのを避けるのである。人の視聴を惹ひくの結果、われより苦痛が  
反射せぬようにと始めから用心するのである。したがって始めよ  
り流俗りゆうぞくに媚こびて一世に附和ふわする心底しんていがなければ成功せぬ。江戸風  
な町人はこの解脱法を心得ている。芸妓げいぎ通客つうかくはこの解脱法を心得  
ている。西洋のいわゆる紳士ゼントルマンはもつともよくこの解脱法を心得た  
ものである。……」

芸者と紳士ゼントルマンがいつしよになつてゐるのは、面白いと、青年はまた  
焼麺麰やきパンの一片ぺんを、横合から半円形に食い欠いた。親指についた牛バ

酩<sup>タ</sup>をそのまま袴<sup>はかま</sup>の膝<sup>ひざ</sup>へなすりつけた。

「芸妓、紳士、通人<sup>つうじん</sup>から耶蘇<sup>ヤソ</sup>孔子<sup>こうし</sup>釈迦<sup>しゃか</sup>を見れば全然たる狂人である。耶蘇、孔子、釈迦から芸妓、紳士、通人を見れば依然として拘泥<sup>こうでい</sup>している。拘泥のうちに拘泥を脱し得たりと得意なるものは彼らである。両者の解脱<sup>げだつ</sup>は根本義において一致すべからざるものである。……」

高柳君は今まで解脱の二字においてかつて考えた事はなかった。ただ文界に立って、ある物になりたい、なりたいがなれない、なれんのではない、金がない、時がない、世間が寄ってたかって己<sup>おの</sup>れを苦しめる、残念だ無念だとばかり思っていた。あと

を読む気になる。

「解脱は便法べんぽうに過ぎぬ。下くだれる世に立って、わが真を貫徹し、わが善を標榜ひょうぼうし、わが美を提唱するの際、※泥帶水たでいたすいの弊へいをまぬがれ、勇猛精進ゆうもつしやうじんの志を固くして、現代下根げこんの衆生しゆじやうより受くる迫害の苦痛を委却いきやくするための便法である。この便法を証得しやうとくし得ざる時、英霊しゆんじの俊兒しゆんじ、またついに鬼窟裏きくつりに墮在だざいして彼のいわゆる芸妓紳士通人と得失を較こウするの愚ぐを演じて憚はばからず。国家のため悲しむべき事である。

「解脱は便法である。この方便門ほうべんもんを通じて出頭しゅつとうし来る行為、動作、言説の是非は解脱の関するところではない。したがって吾人

は解脱を修得する前に正鵠せいこくにあたれる趣味を養成せねばならぬ。  
下劣なる趣味を拘泥なく一代に塗抹とまつするは学人の恥辱である。彼  
らが貴重なる十年二十年を挙あげて故紙堆裏こしたいりに兀々こつこつたるは、衣食の  
ためではない、名聞みようもんのためではない、ないし爵禄財宝しゃくろくざいほうのためでは  
ない。微かすかなる墨痕ぼっこんのうちに、光明の一炬きよを点じ得て、点じ得た  
る道火どうかを解脱の方便門より担にない出いだして暗黒世界を遍照へんじょうせんがため  
である。

「このゆえに真に自家証得底じかしようとくていの見解けんげあるもののために、拘泥こうにの煩はん  
を払って、でき得る限り彼らをして第一種の解脱に近づかしむる  
を道德と云う。道德とは有道ゆうどうの士しをして道を行わしめんがため

に、吾人がこれに対して与うる自由の異名<sup>いみょう</sup>である。この大道德を解せざるものを俗人と云う。

「天下の多数は俗人である。わが位に着<sup>ちやく</sup>するがためにこの大道德を解し得ぬ。わが富に着するがためにこの大道德を解し得ぬ。下<sup>くだ</sup>れるものは、わが酒とわが女に着するがためにこの大道德を解し得ぬ。

「光明は趣味の先駆である。趣味は社会の油である。油なき社会は成立せぬ。汚<sup>けが</sup>れたる油に廻転する社会は墮落<sup>だらく</sup>する。かの紳士、通人、芸妓の徒<sup>と</sup>は、汚れたる油の上を滑<sup>すべ</sup>つて墓に入るものである。華族と云い貴顕<sup>きけん</sup>と云い豪商と云うものは門閥<sup>もんばつ</sup>の油、権勢<sup>けんせい</sup>の

油、黄白こうはくの油をもつて一世を逆さかしまに廻転せんと欲するものである。

「真正しんせいの油は彼らの知るところではない。彼らは生れてより以来この油について何らの工夫くふうも費やしておらん。何らの工夫を費やさぬものが、この大道德を解せぬのは許す。光明の学徒を圧迫せんとするに至っては、俗人の域を超越して罪人の群むれに入る。」

「三味線しゃみせんを習うにも五六年はかかる。巧拙こうせつを聴き分くるさえ一力月の修業では出来ぬ。趣味の修養が三味しゃみの稽古けいこより易やすいと思うのは間違っている。茶の湯を学ぶ彼らはいらざる儀式に貴重な時間を費やして、一々に師匠の云う通りになる。趣味は茶の湯より六む

ずかしいものじゃ。茶坊主に頭を下げる謙徳けんとくがあるならば、趣味の本家ほんけたる学者の考はなおさら傾聴せねばならぬ。

「趣味は人間に大切なものである。楽器を壊こぼつものは社会から音楽を奪う点において罪人である。書物を焼くものは社会から学問を奪う点において罪人である。趣味を崩くずすものは社会そのものを覆くつがえす点において刑法の罪人よりもはなはだしき罪人である。音楽はなくとも吾人は生きている、学問がなくとも吾人は生きていく。趣味がなくても生きておられるかも知れぬ。しかし趣味は生活の全体に渉わたる社会の根本要素である。これなくして生きんとするは野に入つて虎と共に生きんとすると一般である。

「ここに一人いちにんがある。この一人が単に自己の思うようにならぬと云う原因のもとに、多勢たぜいが朝に晩に、この一人を突つき廻わして、幾年の後のちこの一人の人格を墮落せしめて、下劣なる趣味に誘い去りたる時、彼らは殺人より重い罪を犯したのである。人を殺せば殺される。殺されたものは社会から消えて行く。後患こうかんは遺さのこない。趣味の墮落したものは依然として現存する。現存する以上は墮落した趣味を伝染せねばやまぬ。彼はペストである。ペストを製造したものはもちろん罪人である。

「趣味の世界にペストを製造して罰せられんのは人殺しをして罰せられんと同様である。位地の高いものはもつともこの罪を犯おか

しやすい。彼らは彼らの社会的地位からして、他に働きかける便宜ぎの多い場所に立っている。他に働きかける便宜べんを有して、働きかける道を弁わえぬものは危険である。

「彼らは趣味において専門の学徒に及ばぬ。しかも学徒以上他に働きかけるの能力を有している。能力は権利ではない。彼らのあるものはこの区別さえ心得ておらん。彼らの趣味を教育すべくこの世に出現せる文学者を捕えてすらこれを逆さかしまに吾意のごとくせんとする。彼らは単に大道德を忘れたるのみならず、大不道德を犯して恬然てんぜんとして社会に横行しつつあるのである。

「彼らの意のごとくなる学徒があれば、自己の天職を自覚せざる

学徒である。彼らを教育する事の出来ぬ学徒があれば腰の抜けたる学徒である。学徒は光明を体せん事を要す。光明より流れ出ずる趣味を現実せん事を要す。しかしてこれを現実げんじつせんがために、拘泥こうでいせざらん事を要す。拘泥せざらんがために解脱げだつを要す」

高柳君は雑誌を開いたまま、茫然ぼうぜんとして眼を挙げた。正面の柱にかかっている、八角時計がぼうんと一時を打つ。柱の下の椅子いすにぽつ然ねんと腰を掛けていた小女郎こじょうろうが時計の音と共に立ち上がった。丸テーブルの上には安い京焼きょうやきの花活はないけに、浅ましく水仙を突きさして、葉の先が黄ばんでいるのを、いつまでもそのままに水をやらぬ気と見える。小女郎は水仙の花にちよつと手を触れて、花はな

活いけのそばにある新聞をとり上げた。読むかと思つたら四つに畳かたわらで傍に置いた。この女は用もないのに立ち上がったのである。退屈のあまり、ぼうんを聞いて器械的に立ち上がったのである。羨うらやましい女だと高柳君はすぐ思う。

菊人形の収入についての議論は片づいたと見えて、二人の学生は煙草たばこをふかして往来を見ている。

「おや、富田とみたが通る」と一人が云う。

「どこに」と一人が聞く。富田君は三寸ばかり開いていた硝子戸ガラスどの間をちらと通り抜けたのである。

「あれは、よく食う奴やつじゃな」

「食う、食う」と答えたところによるとよほど食うと見える。

「人間は食う割に肥らんものだな。あいつはあんなに食う癖に  
いっこう肥えん」

「書物は沢山読むが、ちつとも、えろうならんのがおると同じ事  
じゃ」

「そうよ。御互に勉強はなるべくせん方がいいの」

「ハハハハ。そんなつもりで云ったんじゃない」

「僕はそう云うつもりにしたのさ」

「富田は肥らんなかなか敏捷だ。やはり沢山食うだけの事はあ  
る」

「敏捷な事があるものか」

「いや、この間四丁目を通ったら、後ろから出し抜けに呼ぶものがあるから、振り反ると富田だ。頭を半分刈<sup>か</sup>ったままで、大きな敷布のようなものを肩から纏<sup>まと</sup>うている」

「元来どうしたのか」

「床屋から飛び出して来たのだ」

「どうして」

「髪を刈っておったら、僕の影が鏡に写ったものだから、すぐ馳<sup>か</sup>け出したんだそうだ」

「ハハハハそいつは驚ろいた」

「おれも驚ろいた。そうして尚志会しょうしかいの寄附金を無理に取って、また床屋へ引き返したぜ」

「ハハハハなるほど敏捷びんしょうなものだ。それじゃ御互になるべく食う事にしよう。敏捷にせんと、卒業してから困るからな」

「そうよ。文学士のように二十円くらいで下宿に屏息へいそくしていては人間と生れた甲斐かいはないからな」

高柳君は勘定をして立ち上った。ありがとうと云う下女の声に、文芸倶楽部の上につつ伏していた書生が、赤い眼をとろつかせて、睨にらめるように高柳君を見た。牛の乳のなかの酸に中毒でもしたのだろう。

## 六

「私は高柳周作たかやなぎしゅうさくと申すもので……」と丁寧ていねいに頭を下げた。高柳君が丁寧ていねいに頭を下げた事は今まで何度もある。しかしこの時のように快よく頭を下げた事はない。教授の家を訪問しても、翻訳を頼まれる人に面会しても、その他の先輩に対しても皆丁寧ていねいに頭をさげる。せんだって中野のおやじに紹介された時などはいよいよもって丁寧ていねいに頭をさげた。しかし頭を下げるうちにいつでも圧迫を感じている。位地、年輩、服装、住居へいげいが睥睨へいげいして、頭を下げぬか、下げぬかと催促されてやむを得ず頓首とんしゅするのである。道也どうや先

生に対しては全く趣が違<sup>おもむき</sup>う。先生の服装は中野君の説明したごとく、自分と伯仲<sup>はくちゆう</sup>の間にある。先生の書斎は座敷をかねる点において自分の室<sup>へや</sup>と同様である。先生の机は白木なるの点において、丸裸なるの点において、またもつとも無趣味に四角張<sup>しかく</sup>つたる点において自分の机と同様である。先生の顔は蒼<sup>あお</sup>い点において瘠<sup>や</sup>せた点において自分と同様である。すべてこれらの諸点において、先生と弟<sup>てい</sup>たりがたく兄<sup>けい</sup>たりがたき間柄<sup>あいだから</sup>にありながら、しかも丁寧<sup>ていねい</sup>に頭を下げるのは、逼<sup>せ</sup>まられて仕方なしに下げるのではない。仕方あるにもかかわらず、こっちの好意をもつて下げるのである。同類に対する愛憐<sup>あいれん</sup>の念より生ずる真正の御辞儀<sup>おじぎ</sup>である。世間に対する

御辞儀はこの野郎がと心中に思いながらも、公然には反比例に丁寧を極めたる虚偽の御辞儀でありますと断わりたいくらいに思つて、高柳君は頭を下げた。道也先生はそれと覺つたかどうか知らぬ。

「ああ、そうですか、私が白井道也で……」とつくろつた景色もなく云う。高柳君にはこの挨拶振りが気に入つた。兩人はしばらくの間黙つて控えている。道也は相手の来意がわからぬから、先方の切り出すのを待つのが当然と考える。高柳君は昔しの關係を残りになく打ち開けて、一刻も早く同類相憐むの間柄になりたい。しかしあまり突然であるから、ちよつと言ひ出しかねる。のみな

らず、一昔<sup>ひとむか</sup>し前の事とは申しながら、自分達がいじめて追い出した先生が、そのためにかく零落<sup>れいらく</sup>したのではあるまいかと思うと、何となく気がひけて云い切れない。高柳君はこんなところになるとすこぶる勇氣に乏<sup>とほ</sup>しい。謝罪かたがた尋ねはしたが、いよいよと云う段になると少々怖<sup>わ</sup>くて罪滅<sup>つみほろ</sup>しが出来かねる。心にいろいろな冒頭を作って見たが、どれもこれもきまりがわるい。

「だんだん寒くなりますね」と道也先生は、こっちの了簡<sup>りょうけん</sup>を知らないから、超然たる時候の挨拶をする。

「ええ、だいぶ寒くなったようで……」

高柳君の脑中の冒頭はこれでまるで打ち壊されてしまった。

いっその事自白はこの次にしようという気になる。しかし何だか話して行きたい気がする。

「先生御忙おいそがしいですか……」

「ええ、なかなか忙がしいんで弱ります。貧乏閑ひまなしで」

高柳君はやり損そくなつたと思う。再び出直さねばならん。

「少し御話を承うけたまわりたいと思つて上がったんですが……」

「はあ、何か雑誌へでも御載おのせになるんですか」

あてはまたはずれる。おれの態度がどうしても向むこには酌くみ取れないと見えると青年は心中少しく残念に思った。

「いえ、そうじゃないので——ただ——ただっちゃ失礼ですが。」

——御邪魔ならまた上がってもよろしゅうございますが……」

「いえ邪魔じゃありません。談話と云うからちよつと聞いて見たのです。——わたしのうちへ話なんか聞きにくるものはありませんよ」

「いいえ」と青年は妙な言葉をもつて先生の辞を否定した。

「あなたは何の学問をなさるですか」

「文学の方を——今年大学を出たばかりです」

「はあそうですか。ではこれから何かおやりになるんですね」

「やれば、やりたいのですが、暇ひまがなくって……」

「暇はないですね。わたしなども暇がなくって困っています。し

かし暇はかえってない方がいいかも知れない。何ですね。暇のあ  
るものはだいぶいるようだが、余り誰も何もやっていないよう  
じゃありませんか」

「それは人に依り<sup>よ</sup>はしませんか」と高柳君はおれが暇さえあれば  
と云うところを暗<sup>あん</sup>にほのめかした。

「人にも依るでしょう。しかし今の金持ちと云うものは……」と  
道也は句を半分で切って、机の上を見た。机の上には二寸ほどの  
厚さの原稿がのっている。障子には洗濯した足袋<sup>たび</sup>の影がさす。

「金持ちは駄目です。金がなくなつて困つてゐるものが……」

「金がなくなつて困つてゐるものは、困りなりにやればいいのです」

と道也先生困つてゐる癖に太平な事を云う。高柳君は少々不満である。

「しかし衣食のために勢力をとられてしまつて……」

「それでいいのですよ。勢力をとられてしまつたら、ほかに何にもしないで構わないのです」

青年は啞然<sup>あぜん</sup>として、道也を見た。道也は孔子様のように真面目<sup>まじめ</sup>である。馬鹿にされてるんじゃないと高柳君は思う。高柳君は大抵の事を馬鹿にされたように聞き取る男である。

「先生ならいいかも知れません」とつるつると口を滑<sup>すべ</sup>らして、はつと言ひ過ぎたと下を向いた。道也は何とも思わない。

「わたしは無論いい。あなただって好いですよ」と相手までも平気に捲き込もうとする。

「なぜですか」と二三歩逃げて、振り向きながら佇む狐のように探りを入れた。

「だって、あなたは文学をやったと云われたじゃありませんか。そうですか」

「ええやりました」と力を入れる。すべて他の点に関しては断乎たる返事をする資格のない高柳君は自己の本領においては何人の前に出てもひるまぬつもりである。

「それならいい訳だ。それならそれでいい訳だ」と道也先生は繰

り返して云った。高柳君には何の事が少しも分らない。また、な  
ぜですと突き込むのも、何だか伏兵に罹る気持がして厭である。  
ちよつと手のつけようがないので、黙って相手の顔を見た。顔を  
見ているうちに、先方でどうか解決してくれるだろうと、暗に催  
促の意を籠めて見たのである。

「分りましたか」と道也先生が云う。顔を見たのはやっぱり何の  
役にも立たなかつた。

「どうも」と折れざるを得ない。

「だってそうじゃありませんか。——文学はほかの学問とは違  
うのです」と道也先生は凜然と云い放った。

「はあ」と高柳君は覺えず応答をした。

「ほかの学問はですね。その学問や、その学問の研究を阻害するものが敵である。たとえば貧とか、多忙とか、圧迫とか、不幸とか、悲酸な事情とか、不和とか、喧嘩とかですね。これがあると学問が出来ない。だからなるべくこれを避けて時と心の余裕を得ようとする。文学者も今まではやはりそう云う了簡でいたのです。そう云う了簡どころではない。あらゆる学問のうちで、文学者が一番呑気な閑日月がなくてはならんように思われていた。おかしいのは当人自身までがその気でいた。しかしそれは間違です。文学は人生そのものである。苦痛にあれ、困窮にあれ、窮愁

にあれ、凡そ人生の行路にあたるものはすなわち文学で、それらを嘗め得たものが文学者である。文学者と云うのは原稿紙を前に置いて、熟語字典を参考して、首をひねっているような閑人じやありません。円熟して深厚な趣味を体して、人間の万事を臆面なく取り捌いたり、感得したりする普通以上の吾々を指すのであります。その取り捌き方や感得し具合を紙に写したのが文学書になるのです、だから書物は読まないでも実際その事にあたれば立派な文学者です。したがってほかの学問ができ得る限り研究を妨害する事物を避けて、しだいに人世に遠かるに引き易えて文学者は進んでこの障害のなかに飛び込むのであります」

「なるほど」と高柳君は妙な顔をして云った。

「あなたは、そうは考えませんか」

そう考えるにも、考えぬにも生れて始めて聞いた説である。批評的の返事が出るときは大抵用意のある場合に限る。不意撃ふいうちに應ずる事が出来れば不意撃ではない。

「ふうん」と云って高柳君は首を低たれた。文学は自己の本領である。自己の本領について、他人が答弁さえ出来ぬほどの説を吐はくならばその本領はあまり鞏固きようこなものではない。道也先生さえ、こんな見すばらしい家に住んで、こんな、きたらしい着物をきているならば、おれは当然二十円五十銭の月給で沢山だと思つた。

何だか急に広い世界へ引き出されたような感じがする。

「先生はだいぶ御忙おいそがしいようですが……」

「ええ。進んで忙しい中へ飛び込んで、人から見ると酔興すいきょうな苦勞をします。ハハハハ」と笑う。これなら苦勞が苦勞にたたない。

「失礼ながら今はどんな事をやっておいでで……」

「今ですか、ええいろいろな事をやりますよ。飯を食う方と本領の方と両方やろうとするからなかなか骨が折れます。近頃は頼まれてよく方々へ談話の筆記に行きますがね」

「随分御面倒でしょう」

「面倒と云いや、面倒ですがね。そう面倒と云うよりむしろ馬鹿ばか

気げています。まあいい加減に書いては来ますが」

「なかなか面白い事を云うのがおりましたあんと暗なかのしゅんたいに中野春台の事を釣り出そうとする。

「面白いの何のって、この間はうま、うまの講釈を聞かされた」

「うま、うまですか？」

「ええ、あの小供こどもが食物たべものの事をうまうまと云いましょう。あれの来歴ですね。その人の説によると小供が舌が回り出してから一番早く出る発音がうまうまだそうです。それでその時分は何を見てもうまうま、何を見なくってもうまうまだからつまりは何なににもつ

けなくてもいいのだそうだが、そこが小供に取って一番大切なものは食物だから、とうとう食物の方で、うまうまを専有してしまったのだそうです。そこで大人もその癖がのこって、美味なものをうまいと云うようになった。だから人生の煩悶はんもんは要するに元へ還かえってうまうまの二字に帰着すると云うのです。何だか寄席よせへでも行ったようじゃないですか」

「馬鹿にしていますね」

「ええ、大抵は馬鹿にされに行くんですよ」

「しかしそんなつまらない事を云うって失敬ですね」

「なに、失敬だっていいでさあ、どうせ、分らないんだから。そ

うかと思うとね。非常に真面目まじめだけれどもなかなか突飛とっぴなのが  
あつてね。この間は猛烈な恋愛論を聞かされました。もつとも若  
い人ですがね」

「中野じゃありませんか」

「君、知ってますか。ありや熱心なものだった」

「私の同級生です」

「ああ、そうですか。中野春台とか云う人ですね。よっぽど暇が  
あるんでしょう。あんな事を真面目に考えているくらいだから」

「金持ちです」

「うん立派な家うちにいますね。君はあの男と親密なのですか」

「ええ、もとはごく親密でした。しかしどうもいかんです。近頃は——何だか——未来の細君か何か出来たんで、あんまり交際し  
てくれないのです」

「いいでしょう。交際しなくつても。損にもなりそうもない。ハ  
ハハハハ」

「何だかし、こう、一人坊ひとりぼつちのような気がして淋しくつて  
いけません」

「一人坊つちで、いいでさあ」と道也先生またいいでさあを担かつぎ  
出した。高柳君はもう「先生ならいいでしょう」と突き込む勇気  
が出なかった。

「昔から何かしようと思えば大概は一人坊っちになるものです。そんな一人の友達をたよりにするようじゃ何も出来ません。ことによると親類とも仲違なかたがいになる事が出来て来ます。妻さいにまで馬鹿にされる事があります。しまいには下女までからかいます」

「私はそんなになつたら、不愉快で生きていられないだろうと思います」

「それじゃ、文学者にはなれないです」

高柳君はだまつて下を向いた。

「わたしも、あなたぐらいの時には、ここまでとは考えていなかった。しかし世の中の事実は実際ここまでやって来るんです。

うそじゃない。苦しんだのは耶蘇ヤソや孔子こうしばかりで、吾々文学者はその苦しんだ耶蘇や孔子を筆の先でほめて、自分だけは呑気のんきに暮して行けばいいのだなどと考えてるのは偽文学者にせぶんがくしゃですよ。そんなものは耶蘇や孔子をほめる権利はないのです」

高柳君は今こそ苦しいが、もう少し立てば喬木きやうぼくにうつる時節があるだろうと、苦しいうちに絹糸ほどな細い望みを繋つないでいた。その絹糸が半分ばかり切れて、暗い谷から上へ出るたよりは、生きていくうちは容易に来そうに思われなくなった。

「高柳さん」

「はい」

「世の中は苦しいものですよ」

「苦しいです」

「知ってますか」と道也先生は淋さびし氣げに笑った。

「知ってるつもりですけど、いつまでもこう苦しくっちゃ……」

…

「やり切れませんか。あなたは御両親おあが御在ありか」

「母いなかだけ田舎いなかにいます」

「おっかさんだけ？」

「ええ」

「御母おつかさんだけでもあれば結構だ」

「なかなか結構でないです。——早くどうかしてやらないと、もう年を取っていますから。私が卒業したら、どうか出来るだろうと思っただのですが……」

「さよう、近頃のように卒業生が殖<sup>ふ</sup>えちゃ、ちよつと、口を得<sup>う</sup>るのが困難ですね。——どうです、田舎の学校へ行く気はないですか」

「時々は田舎へ行こうとも思っんですが……」

「またいやになるかね。——そうさ、あまり勧められもしない。

私も田舎の学校はだいぶ経験があるが」

「先生は……」と言いかけたが、また昔の事を云い出しにくく

なつた。

「ええ？」と道也は何も知らぬ氣げである。

「先生は——あの——江湖雜誌こうこざっしを御編輯ごへんしゅうになると云う事ですが、  
本当にそうなんで」

「ええ、この間から引き受けてやっています」

「今月の論説に解脱げだつと拘泥こうでいと云うのがありましたが、あの憂世子ゆうせいし  
と云うのは……」

「あれは、わたしです。読みましたか」

「ええ、大変面白く拝見しました。そう申しちゃ失礼ですが、あれは私の云いたい事を五六段高くして、表出ひょうしゅつしたようなもので、

利益を享<sup>う</sup>けた上に痛快に感じました」

「それはありがたい。それじゃ君は僕の知己ですね。恐らく天下唯一<sup>ゆいいつ</sup>の知己かも知れない。ハハハハ」

「そんな事はないでしょう」と高柳君はやや真面目<sup>まじめ</sup>に云った。

「そうですか、それじゃなお結構だ。しかし今まで僕の記事を見てほめてくれたものは一人もない。君だけですよ」

「これから皆んな賞<sup>ほ</sup>めるつもりです」

「ハハハハそう云う人がせめて百人もいてくれると、わたしも本望<sup>ほんぼう</sup>だが——随分頓珍漢<sup>とんちんかん</sup>な事がありますよ。この間なんか妙な男が

尋ねて来てね。……」

「何ですか」

「なあに商人ですがね。どこから聞いて来たか、わたしに、あなたは雑誌をやっておいでだそうだが文章を御書きなさるだろうと云うのです」

「へえ」

「書く事は書くともあ云ったんです。するとねその男がどうぞ一つ、眼薬の広告をかいてもらいたいと云うんです」

「馬鹿な奴やつですね」

「その代り雑誌へ眼薬の広告を出すから是非一つ願いたいて——何でも点明水てんめいすいとか云う名ですがね……」

「妙な名をつけて――。御書きになったんですか」

「いえ、とうとう断わりましたかね。それでまだおかしい事があるんですよ。その薬屋で売出しの日に大きな風船を揚げるんだと云うのです」

「御祝いのためですか」

「いえ、やはり広告のために。ところが風船は声も出さずに高い空を飛んでいるのだから、仰向あおむけば誰にでも見えるが、仰向かせなくっちゃいけないでしょう」

「へえ、なるほど」

「それでわたしにその、仰向かせの役をやってくれって云うので

す」

「どうするのです」

「何、往来をあるいていても、電車へ乗っていてもいいから、風船を見たら、おや風船だ風船だ、何でもありや点明水の広告に違いないって何遍も何遍も云うのだそうです」

「ハハハ随分思い切って人を馬鹿にした依頼ですね」

「おかしくもあり馬鹿馬鹿しくもあるが、何もそれだけの事をするにはわたしでなくてもよからう。車引でも雇えば訳ないじゃないかと聞いて見たのです。するとその男がね。いえ、車引なんぞばかりでは信用がなくなっていけません。やっぱり髭ひげでも生はやして

もつともらしい顔をした人に頼まないと、人がだまされませんか  
らと云うのです」

「実に失敬な奴ですね。全体何物なにものでしょう」

「何物ってやはり普通の人間ですよ。世の中をだますために人を  
雇いに来たのです。呑気のんきなものさハハハハ」

「どうも驚ろいちまう。私なら撲なぐってやる」

「そんなのを撲った日にゃ片かたっ端はしから撲らなくっちゃあならな  
い。君そう怒るが、今の世の中はそんな男ばかりで出来てるん  
ですよ」

高柳君はまさかと思った。障子にさした足袋たびの影はいつしか消

えて、開<sup>あ</sup>け放<sup>はな</sup>った一枚の間から、靴<sup>くつ</sup>刷<sup>は</sup>毛<sup>け</sup>の端<sup>はじ</sup>が見える。椽<sup>えん</sup>は泥だらけである。手<sup>て</sup>の平<sup>ひら</sup>ほどの庭の隅に一株の菊が、清らかに先生の貧<sup>ひん</sup>を照らしている。自然をどうでもいいと思<sup>おも</sup>っている高柳君もこの菊だけは美しいと感じた。杉垣<sup>すぎがき</sup>の遥<sup>はる</sup>か向<sup>むこう</sup>に大きな柿の木が見えて、空のなかへ五分珠<sup>ごぶだま</sup>の珊瑚<sup>さんご</sup>をかためて嵌<sup>は</sup>め込んだように奇麗に赤く映る。鳴子<sup>なるこ</sup>の音<sup>おと</sup>がして鳥<sup>からす</sup>がぱつと飛んだ。

「閑静な御住居<sup>おすまい</sup>ですね」

「ええ。蛸寺<sup>たこでら</sup>の和尚<sup>おしょう</sup>が鳥を追っているんです。毎日がらんがらん云わして、鳥ばかり追っている。ああ云<sup>い</sup>う生涯<sup>しやうがい</sup>も閑静でいいな」  
「大変たくさん柿<sup>な</sup>が生<sup>な</sup>っていますね」

「渋柿ですよ。あの和尚は何が惜しくて、ああ渋柿の番ばかりするのかな。——君妙な咳せきを時々するが、身体からだは丈夫ですか。だいぶ瘡やせてるようじゃありませんか。そう瘡やせてちやいかん。身体が資本だから」

「しかし先生だって随分瘡やせていらっしやるじゃありませんか」  
「わたし？ わたしは瘡やせている。瘡やせてはいるが大丈夫」

## 七

白き蝶ちようの、白き花に、

小<sup>ち</sup>き蝶<sup>せ</sup>の、小<sup>ち</sup>き花<sup>は</sup>に、

みだるるよ、みだるるよ。

長<sup>なが</sup>き憂<sup>うれ</sup>は、長<sup>なが</sup>き髪<sup>かみ</sup>に、

暗<sup>く</sup>き憂<sup>うれ</sup>は、暗<sup>く</sup>き髪<sup>かみ</sup>に、

みだるるよ、みだるるよ。

いたずらに、吹<sup>ふ</sup>くは野<sup>の</sup>分<sup>わ</sup>の、

いたずらに、住<sup>す</sup>むか浮<sup>う</sup>世<sup>せ</sup>に、

白<sup>しろ</sup>き蝶<sup>せ</sup>も、黒<sup>くろ</sup>き髪<sup>かみ</sup>も、

みだるるよ、みだるるよ。

と女<sup>おんな</sup>はうたい了<sup>おわ</sup>る。銀<sup>ぎん</sup>椀<sup>わん</sup>に珠<sup>たま</sup>を盛<sup>も</sup>りて、白<sup>しら</sup>魚<sup>うお</sup>の指<sup>ゆび</sup>に揺<sup>うご</sup>かしたら

ば、こんな声がでようと、男は聴<sup>き</sup>きとれていた。

「うまく、唱<sup>うた</sup>えました。もう少し稽<sup>けいこ</sup>古して音量が充分に出ると大きな場所で聴いても、立派に聴けるに違いない。今度演奏会でためしにやって見ませんか」

「厭<sup>いや</sup>だわ、ためしだなんて」

「それじゃ本式に」

「本式にやなおできませんわ」

「それじゃ、つまりおやめと云う訳<sup>わけ</sup>ですか」

「だってたくさん人のいる前なんかで、——恥<sup>は</sup>ずかしくって、声なんか出やしませんわ」

「その新体詩はいいでしょう」

「ええ、わたし大好き」

「あなたが、そうやって、唱ってるところを写真に一つ取りま  
しょうか」

「写真に？」

「ええ、厭ですか」

「厭じゃないわ。だけれども、取って人に御見せなさるでしよ  
う」

「見せてわるければ、わたし一人で見ています」

女は何にも云わずに眼を横に向けた。こぼれ梅を一枚の半襟はんえりの

おもて  
表に掃き集めた真中<sup>まんなか</sup>に、明星<sup>みょうじょう</sup>と見まがうほどの留針<sup>とめばり</sup>が的<sup>て</sup>※と耀<sup>かがや</sup>いて、男の眼を射る。

女の振り向いた方には三尺の台を二段に仕切って、下には長方形の交趾<sup>こうち</sup>の鉢<sup>はち</sup>に細き蘭<sup>らん</sup>が揺<sup>ゆ</sup>るがんとして、香<sup>かう</sup>の煙りのたなびくを待っている。上段にはメロスの愛神<sup>ヴィーナス</sup>の模像を、ほの暗<sup>へや</sup>き室の隅に夢かとばかり据<sup>す</sup>えてある。女の眼は端<sup>はし</sup>なくもこの裸体像の上に落ちた。

「あの像は」と聞く。

「無論模造です。本物は巴理<sup>パリ</sup>のルーヴルにあるそうです。しかし模造でもみごとですね。腰から上の少し曲ったところと両足の方

向とが非常に釣合がよく取れている。——これが全身完全だと非常なものです、惜しい事に手が欠けてます」

「本物も欠けてるんですか」

「ええ、本物が欠けてるから模造もかけてるんです」

「何の像でしょう」

「ヴィーナス。愛の神です」と男はことさらに愛と云う字を強く云った。

「ヴィーナス！」

深い眼睫まつげの奥から、ヴィーナスは溶とけるばかりに見詰められている。冷ひややかなる石膏せっこうの暖まるほど、丸まるき乳首ちくびの、呼吸につれ

て、かすかに動くかと疑あやしまるるほど、女は瞳ひとみを凝こらしている。

女自身も艶えんなるヴィーナスである。

「そう」と女はやがて、かすかな声で云う。

「あんまり見ているとヴィーナスが動き出しますよ」

「これで愛の神でしょうか」と女はようやく頭かしらを回めぐらした。

あなたの方が愛の神らしいと云おうとしたが、女と顔を見合した時、男は急に躊躇ちゆうちゆうした。云えば女の表情が崩くずれる。この、訝いぶかる

がごとく、訴うるがごとく、深い眼のうちに我を頼るがとき女

の表情を一瞬たりとも、我から働きかけて打ち壊こわすのは、メロス

のヴィーナスの腕かいなを折ると同じく大なる罪科ざいかである。

「<sup>けだか</sup>気高過ぎて……」と男の我を援<sup>たす</sup>けぬをもどかしがって女は首を傾けながら、我からと顔の上なる姿を変えた。男はしまったと思う。

「そう、すこし堅過ぎます。愛と云う感じがあまり現われていない」

「何だか冷めたいような心持がしますわ」

「その通りだ。冷めたいと云うのが適評だ。何だか妙だと思っていたが、どうも、いい言葉が出て来なかったんです。冷めたい――冷めたい、と云うのが一番いい」

「なぜこんなに、<sup>こし</sup>搾らえたんでしょう」

「やっぱリフ」ハロー・84ジラス式だから厳格なんでしょう」

「あなたは、こう云うのが御好き」

女は石像をさええ、自分と比較して愛人の心を窺<sup>うかが</sup>って見る。

ヴィーナスを愛するものは、自分を愛してはくれまいと云う掛念<sup>けねん</sup>がある。女はヴィーナスの、神である事を忘れている。

「好きって、いいじゃありませんか、古今<sup>ここん</sup>の傑作ですよ」

女の批判は直覺的である。男の好尚<sup>こうしやう</sup>は半ば<sup>なか</sup>伝説的である。なまじいに美学などを聴いた因果<sup>いんが</sup>で、男はすぐ女に同意するだけの勇氣を失っている。学問は己<sup>おの</sup>れを欺<sup>あやむ</sup>くとは心づかぬと見える。自から学問に欺かれながら、欺かれぬ女の判断を、いたずらに誤まれ

りとのみ見る。

「古今の傑作ですよ」と再び繰り返したのは、半ば女の趣味を教  
育するためであつた。

「そう」と女は云つたばかりである。石火<sup>せつか</sup>を交えざる刹那<sup>せつな</sup>に、  
はつと受けた印象は、学者の一言のために打ち消されるものでは  
ない。

「元来ヴィーナスは、どう云うものか僕にはいやな聯想<sup>れんそう</sup>がある」  
「どんな聯想なの」と女はおとなしく聞きつつ、双<sup>そう</sup>の手を立ちな  
がら膝<sup>ひざ</sup>の上に重ねる。手頸<sup>てくび</sup>からさきが二寸ほど白く見えて、あと  
は、しなやかなる衣<sup>きぬ</sup>のうちに隠れる。衣は薄紅<sup>うすくれなひ</sup>に銀の雨を濃く淡

く、所まだらに降らしたような縞柄しまがらである。

上になった手の甲の、五つに岐わかれた先の、しだいに細まりてかつ丸く、つやある爪に蔽おおわれたのが好いい感じである。指は細く長く、すらりとした姿を崩くずさぬほどに、柔らかな肉を持たねばならぬ。この調とえる姿が五本ごとに異ならねばならぬ。異なる五本が一つにかたまつて、纏まとまる調子をつくらねばならぬ。美しくしき手を持つ人は、美しくしき顔を持つ人よりも少ない。美しくしき手つ人には貴たつとき飾りが必要である。

女は燦さんたるものを、細き肉に戴いたいている。

「その指輪は見馴みれませんね」

「これ？」と重ねた手は解<sup>と</sup>けて、右の指に耀<sup>かがや</sup>くものをなぶる。

「この間父様を買っていただいたの」

「<sup>ダイヤモンド</sup>金剛石ですか」

「そうですね。天賞堂から取ったんですから」

「あんまり御父さんを苛<sup>いじ</sup>めちゃいけませんよ」

「あら、そうじゃないのよ。父様の方から買って下さったのよ」

「そりゃ珍しい現象ですね」

「ホホホ本当ね。あなたその訳<sup>わけ</sup>を知ってて」

「知るものですか、探偵<sup>たんてい</sup>じゃあるまいし」

「だから御存じないでしょうと云うのですよ」

「だから知りませんよ」

「教えて上げましょうか」

「ええ教えて下さい」

「教えて上げるから笑っちゃいけませんよ」

「笑やしません。この通り真面目まじめでさあ」

「この間ね、池上いけがみに競馬があつたでしょう。あの時父様があすこ

へいらしてね。そうして……」

「そうして、どうしたんです。——拾つて来たんですか」

「あら、いやだ。あなたは失敬ね」

「だって、待っててもあとをおっしやらないですもの」

「今云うところなのよ。そうして賭<sup>かけ</sup>をなすったんですって」

「こいつは驚ろいた。あなたの御父さんもやるんですか」

「いえ、やらないんだけれども、試<sup>ため</sup>しにやって見たんだって」

「やっぱりやったんじゃないですか」

「やった事はやったの。それで御金を五百円ばかり御取りになつたんだって」

「へえ。それで買って頂いたのですか」

「まあ、そうよ」

「ちよつと拝見」と手を出す。男は耀<sup>かがや</sup>くものを軽<sup>かる</sup>く抑<sup>おさ</sup>えた。

指輪は魔物である。沙翁<sup>さおう</sup>は指輪を種に幾多の波瀾<sup>はらん</sup>を描いた。若

い男と若い女を目に見えぬ空裏くうりに繋つなぐものは恋である。恋をその  
まま手にとらすものは指輪である。

三重みえにうねる細き金の波の、環わと合あうて膨ふくれ上るただ中を穿うがち  
て、動くなよと、安らかに据すえたる宝石の、眩まばゆさは天あめが下したを射  
れど、毀こぼたねば波の中より奪うばいがたき運命は、君ありての妾われ、妾われ  
故ゆえにの君である。男は白き指もろ共に指輪を見詰めている。

「こんな指輪だったのか知らん」と男が云う。女は寄り添よきうて同  
じ長椅子ソファを二人の間に分わかつ。

「昔しさる好事家こうずかがヴィーナスの銅像を掘り出して、吾わが庭の眺なが  
めにと橄欖かんらんの香かの濃く吹くあたりに据すえたそうです」

「それは御話？　突然なのね」

「それから或<sup>ある</sup>日テニスをしていたら……」

「あら、ちつとも分らないわ。誰がテニスをするの。銅像を掘り出した人なの？」

「銅像を掘り出したのは人足<sup>にんそく</sup>で、テニスをしたのは銅像を掘り出さした主人の方です」

「どっちだって同じじゃありませんか」

「主人と人足と同じじゃ少し困る」

「いいえさ、やっぱり掘り出した人がテニスをしたんでしよう」

「そう強情を御張りになるなら、それでよろしい。——では掘り

出した人がテニスをする……」

「強情じゃない事よ。じゃ銅像を掘り出さした方がテニスをするの、ね。いいでしょう」

「どっちでも同じでさあ」

「あら、あなた、御怒りなすったの。だから掘り出さした方だつて、あやまっているじゃありませんか」

「ハハハあやまらなくってもいいです。それでテニスをしているとね。指輪が邪魔になつて、ラケットが思うように使えないんです。そこで、それはずしてね、どこかへ置こうと思ったが小さいものだから置きなくすといけない。——大事な指輪ですよ。」

結納ゆいのうの指輪なんです」

「誰と結婚をなさるの？」

「誰とって、そいつは少し——やっぱりさる令嬢とです」

「あら、お話しになってもいいじゃありませんか」

「隠す訳じゃないが……」

「じゃ話してちょうだい。ね、いいでしょう。相手はどなたなの？」

「そいつは弱りましたね。実は忘れちゃった」

「それじゃ、ずるいわ」

「だって、メリメの本を貸しちまってちよっと調べられないです

もの」

「どうせ、御貸しになったんでしょうよ。ようございます」

「困ったな。せつかくのところで名前を忘れたもんだから進行する事が出来なくなつた。――じゃ今日は御やめにして今度その令嬢の名を調べてから御話をしましょう」

「いやだわ。せつかくのところですよしたり、なんかして」

「だって名前を知らないんですもの」

「だからその先を話してちょうだいな」

「名前はなくってもいいのですか」

「ええ」

「そうか、そんなら早くすればよかった。――それでいろいろ考えた末、ようやく考えついて、ヴィーナスの小指へちよつとはめたんです」

「うまいところへ気がついたのね。詩的じゃありませんか」

「ところがテニスが済んでから、すっかりそれを忘れてしまつて、しかも例の令嬢を連れに田舎<sup>いなか</sup>へ旅行してから気がついたのです。しかしいまさうどうもする事が出来ないから、それなりにして、未来の細君にはちよつとしたでき合<sup>あい</sup>の指環<sup>ゆびわ</sup>を買つて結納<sup>ゆいのう</sup>にしたのです」

「厭<sup>いや</sup>な方ね。不人情だわ」

「だって忘れたんだから仕方がない」

「忘れるなんて、不人情だわ」

「僕なら忘れないんだが、異人<sup>いじん</sup>だから忘れちゃったんです」

「ホホホ異人だって」

「そこで結納も滞<sup>とまど</sup>りなく済んでから、うちへ帰っていいよいよ結婚の晩に——」でわざと句を切る。

「結婚の晩にどうしたの」

「結婚の晩にね。庭のヴィーナスがどたりどたりと玄関を上がった……」

「おおいやだ」

「どたりどたりと二階が上がって」

「怖<sup>こわ</sup>いわ」

「寢室の戸をあけて」

「気味がわるいわ」

「気味がわるければ、そこいらで、やめて置きましょう」

「だけれど、しまいになるの」

「だから、どたり、どたりと寢室の戸をあけて」

「そこは、よしてちょうだい。ただしまいになるの」

「では間を抜きましょう。——あした見たら男は冷めたくなくて死んでたそうです。ヴィーナスに抱きつかれたところだけ紫色に

変つてたと云います」

「おお、厭いやだ」と眉まゆをあつめる。艶えんなる人の眉まゆをあつめたるは愛あい嬌ように醋すをかけたようなものである。甘き恋に酔えい過ぎたる男は折々のこの酸味さんみに舌を打つ。

濃くひける新月の寄り合いて、互たがひに頭かしらを擡もたげたる、うねりの下に、臃おぼろに見ゆる情けの波のかがやきを男はひたすらに打ち守る。

「奥さんはどうしたでしょう」女を憐むものは女である。

「奥さんは病氣になつて、病院に這はい入るのです」

「癒なおるのですか」

「そうさ。そこまでは覚えていない。どうしたっけかな」

「癒らない法はないでしょう。罪も何もないのに」

薄きにもかかわらず豊<sup>ゆたか</sup>なる下唇<sup>したくちびる</sup>はぷりぷりと動いた。男は女の不平を愚かなりとは思わず、情け深しと興がる。二人の世界は愛の世界である。愛はもつとも真面目<sup>まじめ</sup>なる遊戯である。遊戯なるが故に絶体絶命の時には必ず姿を隠す。愛に戯<sup>たわ</sup>むるる余裕のある人は至幸である。

愛は真面目である。真面目であるから深い。同時に愛は遊戯である。遊戯であるから浮いている。深くして浮いているものは水底の藻<sup>も</sup>と青年の愛である。

「ハハハハ心配なさらんでもいいです。奥さんはきつと癒りま

す」と男はメリメに相談もせず受合った。

愛は迷である。また悟りである。愛は天地万有をその中に吸収して刻下に異様の生命を与える。故に迷である。愛の眼を放つとき、大千世界はことごとく黄金である。愛の心に映る宇宙は深き情けの宇宙である。故に愛は悟りである。しかして愛の空気を呼吸するものは迷とも悟とも知らぬ。ただおのずから人を引きまた人に引かるる。自然は真空を忌み愛は孤立を嫌う。

「わたし、本当に御気の毒だと思えますわ。わたしが、そんなになったら、どうしようと思うと」

愛は己れに対して深刻なる同情を有している。ただあまりに深

刻なるが故に、享樂の満足ある場合に限りて、自己を貫き出で  
て、人の身の上にもまた普通以上の同情を寄せる事ができる。あ  
まりに深刻なるが故に失恋の場合において、自己を貫き出でて、  
人の身の上にもまた普通以上の怨恨えんこんを寄せる事が出来る。愛に成  
功するものは必ず自己を善人と思う。愛に失敗するものもまた必  
ず自己を善人と思う。成敗せいばいに論なく、愛は一直線である。ただ愛  
の尺度をもつて万事を律する。成功せる愛は同情を乗せて走る馬ばし  
車馬やうまである。失敗せる愛は怨恨を乗せて走る馬車馬ばしやうまである。愛は  
もつともわがままなるものである。

もつともわがままなる善人が二人、美しく飾りたる室しつに、深

刻なる遊戯を演じている。室外の天下は蕭寥しょうりょうたる秋である。天下の秋は幾多の道也先生どうやを苦しめつつある。幾多の高柳君を淋しがらせつつある。しかして二人はあくまでも善人である。

「この間の音楽会には高柳さんとごいっしょでしたね」

「ええ、別に約束した訳わけでもないんですが、途中で逢ったものですから誘ったのです。何だか動物園の前で悲しそうに立って、桜の落葉を眺ながめているんです。気の毒になつてね」

「よく誘さそって御上おあげになつたのね。御病氣じゃなくって」

「少し咳せきをしていたようです。たいした事じゃないでしょう」

「顔の色が大変御おわるかつたわ」

「あの男はあんまり神経質だもんだから、自分で病気をこしらえるんです。そうして慰めてやると、かえって皮肉を云うのです。

何だか近來はますます変になるようです」

「御気の毒ね。どうなすったんでしよう」

「どうしたって、好<sup>この</sup>んで一人坊<sup>ひとり</sup>っちになつて、世の中をみんな敵<sup>かたき</sup>のように思うんだから、手のつけようがないです」

「失恋なの」

「そんな話もきいた事もないですがね。いつそ細君でも世話をしたらいいかも知れない」

「御世話をしてあげたらいいでしょう」

「世話を<sup>きむ</sup>するって、ああ気<sup>き</sup>六<sup>む</sup>ずかしくっちゃ、駄目ですよ。細君が可<sup>かわ</sup>哀<sup>い</sup>想<sup>そう</sup>だ」

「でも。御持ちになつたら癒<sup>なお</sup>るでしょう」

「少しは癒<sup>な</sup>るかも知れないが、元来<sup>がんらい</sup>が性<sup>しょう</sup>分<sup>ぶん</sup>なんですからね。悲観する癖があるんです。悲観病に罹<sup>か</sup>ってるんです」

「ホホホホどうして、そんな病気が出たんでしょう」

「どうしてですかね。遺伝かも知れません。それでなければ小供のうち何かあつたんでしょう」

「何か御聞<sup>おきき</sup>になつた事はなくって」

「いいえ、僕あまりそんな事を聞くのが嫌<sup>きら</sup>だから、それに、あ

の男はいつこう何にも打ち明けない男でね。あれがもつと淡泊に  
思った事を云う風だと慰めようもあるんだけど」

「困っていらっしやるんじゃないって」

「生活にですか、ええ、そりゃ困ってるんです。しかし無暗に金  
をやるうなんていったら擲きつけますよ」

「だって御自分で御金がとれそうなものじゃありませんか、文学  
士だから」

「取れるですとも。だからもう少し待ってるといいですが、どう  
も性急で卒業したあくる日からして、立派な作家になって、有  
名になって、そうして楽に暮らそうって云うのだから六ずかし

い」

「御国は一体どこなの」

「国は新潟県です」

「遠い所なのね。新潟県は御米の出来る所でしょう。やっぱり御百姓なの」

「農<sup>のう</sup>、なんでしよう。——ああ新潟県で思い出した。この間あなたが御出<sup>おいで</sup>のとき行き違<sup>ちがひ</sup>に出て行った男があるでしょう」

「ええ、あの長い顔の髭<sup>ひげ</sup>を生<sup>は</sup>やした。あれはなに、わたしあの人<sup>ひと</sup>の下駄<sup>げん</sup>を見て吃驚<sup>びっくり</sup>したわ。随分薄っぺらなのね。まるで草履<sup>ぞうり</sup>よ」

「あれで泰然たるものですよ。そうしてちっとも愛嬌<sup>あいぎやう</sup>のない男で

ね。こっちから何か話しかけても、何にも応答をしない」

「それで何しに来たの」

「江湖雑誌こうこざっしの記者と云うんで、談話の筆記に来たんです」

「あなたの？ 何か話しておやりになつて？」

「ええ、あの雑誌を送って来ているからあとで見せましょう。――

――それであの男について妙な話があるんです。高柳が国の中学にいた時分あの人に習ったんです――あれで文学士ですよ」

「あれで？ まあ」

「ところが高柳なんぞが、いろいろな、いたずらをして、苛いじめて追い出してしまったんです」

「あの人を？ ひどい事をするのね」

「それで高柳は今となって自分が生活に困難しているものだから、後悔して、さぞ先生も追い出されたために難義をしたろう、逢<sup>あ</sup>ったら謝罪するって云ってましたよ」

「全く追い出されたために、あんなに零落<sup>れいらく</sup>したんでしょうか。そうすると気の毒ね」

「それからせんだって江湖雑誌の記者と云う事が分ったでしょう。だから音楽会の帰りに教えてやったんです」

「高柳さんはいらしたでしうか」

「行ったかも知れませんよ」

「追い出したんなら、本当に早く御詫<sup>おわび</sup>をなさる方がいいわね」

善人の会話はこれで一段落を告げる。

「どうです、あっちへ行つて、少しみんなと遊<sup>あそ</sup>ぼうじゃありませんか。いやですか」

「写真は御やめなの」

「あ、すっかり忘れていた。写真は是非取らして下さい。僕はこれでなかなか美術的な奴を取るんです。うん、商売人の取るのは下等ですよ。——写真も五六年この方<sup>かた</sup>大變進歩してね。今じゃ立派な美術です。普通の写真はだれが取ったって同じでしょう。近頃のは個人個人の趣味で調子がまるで違ってくるんです。いらな

いものを抜いたり、いったいの調子を和やわげたり、際きわどい光線の作用を全景にあらわしたり、いろいろな事をやるんです。早いものでもう景色専門家や人物専門家が出来てるんですからね」

「あなたは人物の専門家なの」

「僕？　僕は——そうさ、——あなただけの専門家になろうと思うのです」

「厭いやなかたね」

ダイヤモンドがきらりとひらめいて、薄紅うすくれなひの袖そでのゆるる中から細い腕かいなが男の膝ひざの方に落ちて来た。軽かろくあたったのは指先ばかりである。

善人の会話は写真撮影に終る。

八

秋は次第に行く。虫の音はようやく細る。

筆硯に命を籠むる道也先生は、ただ人生の一大事因縁に着して、他を顧みるの暇なきが故に、暮るる秋の寒きを知らず、虫の音の細るを知らず、世の人のわれにつれなきを知らず、爪の先に垢のたまるを知らず、蛸寺の柿の落ちた事は無論知らぬ。動くべき社会をわが力にて動かすが道也先生为天職である。高く、偉い

なる、公おおやけなる、あるものの方かたに一步なりとも動かすが道也先生の使命である。道也先生はその他を知らぬ。

高柳君はそうは行ゆかぬ。道也先生の何事をも知らざるに反して、彼は何事をも知る。往来の人の眼つきも知る。肌寒はださむく吹く風の鋭どきも知る。かすれて渡る雁かりの数も知る。美しくしき女も知る。黄金おうごんの貴たつときも知る。木屑きくずのごとく取り扱わるる吾身わがみのはななくて、浮世うきよの苦しみの骨に食い入る夕々ゆづへゆづへを知る。下宿の菜さいの憐れにして芋いもばかりなるはもとより知る。知り過ぎたるが君の癖くせにして、この癖を増長せしめたるが君の病である。天下に、人間は殺しても殺し切れぬほどある。しかしこの病を癒なおしてくれるものは

一人もない。この病を癒してくれぬ以上は何千万人いるも、おらぬと同様である。彼は一人坊<sup>ひとりぼ</sup>つちになった。己<sup>おの</sup>れに足りて人に待つ事なき吞<sup>のん</sup>気な一人坊<sup>ひとりぼ</sup>つちではない。同情に餓<sup>う</sup>え、人間に渴<sup>かつ</sup>してやるせなき一人坊<sup>ひとりぼ</sup>つちである。中野君は病氣と云う、われも病氣と思う。しかし自分を一人坊<sup>ひとりぼ</sup>つちの病氣にしたものは世間である。自分を一人坊<sup>ひとりぼ</sup>つちの病氣にした世間は危<sup>き</sup>篤<sup>とく</sup>なる病人を眼前に控<sup>くわ</sup>えて嘯<sup>しゅう</sup>いている。世間は自分を病氣にしたばかりでは満足せぬ。半死の病人を殺さねばやまぬ。高柳君は世間を呪<sup>のろ</sup>わざるを得ぬ。

道也先生から見た天地は人のためにする天地である。高柳君か

ら見た天地は己れのためにする天地である。人のためにする天地であるから、世話をしてくれ手がなくても恨つしみとは思わぬ。己れのためにする天地であるから、己れをかまってくれぬ世を残酷と思う。

世話をするために生れた人と、世話をされに生れた人とはこれほど違う。人を指導するものと、人にたよるものとはこれほど違う。同じく一人坊っちでありながらこれほど違う。高柳君にはこの違いがわからぬ。

垢染あかじみた布団ふとんを冷やかひやかに敷いて、五分刈ごぶがりが七分ほどに延びた頭を薄ぎたない枕の上に横よこたえていた高柳君はふと眼を挙あげて庭前ていぜん

の梧桐ごとうを見た。高柳君は述作をして眼がつかれると必ずこの梧桐を見る。地理学教授法を訳して、くさくさすると必ずこの梧桐を見る。手紙を書いてさえ行き詰まるときつとこの梧桐を見る。見るはずである。三坪ほどの荒庭あれにわに見るべきものは一本の梧桐を除いてはほかに何にもない。

ことにこの間から、気分がわるくて、仕事をする元気がないの  
で、あやしげな机に頬杖ほおづえを突いては朝な夕なに梧桐ごとうを眺めながくらし  
て、うつらうつらとしていた。

一葉落いちちようちてと云う句は古い。悲しき秋は必ず梧桐から手を下くだ  
す。ばつさりと垣にかかる袷あわせの頃は、さまでに心を動かす縁よすがとも

ならぬと油断する翌朝よくあさまたばさりと落ちる。うそ寒いからと早く  
繰る雨戸の外にまたばさりと音がする。葉はようやく黄ばんで来  
る。

青いものがしだいに衰える裏から、浮き上がるのは薄く流した  
脂やにの色である。脂は夜ごとを寒く明けて、濃く変って行く。婆娑  
たる命は旦夕たんせきに逼るせま。

風が吹く。どこから来るか知らぬ風がすうと吹く。黄ばんだ梢こずえ  
は動ゆるぐとも見えぬ先に一葉二葉ひとはふたはがはらはら落ちる。あとはようや  
く助かる。

脂は夜ごとの秋の霜しもにだんだん濃こくなる。脂のなかに黒い筋が

立つ。箒ほうきでたたけば煎餅せんべいを折るような音がする。黒い筋は左右へ焼  
けひろがる。もう危うい。

風がくる。垣の隙すきから、椽えんの下から吹いてくる。危ういものは  
落ちる。しきりに落ちる。危ういと思う心さえなくなるほど梢しほを  
離れる。明らさまなる月がさすと枝の数が読まれるくらいあらわ  
に骨が出る。

わずかに残る葉を虫が食う。渋色しぶいろの濃いなかにぽつりと穴があ  
く。隣りにもあく、その隣りにもぽつりぽつりとあく。一面が穴  
だらけになる。心細いと枯れた葉が云う。心細かろうと見ている  
人が云う。ところへ風が吹いて来る。葉はみんな飛んでしまう。

高柳君がふと眼を挙げた時、梧桐はすべてこれらの径路けいろを通り越して、から坊主ぼうずになっていた。窓に近く斜なめに張った枝の先にただ一枚の虫食葉むしくいばがかぶりついている。

「一人坊ひとりぼつちだ」と高柳君は口のなかで云った。

高柳君は先月あたりから、妙な咳せきをする。始めは気にもしなかった。だんだん腹に答えのない咳が出る。咳だけではない。熱も出る。出るかと思うとやむ。やんだから仕事をしようかと思うとまた出る。高柳君は首を傾けた。

医者に行つて見てもらおうかと思ったが、見てもらうと決心すれば、自分で自分を病気だと認定した事になる。自分で自分の病

気を認定するのは、自分で自分の罪惡を認定するようなものである。自分の罪惡は判決を受けるまでは腹のなかで弁護するのが人情である。高柳君は自分の身体からだを医師の宣告にかからぬ先に弁護した。神経であると弁護した。神経と事実とは兄弟であると云う事を高柳君は知らない。

夜になると時々寝汗ねあせをかく。汗で眼がさめる事がある。真暗まっくらななかで眼がさめる。この真暗さが永久続いてくれればいいと思う。夜があけて、人の声がして、世間が存在していると云う事がわかると苦痛である。

暗いなかをなお暗くするために眼を眠ねむって、夜着よぎのなかへ頭を

つき込んで、もうこれぎり世の中へ顔が出したくない。このまま眠りに入って、眠りから醒めぬ間に、あの世に行ったら結構だろうと考えるながら寝る。あくる日になると太陽は無慈悲にも赫奕かくえきとして窓を照らしている。

時計を出しては一日に脈みやくを何遍となく験けんして見る。何遍験しても平脈へいみやくではない。早く打ち過ぎる。不規則に打ち過ぎる。どうしても尋常には打たない。痰たんを吐はくたびに眼を皿のようにして眺めながる。赤いものの見えないのが、せめてもの慰安である。

痰たんに血まじの交らぬのを慰安とするものは、血の交る時にはただ生きてゐるのを慰安とせねばならぬ。生きてゐるだけを慰安とする

運命に近づくかも知れぬ高柳君は、生きていただけを厭う人である。人は多くの場合においてこの矛盾を冒す。彼らは幸福に生きるのを目的とする。幸福に生きんがためには、幸福を享受すべき生そのものの必要を認めぬ訳には行かぬ。単なる生命は彼らの目的にあらずとするも、幸福を享<sup>う</sup>け得る必須条件として、あらゆる苦痛のもとに維持せねばならぬ。彼らがこの矛盾を冒<sup>おか</sup>して塵界に流<sup>る</sup>転するとき死なんとして死ぬ能<sup>あた</sup>わず、しかも日ごとに死に引き入れらるる事を自覚する。負債を償<sup>つぐな</sup>うの目的をもって月々に負債を新たにしつつあると変りはない。これを悲酸<sup>ひさん</sup>なる煩悶<sup>はんもん</sup>と云う。

高柳君は床<sup>とこ</sup>のなかから這<sup>は</sup>い出した。瓦斯<sup>ガス</sup>糸<sup>いと</sup>の蚊<sup>か</sup>絨<sup>が</sup>の綿入<sup>かすり</sup>の上か

ら黒木綿くろもめんの羽織を着る。机に向う。やっぱり翻訳をする了簡りようけんである。四五日しごんちそのままにして置いた机の上には、障子の破れから吹き込んだ砂が一面に軽かるくたまっている。硯すずりのなかは白く見える。高柳君は面倒だと見えて、塵ちりも吹かずに、上から水をさした。水みず入いれに在ある水ではない。五六輪の豆菊まめぎくを挿さした硝子ガラスの小瓶こびんを花ながら傾けて、どっと硯の池に落した水である。さかに磨すり減らした古梅園こばいえんをしきりに動かすと、じやりじやり云う。高柳君は不愉快の眉まゆをあつめた。不愉快の起る前に、不愉快を取り除く面倒をあえてせずして、不愉快の起った時に唇くちびるを嚙かむのはかかる人の例である。彼は不愉快を忍ぶべく余り鋭敏である。しかしてあらかじ

めこれに備うべくあまり自棄<sup>じき</sup>である。

机上に原稿紙を展<sup>の</sup>べた彼は、一時間ほど呻吟<sup>しんぎん</sup>してようやく二三枚黒くしたが、やがて打ちやるように筆を擱<sup>お</sup>いた。窓の外には落ち損<sup>そく</sup>なつた一枚の桐<sup>きり</sup>の葉が淋しく残っている。

「一人坊<sup>ひとりぼ</sup>つちだ」と高柳君は口のうちでまた繰り返した。

見るうちに、葉は少しく上に揺れてまた下に揺れた。いよいよ落ちる。と思う間に風ははたとやんだ。

高柳君は巻紙を出して、今度は故里<sup>ふるさと</sup>の御母<sup>おつか</sup>さんの所へ手紙を書き始めた。「寒気<sup>かんき</sup>相加わり候<sup>そうこう</sup>処如何御暮<sup>あそ</sup>し被遊<sup>は</sup>候<sup>や</sup>。不相変<sup>あいかわらず</sup>御丈夫の事と奉遥察<sup>ようさつ</sup>候<sup>ぞう</sup>。私事も無事」とまでかいて、しばらく考えて

いたが、やがてこの五六行を裂いてしまった。裂いた反古ほごを口へ入れてくちやくちや噛かんでいると思ったら、ぽつと黒いものを庭へ吐き出した。

一人坊っちの葉がまた揺れる。今度は右へ左へ二三度首を振る。その振りがようやく収おさまったと思う頃、颯さつと音がして、病葉わくらばはぽたりと落ちた。

「落ちた。落ちた」と高柳君はさも落ちたらしく云った。

やがて三尺の押入を開あけて茶色の中折なかおれを取り出す。門口かどぐちへ出て空を仰ぐと、行く秋を重いものが上から囲かこんでいる。

「御婆さん、御婆さん」

はいと婆さんが雑巾ぞうきんを刺す手をやめて出て来る。

「傘かさをとって下さい。わたしの室へやの椽側えんがわにある」

降れば傘をさすまでも歩く考である。どこと云う目的あてもないが、ただ歩くつもりなのである。電車の走るのは電車が走るのだが、なぜ走るのだから電車にもわかるまい。高柳君は自分があるくだけは承知している。しかしなぜあるくのだかは電車のごとく無意識である。用もなく、あてもなく、またあるきたくもないものを無理にあるかせるのは残酷である。残酷があるかせるのだから敵かたきは取れない。敵が取りたければ、残酷を製造した発頭人ほつとうにんに向うよりほかに仕方がない。残酷を製造した発頭人は世間である。高柳

君はひとり敵の中をあるいている。いくら、あるいてもやつぱり  
一人坊<sup>ひとりぼ</sup>つちである。

ぽつりぽつりと折々降ってくる。初時雨<sup>はつしぐれ</sup>と云うのだろう。豆腐<sup>とうふ</sup>  
屋<sup>や</sup>の軒下に豆を絞<sup>しぼ</sup>った殻が、山のように桶<sup>おけ</sup>にもってある。山の頂<sup>いただき</sup>  
がぼくりと欠けて四面から煙が出る。風に連れて煙は往来へ靡<sup>なび</sup>  
く。塩物屋<sup>しおものや</sup>に鮭<sup>さけ</sup>の切身が、渋<sup>さ</sup>びた赤い色を見せて、並んでいる。  
隣りに、しらす干<sup>か</sup>がかたまつて白く反<sup>そ</sup>り返る。鰯節屋<sup>かつぶしや</sup>の小僧が一  
生懸命に土佐節<sup>とさぶし</sup>をささらで磨<sup>みが</sup>いている。ぴかりぴかりと光る。奥  
に婚礼用の松が真青<sup>まっさお</sup>に景氣を添える。葉茶屋<sup>はぢやや</sup>では丁稚<sup>でっち</sup>が抹茶<sup>まっचा</sup>を  
ゆつくりゆつくり臼<sup>うす</sup>で挽<sup>ひ</sup>いている。番頭は往来を睨<sup>にら</sup>めながら茶を

飲んでゐる。――「えっ、あぶねえ」と高柳君は突き飛ばされた。

黒紋付の羽織に山高帽を被<sup>かぶ</sup>つた立派な紳士が綱曳<sup>つなひき</sup>で飛んで行く。車へ乗るものは勢<sup>いきおい</sup>がいい。あるくものは突き飛ばされても仕方がない。「えっ、あぶねえ」と拳突<sup>けんつ</sup>を喰<sup>く</sup>わされても黙<sup>もく</sup>つておらねばならん。高柳君は幽霊のようにあるいている。

青銅<sup>からかね</sup>の鳥居をくぐる。敷石の上に鳩が五六羽、時雨<sup>しぐれ</sup>の中を遠近<sup>おちこち</sup>している。唐人髻<sup>とうじんまげ</sup>に結<sup>い</sup>つた半玉<sup>はんぎよく</sup>が洪蛇<sup>しぐじや</sup>の目<sup>め</sup>をさして鳩を見ている。あらい八丈<sup>はちじょう</sup>の羽織を長く着て、素足<sup>すあし</sup>を爪皮<sup>つまかわ</sup>のなかへさし込んで立つた姿を、下宿の二階窓から書生が顔を二つ出して評<sup>ひやう</sup>してい

る。柏手<sup>かしわで</sup>を打って鈴を鳴らして御賽銭<sup>おさいせん</sup>をなげ込んだ後姿が、見て  
いる間<sup>ま</sup>にこっちへ逆戻<sup>ぎやくもどり</sup>をする。黒縮緬<sup>くろちりめん</sup>へ三<sup>み</sup>つ柏<sup>かしわ</sup>の紋をつけた意気  
な芸者がすれ違ふときに、高柳君の方に一瞥<sup>いちべつ</sup>の秋波<sup>しゅうは</sup>を送った。高  
柳君は鉛<sup>しよ</sup>を背負<sup>しょ</sup>ったような重い心持ちになる。

石段を三十六おりる。電車がごうっごうっと通る。岩崎<sup>いわさき</sup>の塀<sup>へい</sup>が  
冷酷<sup>そび</sup>に聳<sup>そび</sup>えている。あの塀<sup>へい</sup>へ頭をぶつけて壊<sup>こわ</sup>してやろうかと思  
う。時雨<sup>しぐれ</sup>はいつか休<sup>や</sup>んで電車の停留所に五六人待っている。背<sup>せ</sup>の  
高い黒紋付が蝙蝠傘<sup>こうもり</sup>を畳んで空を仰いでいた。

「先生<sup>ひとりぼ</sup>」と一人坊<sup>ひとりぼ</sup>つちの高柳君は呼びかけた。

「やあ妙な所で逢<sup>あ</sup>いましたね。散歩かね」

「ええ」と高柳君は答えた。

「天氣のわるいによく散歩するですね。——岩崎の塀を三度周まわるといい散歩になる。ハハハハ」

高柳君はちよつといい心持ちになつた。

「先生は？」

「僕ですか、僕はなかなか散歩する暇なんかありません。不あいかわらず相変多忙でね。今日はちよつと上野の図書館まで調べ物に行つたです」

高柳君は道也先生に逢あうと何だか元気が出る。一人坊つちでありながら、こう平氣にしている先生が現在世のなかにあると思うと、多少は心丈夫になると見える。

「先生もう少し散歩をなさいませんか」

「そう、少しなら、してもいい。どっちの方へ。上野はもうよそ  
う。今通って来たばかりだから」

「私はどっちでもいいのです」

「じゃ坂を上<sup>あが</sup>って、本郷の方へ行きましょう。僕はあっちへ帰る  
んだから」

二人は電車の路に沿うてあるき出した。高柳君は一人坊<sup>つなひき</sup>つちが  
急に二人坊<sup>つなひき</sup>つちになったような気がする。そう思うと空も広く見  
える。もう綱<sup>きづかい</sup>曳から突き飛ばされる気遣はあるまいとまで思う。

「先生」

「何ですか」

「さつき、車屋から突き飛ばされました」

「そりゃ、あぶなかった。怪我<sup>けが</sup>をしやしませんか」

「いいえ、怪我はしませんが、腹は立ちました」

「そう。しかし腹を立てても仕方がないでしょう。――しかし腹

も立てようによるですな。昔し渡辺<sup>わたなべ</sup>華山<sup>かざん</sup>が松平侯の供<sup>とも</sup>先に粗忽<sup>そこつ</sup>で

突き当ってひどい目に逢<sup>あ</sup>った事がある。華山がその時の事を書い

てね。――松平侯御横行――と云ってるですが。この御<sup>ご</sup>横行<sup>ごうぎょう</sup>の三

字が非常に面白いじゃないですか。尊<sup>たつと</sup>んで御<sup>おん</sup>の字をつけてるがそ

の裏に立派な反抗心がある。気概がある。君も綱引御横行と日記

にかくさ」

「松平侯って、だれですか」

「だれだか知れやしない。それが知れるくらいなら御横行はしないでですよ。その時発憤した華山はいまだに生きてるが、松平某なるものは誰も知りやしない」

「そう思うと愉快ですが、岩崎の塀<sup>へい</sup>などを見ると頭をぶつけて、壊<sup>こわ</sup>してやりたくなります」

「頭をぶつけて、壊せりや、君より先に壊してるものがあるかも知れない。そんな愚<sup>ぐ</sup>な事を云わずに正々堂々と創作なら、創作をなされば、それで君の寿命は岩崎などよりも長く伝わるのです」

「その創作をさせてくれないのです」

「誰が」

「誰がつて訳じゃないですが、出来ないのです」

「からだでも悪いですか」と道也先生横から覗のぞき込む。高柳君の頬ほは熱おを帯おびて、蒼あおい中から、ほてっている。道也は首を傾けた。

「君坂きみを上がると呼吸いきが切れるようだが、どこか悪いじゃないですか」

強しいて自分にさえ隠しそうとする事を言いあてられると、言いあてられるほど、明白な事実であつたかと落胆がっかりする。言いあてられ

た高柳君は暗い穴の中へ落ちた。人は知らず、かかる冷酷なる同情を加えて憚<sup>はば</sup>からぬが多い。

「先生」と高柳君は往来に立ち留<sup>たど</sup>まった。

「何ですか」

「私は病人に見えるでしょうか」

「ええ、まあ、——少し顔色は悪いです」

「どうしても肺病でしょうか」

「肺病？ そんな事はないです」

「いいえ、遠慮なく云って下さい」

「肺の気<sup>け</sup>でもあるんですか」

「遺伝です。おやじは肺病で死にました」

「それは……」と云ったが先生返答に窮した。

膀胱<sup>ぼうこう</sup>にはち切れるばかり水を詰めたのを針ほどの穴に洩<sup>も</sup>らせば、針ほどの穴はすぐ白銅ほどになる。高柳君は道也の返答をきかぬがごとくに、しゃべってしまふ。

「先生、私の歴史を聞いて下さいますか」

「ええ、聞きますとも」

「おやじは町で郵便局の役人でした。私が七つの年に拘引<sup>こういん</sup>されてしまいました」

道也先生は、だまったまま、話し手といっしよにゆるく歩<sup>ほ</sup>を運

ばして行く。

「あとで聞くと官金を消費したんだそうで——その時はなんにも知りませんでした。母にきくと、おとっさんは今に帰る、今に帰ると云ってました。——しかしとうとう帰って来ません。帰らないはずです。肺病になつて、牢屋ろうやのなかで死んでしまったんです。それもずっとあとで聞きました。母は家を置いて村へ引き込みました。……」

向むこうから威勢のいい車が二挺束髪にちようそくはつの女を乗せてくる。二人はちよつとよける。話はとぎれる。

「先生」

「何ですか」

「だから私には肺病の遺伝があるんです。駄目です」

「医者に見せたですか」

「医者には——見せません。見せたって見せなくったって同じ事です」

「そりゃ、いけない。肺病だつて癒なおらんとは限らない」

高柳君は気味の悪い笑いを洩もらした。時雨しぐれがはらはらと降つて

来る。からたち寺でらの門の扉に碧巖録提唱へきがんろくていしやうと貼りつけた紙が際立きわだつ

て白く見える。女学校から生徒がぞろぞろ出てくる。赤や、紫

や、海老茶えびちやの色が往来へちらばる。

「先生、罪悪も遺伝するものでしょうか」と女学生の間を縫いながら歩<sup>ほ</sup>を移しつつ高柳君が聞く。

「そんな事があるものですか」

「遺伝はしないで、私は罪人の子です。切<sup>せつ</sup>ないです」

「それは切ないに違いない。しかし忘れなくっちゃいけない」

警察署から手錠<sup>てじょう</sup>をはめた囚人が二人、巡査に護送されて出てくる。時雨<sup>しぐれ</sup>が囚人の髪にかかる。

「忘れても、すぐ思い出します」

道也先生は少し大きな声を出した。

「しかしあなたの生涯<sup>しょうがい</sup>は過去にあるんですか未来にあるんです

か。君はこれから花が咲く身ですよ」

「花が咲く前に枯れるんです」

「枯れる前に仕事をするんです」

高柳君はだまっている。過去を顧みれば罪である。未来を望めば病気である。現在は麵麩パンのためにする写字である。

道也先生は高柳君の耳の傍そばへ口を持って来て云った。

「君は自分だけが一人坊ひとりぼちだと思いかも知れないが、僕も一人坊ひとりぼちですよ。一人坊ひとりぼちは崇高なものです」

高柳君にはこの言葉の意味がわからなかった。

「わかったですか」と道也先生がきく。

「崇高——なぜ……」

「それが、わからなければ、とうてい一人坊っちでは生きていられません。——君は人より高い平面にいると自信しながら、人がその平面を認めてくれないために一人坊っちなのでしょう。しかし人が認めてくれるような平面ならば人も上<sup>あが</sup>ってくる平面です。

芸者や車引<sup>くるまひき</sup>に理会されるような人格なら低いにきまっています。それを芸者や車引も自分と同等なものと思い込んでしまうから、先方から見くびられた時腹が立ったり、煩悶<sup>はんもん</sup>するのです。もしあんなものと同等なら創作をしたって、やっぱり同等の創作しか出来ない訳だ。同等でなければこそ、立派な人格を発揮する作物<sup>さくぶつ</sup>も出

来る。立派な人格を発揮する作物が出来なければ、彼らからは見くびられるのはもったもでしょう」

「芸者や車引はどうでもいいですが……」

「例はだれだって同じ事です。同じ学校を同じに卒業した者だつて変りはありません。同じ卒業生だから似たものだろうと思うのは教育の形式が似ているのを教育の実体が似ているものと考え違ちがひした議論です。同じ大学の卒業生が同じ程度のものであったら、大学の卒業生はことごとく後世に名を残すか、またはことごとく消えてしまわなくってはならない。自分こそ後世に名を残そうと力りきむならば、たとい同じ学校の卒業生にもせよ、ほかのものは残

らないのだと云う事を仮定してかからなければなりません。すでにその仮定があるなら自分と、ほかの人とは同様の学士であるにもかかわらずすでに大差別があると自認した訳じゃありませんか。大差別があると自任しながら他が自分<sup>ひと</sup>を解してくれんと云って煩悶するのは矛盾です」

「それで先生は後世に名を残すおつもりでやっていらっしゃるんですか」

「わたしのは少し、違います。今の議論はあなたを本位にして立てた議論です。立派な作物を出して後世に伝えたいと云うのが、あなたの御希望のようだから御話しをしたのです」

「先生のが承<sup>うけたまわ</sup>る事が出来るなら、教えて頂きますまいか」

「わたしは名前なんてあてにならないものはどうでもいい。ただ自分の満足を得<sup>う</sup>るために世のために働くのです。結果は悪名になろうと、臭名<sup>しゅうめい</sup>になろうと気<sup>きち</sup>狂<sup>がい</sup>になろうと仕方がない。ただこう働かなくっては満足が出来ないから働くまでの事です。こう働かなくって満足が出来ないところをもつて見ると、これが、わたしの道に相違ない。人間は道に従うよりほかにやりようのないものだ。人間は道の動物であるから、道に従うのが一番貴<sup>たつと</sup>いのだろうと思っています。道に従う人は神も避けねばなんのです。岩崎の塀<sup>へい</sup>なんか何でもない。ハハハハ」

剥はげかかった山高帽を阿弥陀あみだに被かぶつて毛襦子張けじゆすばりの蝙蝠傘こうもりをさした、一人坊ひとりぼっちの腰弁当の細長い顔から後光ごこうがさした。高柳君ははっと思う。

往来のものは右へ左へ行く。往来の店は客を迎え客を送る。電車は出来るだけ人を載のせて東西に走る。織るがごとちまたき街の中に喪そう家の犬かのごとく歩む二人は、免職になりたての属官と、墮落した青書生と見えるだろう。見えても仕方がない。道也はそれでたくさんだと思う。周作はそれではならぬと思う。二人は四丁目の角でわかれた。

## 九

小春の日に温め返された別荘の小天地を開いて結婚の披露をする。

愛は偏狹を嫌う、また専有をにくむ。愛したる二人の間に有り余る情を挙げて、博く衆生を潤おす。有りあまる財を抛って多くの資格を会す。来らざるものは和楽の扇に麾く風を厭うて、寒き雪空に赴く鳬雁の類である。

円満なる愛は触るところのすべてを円満にす。二人の愛は曇り勝ちなる時雨の空さえも円満にした。——太陽の真上に照る日

である。照る事は誰でも知るが、だれも手を翳<sup>かざ</sup>して仰ぎ見る事のならぬくらい明<sup>あき</sup>かに照る日である。得意なるものに明かなる日の嫌なものはない。客は車を駆って東西南北より来る。

杉の葉の青きを択<sup>えら</sup>んで、丸柱の太きを装<sup>よそお</sup>い、頭<sup>かしら</sup>の上一丈にて二本を左右より平<sup>たいら</sup>に曲げて続<sup>つ</sup>ぎ合せたるをアーチと云う。杉の葉の青きはあまりに蔽<sup>おごそか</sup>に過ぐ。愛の郷に入るものは、ただおごそかなる門を潜<sup>くぐ</sup>るべからず。青きものは暖かき色に和<sup>やわら</sup>げられねばならぬ。

裂けば煙<sup>けぶ</sup>る蜜柑<sup>みかん</sup>の味はしらず、色こそ暖かい。小春<sup>こはる</sup>の色は黄である。点々と珠<sup>たま</sup>を綴<sup>つづ</sup>る杉の葉影に、ゆたかなる南海の風は通う。

紫に明け渡る夜を待ちかねて、ぬっと出る旭日が、岡より岡を射  
て、万顆の黄玉は一時に耀く紀の国から、偷み来た香りと思われ  
る。この下を通るものは酔わねば出る事を許されぬ掟である。

緑門の下には新しき夫婦が立っている。すべての夫婦は新らし  
くなければならぬ。新しき夫婦は美しくなければならぬ。新しく  
美しき夫婦は幸福でなければならぬ。彼らはこの緑門の下に立つ  
て、迎えたる賓客にわが幸福の一分を与え、送り出す朋友にわが  
幸福の一分を与えて、残る幸福に共白髪ともしらがの長き末までを耽るべ  
く、新らしいのである、また美しいのである。

男は黒き上着に縞の洋袴しまズボンを穿く。折々は雪を欺く白き手拭ハンケチが黒

き胸のあたりに漂<sup>ただよ</sup>う。女は紋つきである。裾<sup>すそ</sup>を色どる模様の華<sup>はな</sup>やかなるなかから浮き上がるがごとく調子よくすらりと腰から上が抜け出でている。ヴィーナスは浪<sup>なみ</sup>のなかから生れた。この女は裾模様のなかから生れている。

日は明かに女の頸筋<sup>くびすじ</sup>に落ちて、角<sup>かど</sup>だたぬ咽喉<sup>のど</sup>の方はほの白き影となる。横から見るときその影が消えるがごとく薄くなつて、判<sup>はっ</sup>然<sup>き</sup>としたやさしき輪廓<sup>りんかく</sup>に終る。その上に紫<sup>むらさき</sup>のうずまくは一朵<sup>いちだ</sup>の暗き髪<sup>かみ</sup>を束<sup>つか</sup>ねながらも額際<sup>ひたいぎわ</sup>に浮かせたのである。金台に深紅<sup>しんく</sup>の七宝<sup>しっぽう</sup>を鏤<sup>ちりば</sup>めたヌーボー式の簪<sup>かんざし</sup>が紫の影から顔だけ出している。

愛は堅きものを忌<sup>い</sup>む。すべての硬性<sup>ようか</sup>を溶化<sup>ようか</sup>せねばやまぬ。女の

眼に耀<sup>かがや</sup>く光りは、光りそれ自<sup>みづ</sup>からの溶<sup>と</sup>けた姿である。不可思議な  
る神境から双眸<sup>そうぼう</sup>の底に漂<sup>ただよ</sup>うて、視界に入る万有を恍惚<sup>こうこつ</sup>の境に逍遙<sup>しょうよう</sup>  
せしむる。迎えられたる賓客は陶然<sup>とうぜん</sup>として園内に入る。

「高柳さんはいらっしゃるでしょうか」と女が小さな声で聞く。

「え？」と男は耳を持ってくる。園内では楽隊が越後獅子<sup>えちごじし</sup>を奏し  
ている。客は半分以上集まった。夫婦はなかへ這<sup>はい</sup>入って接待をせ  
ねばならん。

「そうさね。忘れていた」と男が云う。

「もうだいぶ御客さまがいらしたから、向<sup>むか</sup>へ行かないじゃわる  
いでしょう」

「そうさね。もう行く方がいいだろう。しかし高柳がくると可哀<sup>かわい</sup>想<sup>そう</sup>だからね」

「ここにいらつしやらないですか」

「うん。あの男は、わたしが、ここに見えないと門まで来て引き返すよ」

「なぜ？」

「なぜって、こんな所へ来た事はないんだから——一人で<sup>ひとり</sup>坊<sup>ぼ</sup>っちになる男なんだから——、ともかくもアーチを潜<sup>くぐ</sup>らせてしまわないと安心が出来ない」

「いらつしやるんでしょうね」

「来るよ、わざわざ行って頼んだんだから、いやでも来ると約束すると来ずにいられない男だからきつとくるよ」

「御おい厭やなんですか」

「厭いやって、なに別に厭いやな事もないんだが、つまりきまりがわるいのさ」

「ホホホ妙ですわね」

きまりのわるいのは自信がないからである。自信がないのは、人が馬鹿にするとと思うからである。中野君はただきまりが悪いからだと云う。細君はただ妙ですわねと思う。この夫婦は自分達のきまりを悪わるるがる事は忘れている。この夫婦の境界きょうがいにある人は、

いくらきまりを悪るがる性分しょうぶんでも、きまりをわるがらずに生涯しょうがいを済ませる事が出来る。

「いらっしやるなら、ここにいて上げる方がいいでしょう」

「来る事は受け合うよ。——いいさ、奥はおやじや何かだいぶいるから」

愛は善人である。善人はその友のために自家の不都合を犠牲にするを憚はばからぬ。夫婦は高柳君のためにアーチの下に待っている。高柳君は来ねばならぬ。

馬車の客、車の客の間に、ただ一人高柳君は蹠踉そうろうとして敵地に乗り込んで来る。この海のごとく和氣みなぎの漲りたる園遊会——新夫

婦の面おもてに湛たたえたる笑の波に酔うて、われ知らず幸福の同化を享うくる園遊会——行く年をしばらくは春に戻して、のどかなる日影に、窮陰きゆういんの面まのあたりなるを忘るべき園遊会は高柳君にとって敵地である。

富いそと勢いきおいと得意と満足の跋扈ばつこする所は東西球きゆうを極きわめて高柳君には敵地である。高柳君はアーチの下に立つ新しき夫婦を十歩の遠きに見て、これがわが友であるとはたしかに思わなかった。多少の不都合を犠牲にしてまで、高柳君を待ち受けたる夫婦の眼に高柳君の姿がちらと映じた時、待ち受けたにもかかわらず、待ち受け甲斐がいのある御客とは夫婦共に思わなかった。友誼ゆうぎの三分ぶ一は服装

が引き受ける者である。頭のなかで考えた友達と眼の前へ出て来た友達とはだいぶ違う。高柳君の服装はこの日の来客中でもっとも憐<sup>あわ</sup>れなる服装である。愛は贅<sup>ぜいたく</sup>沢である。美なるもののほかには価値を認めぬ。女はなおさらに価値を認めぬ。

夫婦が高柳君と顔を見合せた時、夫婦共「これは」と思った。

高柳君が夫婦と顔を見合せた時、同じく「これは」と思った。

世の中は「これは」と思った時、引き返せぬものである。高柳君は蹠<sup>そつろう</sup>踉として進んでくる。夫婦の胸にはつきざした「これは」は、すぐと愛の光りに姿をかくす。

「やあ、よく来てくれた。あまり遅いから、どうしたかと思って

心配していたところだった」偽りもない事実である。ただ「これは」と思った事だけを略したまでである。

「早く来ようと思ったが、つい用があつて……」これも事実である。けれどもやはり「これは」が略されている。人間の交際にはいつでも「これは」が略される。略された「これは」が重なる、喧嘩なしの絶交となる。親しき夫婦、親しき朋友が、腹のなかの「これは、これは」でなし崩しに愛想をつかし合っている。

「これが妻だ」と引き合わせる。一人坊うちに美しい妻君を引き合わせるのは好意より出た罪悪である。愛の光りを浴びたものは、嬉しさがはびこって、そんな事に頓着はない。

何にも云わぬ細君はただしとやかに頭を下げた。高柳君はぼんやりしている。

「さあ、あちらへ——僕もいっしょに行こう」と歩を運めらす。十間ばかりあるくと、夫婦はすぐ胡麻塩ごましおおやじにつらまった。

「や、どうもみごとな御庭ですね。こう広くはあるまいと思つたが——いえ始めてで。おとっさんから時々御招きはあつたが、いつでも折悪しく用事があつて——どうも、よく御手入れが届いて、実に結構ですね……」

と胡麻塩はのべつに述べたてて容易に動かない。ところへまた二三人がやってくる。

「結構だ」「何坪ですか」「私も年来この辺<sup>へん</sup>を心掛けておりますが」などと新夫婦を取り捲<sup>ま</sup>いてしまふ。高柳君は憮然<sup>ぶぜん</sup>として中心をはずれて立っている。

すると向うから、櫂<sup>たすき</sup>がけの女が駈けて来て、いきなり塩瀬<sup>しおぜ</sup>の五<sup>いつ</sup>つ紋<sup>もん</sup>をつらまえた。

「さあ、いらっしゃい」

「いらっしゃいたって、もうほかで御馳走<sup>ごちそう</sup>になっちまったよ」

「ずるいわ、あなたは、他<sup>ひと</sup>にこれほど馳<sup>か</sup>けずり廻らせて」

「旨<sup>うまい</sup>いものも、ない癖に」

「あるわよ、あなた。まあいいからいらっしゃいてえのに」とぐ

いぐい引つ張る。塩瀬<sup>しおぜ</sup>は羽織が大事だから引かれながら行く、途<sup>とた</sup>端<sup>ん</sup>に高柳君に突き当った。塩瀬はちよつと驚ろいて振り向いたまでは、粗忽<sup>そこつ</sup>をして恐れ入ったと云う面相<sup>めんそう</sup>をしていたが、高柳君の顔から服装を見るや否や、急に表情を変えた。

「やあ、こりや」と上からさげすむように云つて、しかも立って見ている。

「いらっしやいよ。いいからいらっしやいよ。構わないでも、いいからいらっしやいよ」と女は高柳君を後目<sup>しりめ</sup>にかけたなり塩瀬を引つ張つて行く。

高柳君はぽつぽつ歩き出した。若夫婦は遥<sup>はる</sup>かあなたに遮<sup>さへぎ</sup>られて

いっしょにはなれぬ。芝生しばふの真中に長い天幕テントを張る。中を覗のぞいて見たら、暗い所に大きな菊の鉢はちがならべてある。今頃こんな菊がまだあるかと思う。白い長い花卉が中心から四方へ数百片延び尽して、延び尽した端はじからまた随意に反そり返りつつ、あらん限りの狂態を演じているのがある。背筋せすじの通った黄ひらな片が中へ中へと抱き合つて、真中に大切なものを守護するごとく、こんもりと丸くなつたのもある。松の鉢も見える。玻璃盤はりばんに堆うずたかく林檎りんごを盛つたのが、白い卓布たくふの上に鮮あざやかに映る。林檎の頬が、暗きうちにも光っている。蜜柑を盛つた大皿もある。傍そばでけけらけらと笑う声がある。驚ろいて振り向くと、しるくはつとを被かぶつた二人の若い男

が、二人共相好そうごうを崩くずしている。

「妙だよ。実に」と一人が云う。

「珍だね。全く田舎者いなかものなんだよ」と一人が云う。

高柳君はじつと二人を見た。一人は胸開むねあきの狭い。模様のある胴チヨ衣ツキを着て、右手の親指を胴衣のぽっけつとへ突き込んだまま肘ひじを張っている。一人は細い杖つえに言訳いいわけほどに身をもたせて、護謨ゴムびき靴の右の爪先つまさきを、豎たてに地に突いて、左足一本で細長いからだの中心を支ささえている。

「まるで給仕人ウエーターだ」と一本足が云う。

高柳君は自分の事を云うのかと思った。すると色胴衣が

「本当にさ。園遊会に燕尾服えんびふくを着てくるなんて——洋行しないだつてそのくらいな事はわかりそうなものだ」と相鎚あいづちを打っている。向うを見るとなるほど燕尾服がいる。しかも二人かたまつて、何か話をしている。同類相集まると云う訳だろう。高柳君はようやくあれを笑つてゐるのだなと気がついた。しかしなぜ燕尾服が園遊会に適しないかはとうてい想像がつかなかった。

芝生の行き当りに葭簀よしず掛けの踊舞台おどりぶたいがあつて、何かしきりにやっている。正面は紅白の幕で庇ひさしをかこつて、奥には赤い毛氈もうせんを敷いた長い台がある。その上に三味線を抱えた女が三人、抱えないのが二人並んでいる。弾ひくものと唄うたうものと分業にしたのである

る。舞台の真中に金紙きんがみの烏帽子えぼしを被かぶつて、真白に顔を塗りたてた女が、棹さおのようなものを持ったり、落したり、舞扇まいおんぎを開いたり、つぼめたり、長い赤い袖そでを翳かざしたり、翳さなかつたり、何でもしきりに身振しなをしている。半紙に墨黒々と朝妻船あさづまぶねとかいて貼はり出しているから、おおかた朝妻船と云うものだろうと高柳君はしばらく後ろうしの方から小さくなつて眺ながめていた。

舞台を左へ切れると、御影みかげの橋がある。橋の向むこうの築山つきやまの傍手わきてには松が沢山ある。松の間から暖簾のれんのようなものがちらちら見える。中で女がききと笑っている。橋を渡りかけた高柳君はまた引き返した。楽隊が一度に満庭の空気を動かして起る。

そろそろと天幕テントの所まで帰って来る。今度は中を覗のぞくのをやめにした。中は大勢でがやがやしている。入口へ回って見ると人で埋うづまって皿の音がしきりにする。若夫婦はどこにいるか見えぬ。

しばらく様子を窺うかがっていると突然万歳と云う声がした。楽隊の音は消されてしまう。石橋の向うで万歳と云う返事がある。これは迷子まいごの万歳である。高柳君はのそりと疝違かんちがいをした客のように天幕のうちに這入はいった。

皿だけ高く差し上げて人と人の間を抜けて来たものがある。

「さあ、御上おあがんなさい。まだあるんだが人が込んでて容易に手が届かない」と云う。高柳君は自分にくれるにしては目の見当が少

し違ふと思つたら、後ろの方で「ありがとう」と云う涼しい声がした。十七八の桃色縮緬ももいろちりめんの紋付をきた令嬢が皿をもらつたまま立っている。

傍にいた紳士が、天幕の隅すみから一脚の椅子いすを持って来て、「さあこの上へ御乗せなさい」と令嬢の前に据すえた。高柳君は一間ばかり左へ進む。天幕の柱に倚よりかかつて洋服と和服が煙草たばこをふかしている。

「葉巻はやめたのかい」

「うん、頭にわるいそうだから——しかしあれを呑のみつけると、何だね、紙巻はとうてい呑めないね。どんな好いい奴やつでも駄目だ」

「そりゃ、価段ねだんだけだから——一本三十銭と三銭とは比較にならないからな」

「君は何を呑むのだい」

「これをつやつて見たまえ」と洋服が鱷皮わにがわの煙草入から太い紙巻を出す。

「なるほどエジプシアンか。これは百本五六円するだろう」

「安い割にはうまく呑めるよ」

「そうか——僕も紙巻でも始めようか。これなら日に二十本ずつにしても二十円ぐらいであがるからね」

二十円は高柳君の全収入である。この紳士は高柳君の全収入を

煙けむにするつもりである。

高柳君はまた左へ四尺ほど進んだ。二三人話をしている。

「この間ね、野添のぞえが例の人造肥料会社を起すので……」と頭の禿はげた鼻の低い金歯を入れた男が云う。

「うん。ありや当ったね。旨うまくやったよ」と真四角な色の黒い、

煙草入の金具のような顔が云う。

「君も賛成者のうちに名が見えたじゃないか」と胡麻塩頭ごましおあたまの最前さいぜん中野君を途中で強奪ごうだつしたおやじが云う。

「それさ」と今度は禿げの番である。「野添が、どうです少し持ってくださいませんか」と云うから、さようさ、わたしは今回はまあ

よしましようと思断わったのさ。ところが、まあ、そう云わずと、せめて五百株でも、実はもう貴所あなたの名前にしてあるんだからと云うのさ、面倒だからいい加減に挨拶あいさつをして置いたら先生すぐ九州へ立って行つた。それから二週間ほどして社へ出ると書記が野添さんの株が大変あが上りました。五十円株が六十五円になりました。合計三万二千五百円になりましたと云うのさ」

「そりゃ豪勢だ、実は僕も少し持とうと思つてたんだが」と四角が云うと

「ありや實際意外だった。あんなに、とんびようし拍子にあがろうとは思わなかった」と胡麻塩ごましおがしきりに胡麻塩頭かを搔く。

「もう少し踏み込んで沢山僕の名にして置けばよかった」と禿はげは  
三万二千五百円以外に残念がつている。

高柳君は恐る恐る三人の傍そばを通り抜けた。若夫婦に逢あつて挨拶  
して早く帰りたいと思つて、見廻わすと一番奥の方に二人は黒い  
フロックと五色の袖そでに取り巻かれて、なかなか寄りつけそうもな  
い。食卓はようやく人数が減つた。しかし残つている食品はほと  
んどない。

「近頃は出掛けるかね」と云う声がする。仙台平せんだいひらをずるずる地び  
たへ引きずつて白足袋しろたびに鼠緒ねずおの雪駄せったをかすかに出した三十恰好がっこうの  
男だ。

「昨日須崎すさきの種田家たねだけの別荘へ招待されて鴨獵かもりようをやった」と五分刈ごぶがりの浅黒いのが答えた。

「鴨にはまだ早いだろう」

「もういいね。十羽ばかり取ったがね。僕が十羽、大谷おおたにが七羽、

加瀬かせと山内やまのうちが八羽ずつ」

「じゃ君が一番か」

「いや、斎藤は十五羽だ」

「へえ」と仙台平は感心している。

同期の卒業生は多いなかに、たった五六人しか見えん。しかもあまり親しくないものばかりである。高柳君は挨拶だけして別段

話もしなかったが、今となつて見ると何だか恋しい心持ちがする。どこぞにおりはせぬかと見廻したが影も見えぬ。ことによると歸つたかも知れぬ。自分も歸ろう。

主客しゅかくは一である。主しゅを離れて客かくなく、客を離れて主はない。

吾々が主客の別を立てて物我ぶつがの境きようを判然はんぜんと分割ぶんかくするのは生存上の便宜べんぎである。形を離れて色なく、色を離れて形なき強しいて個別するの便宜、着想を離れて技巧なく技巧を離れて着想なきをしばらく両体となすの便宜と同様である。一たびこの差別を立りつしたる時吾人ごじんは一の迷路に入る。ただ生存は人生の目的なるが故ゆえに、生存に便宜なるこの迷路は入る事いよいよ深くして出ずる事いよいよ

かたきを感じず。独り生存の欲を一刻たりとも擺脫したるときにこの迷は破る事が出来る。高柳君はこの欲を刹那も除去し得ざる男である。したがって主客を方寸に一致せしむる事のできがたき男である。主は主、客は客としてどこまでも膠着するが故に、一たび優勢なる客に逢うとき、八方より無形の太刀を揮って、打ちのめさるるがとき心地がする。高柳君はこの園遊会において孤軍重囲のうちに陥つたのである。

蹣跚としてアーチを潜った高柳君はまた蹣跚としてアーチを出ざるを得ぬ。遠くから振り返って見ると青い杉の環の奥の方に天幕が小さく映って、幕のなかから、奇麗な着物がかたまつてあら

われて来た。あのなかに若い夫婦も交ってるのであろう。

夫婦の方では高柳をさがしている。

「時に高柳はどうしたろう。御前<sup>おまえ</sup>あれから逢<sup>あ</sup>ったかい」

「いいえ。あなたは」

「おれは逢わない」

「もう御帰りになったんでしょうか」

「そうさ、——しかし帰るなら、ちつとは帰る前に傍<sup>そば</sup>へ来て話で  
もしそんなものだ」

「なぜ皆さんのいらっしやる所へ出ていらっしやらないのでし  
ょう」

「損だね、ああ云う人は。あれで一人じゃやっぱり不愉快なんだ。不愉快なら出てくればいいのになおなお引き込んでしまう。気の毒な男だ」

「せっかく愉快にしてあげようと思って、御招きするのにな」

「今日は格別色がわるかったようだ」

「きつと御病氣ですよ」

「やっぱり一人坊ひとりぼちだから、色が悪いのだよ」

高柳君は往来をあるきながら、ぞつと悪寒おかんを催もよおした。

道也<sup>どうや</sup>先生長い顔を長くして煤竹<sup>すすだけ</sup>で囲<sup>こ</sup>った丸火桶<sup>まるひおけ</sup>を擁<sup>よう</sup>している。  
外<sup>こがらし</sup>を木枯<sup>こがらし</sup>が吹いて行く。

「あなた」と次の間<sup>ま</sup>から妻君が出てくる。紬<sup>つむぎ</sup>の羽織の襟<sup>えり</sup>が折れて  
いない。

「何だ」とこつちを向く。机の前におりながら、終日<sup>しゅうじつ</sup>木枯<sup>こがらし</sup>に吹<sup>ふ</sup>き  
曝<sup>さら</sup>されたかのごとくに見える。

「本は売れたのですか」

「まだ売れないよ」

「もう一カ月も立てば百や貳百の金は這<sup>はい</sup>入<sup>い</sup>る都合だとおっしゃつ  
たじゃありませんか」

「うん言った。言ったには相違ないが、売れない」

「困るじゃござんせんか」

「困るよ。御前おまえよりおれの方が困る。困るから今考えてるんだ」

「だって、あんなに骨を折って、三百枚も出来てるものを――」

「三百枚どころか四百三十五頁ある」

「それで、どうして売れないんでしょう」

「やっぱり不景気なんだろうよ」

「だろうよじゃ困りますわ。どうか出来ないでしょうか」

「南溟堂なんめいどうへ持って行った時には、有名な人の御序文があればと云

うから、それから足立あだちなら大学教授だから、よかろうと思って、

足立にたのんだのさ。本も借金と同じ事で保証人がないと駄目だぜ」

「借金は借りるんだから保証人もいるでしょうが——」と妻君頭のなかへ人指<sup>ひとさし</sup>ゆびを入れてぐいぐい搔<sup>か</sup>く。束髪<sup>そくはつ</sup>が揺れる。道也はその頭を見ている。

「近頃の本は借金同様だ。信用のないものは連帯責任でないと出版が出来ない」

「本当につまらないわね。あんなに夜遅くまでかかつて」

「そんな事は本屋の知らん事だ」

「本屋は知らないでしょうさ。しかしあなたは御存じでしょう」

「ハハハ当人は知ってるよ。御前も知ってるだろう」

「知ってるから云うのでさあね」

「言ってくれても信用がないんだから仕方がない」

「それでどうなさるの」

「だから足立の所へ持って行ったんだよ」

「足立さんが書いてやるとおっしゃって」

「うん、書くような事を云うから置いて来たら、またあとから書けないって断わって来た」

「なぜでしょう」

「なぜだか知らない。厭<sup>いや</sup>なのだろう」

「それであなただけのままにして御置きになるんですか」

「うん、書かんのを無理に頼む必要はないさ」

「でもそれじゃ、うちの方が困りますわ。この間御兄さんおあにいに判を押して借りて頂いた御金ももう期限が切れるんですから」

「おれもその方を埋めるつもりでいたんだが——売れないから仕方がない」

「馬鹿馬鹿しいのね。何のために骨を折ったんだか、分りやしない」

道也先生は火桶ひおけのなかの炭団たどんを火箸ひばしの先で突つつきながら「御前から見れば馬鹿馬鹿しいのさ」と云った。妻君はだまってしま

う。ひゅうひゅうと木枯<sup>こがらし</sup>が吹く。玄関の障子<sup>しょうじ</sup>の破れが紙鳶<sup>たこ</sup>のうなりのように鳴る。

「あなた、いつまでこうしていらっしゃるの」と細君<sup>じゆ</sup>は術<sup>じゆつ</sup>なげに聞いた。

「いつまでも考はない。食えればいつまでこうしていたっていいじゃないか」

「二言目<sup>ふたことめ</sup>には食えれば食えればとおっしゃるが、今こそ、どうかこうにかして行きますけれども、このぶんで押して行けば今に食べられなくなりますよ」

「そんなに心配するのかい」

細君はむっとした様子である。

「だって、あなたも、あんまり無考<sup>むかんがえ</sup>じゃござんせんか。楽に暮せる教師の口はみんな断<sup>ことわ</sup>っておしまいなすって、そうして何でも筆で食うと頑固<sup>がんこ</sup>を御張りになるんですもの」

「その通りだよ。筆で食うつもりなんだよ。御前もそのつもりにするがいい」

「食べるものが食べられれば私だってそのつもりになりますわ。私も女房ですもの、あなたの御好きでおやりになる事をとやかく云うような差し出口はききやあしません」

「それじゃ、それでいいじゃないか」

「だって食べられないんですもの」

「たべられるよ」

「随分ね、あなたも。現に教師をしていた方が楽で、今の方がよっぽど苦しいじゃありませんか。あなたはやっぱり教師の方が御上手なんですよ。書く方は性しやうに合わないんですよ」

「よくそんな事がわかるな」

細君は俯向うつむいて、袂たもとから鼻紙を出してちいんと鼻をかんだ。

「私ばかりじゃ、ありませんわ。御兄おあにいさんだって、そうおっしやるじゃありませんか」

「御前は兄の云う事をそう信用しているのか」

「信用したっていいじゃありませんか、御兄さんですもの、そうして、あんなに立派にしていらっしゃるんですもの」

「そうか」と云ったなり道也先生は火鉢ひばちの灰を丁寧ていねいに掻かきならす。中から二寸釘くぎが灰だらけになって出る。道也先生は、曲まった真鍮しんちゆうの火箸ひばしで二寸釘をつまみながら、片手に障子をあけて、ほいと庭先へ抛ほうり出した。

庭には何にもない。芭蕉ばしやうがずたずたに切れて、茶色ながら立往生りやうせいをしている。地面は皮が剥むけて、蓆むしろを捲まきかけたように反そっくり返っている。道也先生は庭の面おもてを眺ながめながら

「だいぶ吹いてるな」と独語ひとりごとのように云った。

「もう一遍足立さんに願って御覧になったらどうでしょう」

「厭いやなものに頼んだって仕方がないさ」

「あなたは、それだから困るのね。どうせ、あんな、豪えらい方かたになれば、すぐ、おいそれと書いて下さる事はないでしょうから……」

「あんな豪い方って——足立がかい」

「そりゃ、あなたも豪いでしょうさ——しかし向むはともかくも大学校の先生ですから頭を下げたって損はないでしょう」

「そうか、それじゃおおせに従って、もう一返いつぱん頼んで見ようよ。

——時に何時かな。や、大変だ、ちよつと社まで行って、校正を

してこなければならぬ。袴はかまを出してくれ」

道也先生は例のごとく茶の千筋せんすじの嘉平治かへいじを木枯こがらしにぺらつかすべく一着して飄然ひょうぜんと出て行つた。居間の柱時計がぼんぼんと二時を打つ。

思ふ事積んでは崩くずす炭火すみびかなと云う句があるが、細君は恐らく知るまい。細君は道也先生の丸火桶まるひおけの前へ来て、火桶の中を、丸く搔きならしている。丸い火桶だから丸く搔きならす。角な火桶なら角に搔きならすだろう。女は与えられたものを正しいものと考えゑる。そのなかで差し当りのないように暮らすのを至善しぜんと心得ている。女は六角の火桶を与えられても、八角の火鉢を与えら

れても、六角にまた八角に灰を搔きならす。それより以上の見識は持たぬ。

立つてもおらぬ、坐つてもおらぬ、細君の腰は宙に浮いて、膝ひざ頭しらは火桶の縁ふちにつきつけられている。坐すわるには所を得ない、立つては考えられない。細君の姿勢は中途半把ちゆうとはんぱで、細君の心も中途半把である。

考えると嫁に来たのは間違っている。娘のうちの方が、いくら気楽で面白かったか知れぬ。人の女房はこんなものと、誰か教えてくれたら、来ぬ前によすはずであつた。親でさえ、あれほどに親切を尽してくれたのだから、二世にせの契ちぎりと掟おきてにさえ出ている夫

は、二重にも三重にも可愛がつてくれるだろう、また可愛がつて下さるよと受合われて、住み馴れた家いえを今日限りと出た。今日限りと出た家うちへ二度とは帰られない。帰ろうと思ってもおとっさんもお母つかさんも亡くなつてしまつた。可愛がられる目的あてははずれて、可愛がつてくれる人はもうこの世にいない。

細君は赤い炭たどん団の、灰の皮を剥むいて、火箸ひばしの先で突つつき始めた。炭火なら崩くずしても積む事が出来る。突つついた炭団は壊こわれたぎり、丸い元の姿には帰らぬ。細君はこの理を心得ているだろうか。しきりに突ついている。

今から考えて見ると嫁に來た時の覚悟が間違つてゐる。自分が

嫁に來たのは自分のために來たのである。夫のためと云う考はすこしも持たなかつた。吾<sup>わ</sup>が身が幸福になりたいばかりに祝言<sup>しゅうげん</sup>の盃<sup>さかずき</sup>もした。父、母もそのつもりで高砂<sup>たかさご</sup>を聴いていたに違ない。思う事はみんなはずれた。この頃の模様を父、母に話したら定めし道也はけしからぬと怒<sup>おこ</sup>るであらう。自分も腹の中では怒っている。

道也は夫の世話をするのが女房の役だと済ましているらしい。それはこつちで云いたい事である。女は弱いもの、年の足らぬものの、したがって夫の世話を受くべきものである。夫を世話する以上、夫から世話されるべきものである。だから夫に自分の云う通りになれと云う。夫はけっして聞き入れた事がない。家庭の生<sup>せい</sup>

涯<sup>がい</sup>はむしろ女房の生涯である。道也は夫の生涯と心得ているらしい。それだから治<sup>おさ</sup>まらない。世間の夫は皆道也のようなものかしらん。みんな道也のようだとすれば、この先結婚をする女はだんだん減るだろう。減らないところで見るとほかの旦那様は旦那様らしくしているに違<sup>ちが</sup>ない。広い世界に自分一人がこんな思<sup>おも</sup>いをしてるかど気がつくど生涯の不幸である。どうせ嫁に來たからには出<sup>で</sup>る訳には行かぬ。しかし連れ添<sup>つ</sup>う夫がこんなでは、臨終まで本當の妻と云う心持が起<sup>お</sup>らぬ。これはどうかせねばならぬ。どうにかして夫を自分の考<sup>かん</sup>え通りの夫にしないで生きている甲<sup>か</sup>斐<sup>い</sup>がない。——細君はこう思案しながら、火鉢をいじくっている。風

が枯芭蕉<sup>かればしやう</sup>を吹き倒すほど鳴る。

表に案内がある。寒そうな顔を玄関の障子から出すと、道也の兄が立っている。細君は「おや」と云った。

道也の兄は会社の役員である。その会社の社長は中野君のおやじである。長い二重廻しを玄関へ脱いで座敷へ這<sup>はい</sup>入ってくる。

「だいぶ吹きますね」と薄い更紗<sup>さらさ</sup>の上へ坐って抜け上がった額<sup>ひたい</sup>を逆<sup>さか</sup>に撫<sup>な</sup>でる。

「御寒いのによく」

「ええ、今日は社の方が早く引けたものだから……」

「今御帰り掛けですか」

「いえ、いったんうちへ帰ってね。それから出直して来ました。

どうも洋服だと坐ってるのが窮屈で……」

兄は糸織の小袖こそでに鉄御納戸てつおなんどの博多はかたの羽織を着ている。

「今日は——留守ですか」

「はあ、たった今しがた出ました。おっつけ帰りましょう。どうぞ御緩ごゆっくり」と例の火鉢を出す。

「もう御構おかまいなさるな。——どうもなかなか寒い」と手を翳かざす。

「だんだん押し詰りましてさぞ御忙おいそがしゅう、いらっしやいましょう」

「へ、ありがとう。毎年暮になると大頭痛、ハハハハ」と笑っ

た。世の中の人はおかしい時ばかり笑うものではない。

「でも御忙がしいのは結構で……」

「え、まあ、どうか、どうかやってるんです。——時に道也はやはり不相変あいかわらずですか」

「ありがとう。この方はただ忙がしいばかりで……」

「結構でないかね。ハハハハ。どうも困った男ですねえ、御政おまささ

ん。あれほど訳わけがわからないとまでは思わなかったが」

「どうも御心配ばかり懸かけまして、私もいろいろ申しますが、女の云う事だと思つてちつとも取り上げませんので、まことに困り切ります」

「そうでしょう、私の云う事だつて聞かないんだから。——わたしも傍そばにいるとつい気になるから、ついとやかかく云いたくなつてね」

「ごもつともでございますとも。みんな当人のためにおっしゃつて下さる事ですから……」

「田舎いなかにいりや、それまでですが、こっちにこうしていると、当人の氣にいつても、いらなくつても、やっぱり兄の義務でね。つい云いたくなるんです。——するとちつとも寄りつかない。全く変人だね。おとなしくして教師をしていりやそれまでの事を、どこへ行っても衝突して……」

「あれが全く心配で、私もあのためには、どんなに苦勞したか分りません」

「そうでしょうとも。わたしも、そりやよく御察し申しているんです」

「ありがとうございます。いろいろ御厄介ごやっかいにばかりなりまして」

「東京へ来てからでも、こんなくだらん事をしないでも、どうにでも成るんでさあ。それをせっかく云ってやると、まるで取り合わない。取り合わないでもいいから、自分だけ立派にやって行けばいい」

「それを私も申すのでござんすけれども」

「いざとなると、やっぱりどうかしてくれと云うんでしよう」

「まことに御気の毒さまで……」

「いえ、あなたに何も云うつもりはない。当人がさ。まるで無鉄砲ですからね。大学を卒業して七八年にもなつて筆耕ひっこうの真似まねをしているものが、どこの国にいるものですか。あれの友達の足立なんて人は大学の先生になつて立派にしているじゃありませんか」

「自分だけはあれでなかなかえらいつもりでおりますから」

「ハハハえらいつもりだつて。いくら一人でえらがったつて、人が相手にしなくっちゃしようがない」

「近頃は少しどうかしているんじゃないかと思ひます」

「何とも云えませんか。——何でもしきりに金持やなにかを攻撃するそうじゃありませんか。馬鹿ですねえ。そんな事をしたってどこが面白い。一文にやならず、人からは擯斥ひんせきされる。つまり自分の錆さびになるばかりでさあ」

「少しは人の云う事でも聞いてくれるといいんですけれども」

「しまいには人にまで迷惑をかける。——実はね、きよう社でもって赤面しちまったんですがね。課長が私わたしを呼んで聞けば君の弟だそうだが、あの白井道也とか云う男は無暗むやみに不穏な言論をして富豪などを攻撃する。よくない事だ。ちっと君から注意したらよかろうって、さんざん叱られたんです」

「まあどうも。どうしてそんな事が知れたんでしよう」

「そりゃ、会社なんてものは、それぞれ探偵が届きますからね」

「へえ」

「なに道也なんぞが、何をかいたって、あんな地位のないものに世間が取り合う気遣きづかいはないが、課長からそう云われて見ると、放ほうって置けませんからね」

「ごもつともで」

「それで実は今日は相談に来たんですがね」

「生憎あいにく出まして」

「なに当人はいない方がかえっていい。あなたと相談さえすれば

いい。――で、わたしも今途中でだんだん考えて来たんだが、どうしたものでしょう」

「あなたから、とくと異見いけんでもしていただいて、また教師にでも奉職したら、どんなものでございましょう」

「そうなればいいですとも。あなたも仕合せしあわせだし、わたしも安心だ。――しかし異見いけんでおいそれと、云う通りになる男じゃありませんよ」

「そうでござんすね。あの様子じゃ、とても駄目だめでございましょうか」

「わたしの鑑定じゃ、とうてい駄目だ。――それでここに一つの

策があるんだが、どうでしょう当人の方から雑誌や新聞をやめて、教師になりたいと云う気を起させるようにするのは」

「そうなれば私は実にありがたいのですが、どうしたら、そう旨うまい具合に参りましょう」

「あのこの間中あいだじゅう当人がしきりに書いていた本はどうなりました」

「まだそのままになっております」

「まだ売れないですか」

「売れるどころじゃございません。どの本屋もみんな断わります  
そうで」

「そう。それが売れなけりやかえって結構だ」

「え？」

「売れない方がいいんですよ。——で、せんだってわたしが周旋した百円の期限はもうじきでしょう」

「たしかこの月の十五日だと思います」

「今日が十一日だから。十二、十三、十四、十五、ともう四日よっかです  
ね」

「ええ」

「あの方を手厳てきびしく催促させるのです。——実はあなただから、  
今打ち明けて御話するが、あれは、わたしが印を押している体たい  
にはなっているが本当はわたしが融通したのです。——そうしな

いと当人が安心していけないから。——それであの方を今云う通り責める——何かほかに工面くめんの出来る所がありますか」

「いいえ、ちつともございません」

「じゃ大丈夫、その方でだんだん責めて行く。——いえ、わたしは黙って見ている。証文の上の貸手が催促に来るのです。あなたも済すましていなくっちゃいけません。——何を云つても冷淡に済すましていなくっちゃいけません。けっしてこちらから、一言も云ひとことわないのです。——それで当人いくら頑固がんこだつて苦しいから、また、わたしの方へ頭を下げて来る。いえ来なけりやならないです。その、頭を下げて来た時に、取おさつて抑えるのです。いいです

か。そうたよつて来るなら、おれの云う事を聞くがいい。聞かなければおれは構わん。と云いやあ、向<sup>むこつ</sup>でも否<sup>いや</sup>とは云われんです。そこでわたしが、御政<sup>おまさ</sup>さんだつて、あんなに苦勞してやってゐる。雑誌なんかで法螺<sup>ほら</sup>ばかり吹き立てていたつて始まらない、これから性根<sup>しやうね</sup>を入れかえて、もつと着実な世間に害のないような職業をやれ、教師になる気なら心当りを奔走<sup>ほんそう</sup>してやろう、と持ち懸<sup>も</sup>けるのですね。——そうすればきつと我々の思わく通りになると思うが、どうでしょう」

「そうなれば私はどんなに安心が出来るか知れません」  
「やって見ましようか」

「何分宜しく願います」  
なにぶんよろ

「じゃ、それはきまったと。そこでもう一つあるんですがね。今日社の帰りがけに、神田を通ったら清輝館せいきかんの前に、大きな広告があつて、わたしは吃驚びっくりさせられましたよ」

「何の広告でござんす」

「演説の広告なんです。——演説の広告がいいが道也が演説をやるんですぜ」

「へえ、ちつとも存じませんでした」

「それで題が大きいから面白い、現代の青年に告ぐと云うんです。まあ何の事やら、あんなものの云う事を聞きにくる青年もな

さそうじゃありませんか。しかし剣呑<sup>けんのん</sup>ですよ。やけになって何を云うか分らないから。わたしも課長から忠告された矢先だから、すぐ社へ電話をかけて置いたから、まあ好<sup>い</sup>いですが、何なら、やらせたくないものですね」

「何の演説をやるつもりでござんしょう。そんな事をやるとまた人<sup>ひと</sup>様に御迷惑<sup>ごまぎわ</sup>がかかりましようね」

「どうせまた過激な事でも云うのですよ。無事に済めばいいが、つまらない事を云おうものなら取って返しがつかないからね。――どうしてもやめさせなくっちゃ、いけないね」  
「どうしたらやめるでござんしょう」

「これもよせつたって、頑固<sup>がんこ</sup>だから、よす氣遣<sup>きづかい</sup>はない。やつぱり欺<sup>だま</sup>すより仕方がないでしょう」

「どうして欺<sup>だま</sup>したらいいでしょう」

「そうさ。あした時刻にわたしが急用で逢<sup>あ</sup>いたいからって使をよこして見ましょうか」

「そうでござんすね。それで、あなたの方へ参るようだと宜<sup>よろ</sup>しゅうございますが……」

「聞かないかも知れませぬ。聞かなければそれまでさ」

初冬<sup>はつふゆ</sup>の日はもう暗くなりかけた。道也先生は風のなかを帰ってくる。

今日もまた風が吹く。汁氣しるけのあるものをことごとく乾鮭からさけにするつもりで吹く。

「御兄おあにいさんの所から御使です」と細君が封書を出す。道也は坐つたまま、体たいをそらして受け取った。

「待ってるかい」

「ええ」

道也は封を切つて手紙を読み下す。やがて、終りから巻き返して、再び状袋のなかへ収めた。何にも云わない。

「何か急用でもござんすか」

道也は「うん」と云いながら、墨を磨<sup>す</sup>って、何かさらさらと返事を認<sup>したた</sup>めている。

「何の御用ですか」

「ええ？　ちよつと待った。書いてしまうから」

返事はわずか五六行である。宛名<sup>あてな</sup>をかいて、「これを」と出す。細君は下女を呼んで渡してやる。自分は動かない。

「何の御用なんですか」

「何の用かわからない。ただ、用があるから、すぐ来てくれとかいてある」

「いらっしやるでしょう」

「おれは行かない。なんならお前行って見てくれ」

「私が？ 私は駄目ですわ」

「なぜ」

「だって女ですもの」

「女でも行かないよりいいだろう」

「だって。あなたに來いと書いてあるんでしょ」

「おれは行かないもの」

「どうして？」

「これから出掛けなくっちゃならん」

「雑誌の方なら、一日ぐらい御休みになってもいいでしょう」

「編輯へんしゅうならいいが、今日は演説をやらなくっちゃならん」

「演説を？　あなたがですか？」

「そうよ、おれがやるのさ。そんなに驚ろく事はなかるう」

「こんなに風が吹くのに、よしになさればいいのに」

「ハハハ風が吹いてやめるような演説なら始めからやりやしな  
い」

「ですけども滅多めったな事はなさらない方がよござんすよ」

「滅多な事とは。何がさ」

「いいえね。あんまり演説なんかなさらない方が、あなたの得とくだ

と云うんです」

「なに得な事があるものか」

「あとが困るかも知れないと申すのです」

「妙な事を云うね御前は。——演説をしちやいけないと誰か云ったのかね」

「誰がそんな事を云うものですか。——云いやしません、御兄おあにいさんからこうやって、急用だって、御使が来ているんですから行つて上げなくつては義理がわるいじゃありませんか」

「それじゃ演説をやめなくっちゃならない」

「急に差支さしつかえが出来たつて断わつたらいいでしょう」

「今さらそんな不義理が出来るものか」

「では御兄さんの方へは不義理をなすつても、いいとおっしゃるんですか」

「いいとは云わない。しかし演説会の方は前からの約束で——それに今日の演説はただの演説ではない。人を救うための演説だよ」

「人を救うつて、誰を救うのです」

「社のもので、この間の電車事件を煽動せんどうしたと云う嫌疑けんぎで引つ張られたものがある。——ところがその家族が非常な惨状おちいに陥おちいつて見るに忍びないから、演説会をしてその収入をそちらへ廻してや

る計画なんだよ」

「そんな人の家族を救うのは結構な事に相違ないでしょうが、社会主義だなんて間違えられるとあとが困りますから……」

「間違えたって構わないさ。国家主義も社会主義もあるものか、ただ正しい道がいいのさ」

「だって、もしあなたが、その人のようになったとして御覧なさい。私はやっぱり、その人の奥さん同様な、ひどい目に逢わなければならぬでしょう。人を御救いなさるのも結構ですが、ちつとは私の事も考えて、やって下さらなくっちゃ、あんまりですわ」

道也先生はしばらく沈吟<sup>ちんぎん</sup>していたが、やがて、机の前を立ちながら「そんな事はないよ。そんな馬鹿な事はないよ。徳川政府の時代じゃあるまいし」と云った。

例の袴<sup>はかま</sup>を突っかけると支度<sup>したく</sup>は一分たたぬうちに出来上った。玄関へ出る。外はいまだに強く吹いている。道也先生の姿は風の中に消えた。

清輝館<sup>せいきかん</sup>の演説会はこの風の中に開かれる。

講演者は四名、聴衆は三百名足らずである。書生が多い。その中に文学士高柳周作がいる。彼はこの風の中を襟巻<sup>えりまき</sup>に顔を包んで咳<sup>せき</sup>をしながらやって来た。十銭の入場料を払って、二階に上<sup>あ</sup>った

時は、広い会場はまばらに席をあましてむしろ寂寥せきばくの感があった。彼は南側のなるべく暖かそうな所に席をとった。演説はすでに始まっている。

「……文士保護は独立しがたき文士の言う事である。保護とは貴族的時代に云うべき言葉で、個人平等の世にこれを云々うんぬんするのは恥辱の極きよくである。退いて保護を受くるより進んで自己に適當なる租税を天下から払わしむべきである」と云ったと思ったら、引き込んだ。聴衆は喝采かつさいする。隣りに薩摩さつま絣の羽織を着た書生がいて話している。

「今のが、黒田東陽くろだとうようか」

「うん」

「妙な顔だな。もっと話せる顔かと思った」

「保護を受けたら、もう少し顔らしくなるだろう」

高柳君は二人を見た。二人も高柳君を見た。

「おい」

「何だ」

「いやに睨<sup>にら</sup>めるじゃねえか」

「おっかねえ」

「こんだ誰の番だ。——見ろ見ろ出て来た」

「いやに、ひよろ長いな。この風にどうして出て来たろう」

ひよろながい道也先生は綿服めんぷくのまま壇上にあらわれた。かれはこの風の中を金釘かなくぎのごとく直立して来たのである。から風に吹き曝さらされたる彼は、からからの古瓢箪ふるびょうたんのごとくに見える。聴衆は一度に手をたたく。手をたたくのは必ずしも喝采の意と解すべからざる場合がある。独り高柳君のみは肅然しゆくぜんとして襟えりを正した。

「自己は過去と未来の連鎖れんさである」

道也先生の冒頭は突如として来た。聴衆はちよつと不意撃ふいうちを食った。こんな演説の始め方はない。

「過去を未来に送り込むものを旧派と云い、未来を過去より救うものを新派と云うのであります」

聴衆はいよいよ惑<sup>まど</sup>った。三百の聴衆のうちには、道也先生をひやかす目的をもつて入場しているものがある。彼らに一寸<sup>すん</sup>の隙<sup>すき</sup>でも与えれば道也先生は壇上<sup>ちやうじやう</sup>に嘲殺<sup>ちやうそく</sup>されねばならぬ。角力<sup>すもう</sup>は呼吸<sup>こきゅう</sup>である。呼吸を計らんでひやかせばかえって自分が放<sup>ほう</sup>り出されるばかりである。彼らは蛇のごとく鎌首<sup>かまくび</sup>を持ち上げて待構えている。道也先生の眼中には道の一字がある。

「自己のうちに過去なしと云うものは、われに父<sup>ふ</sup>母<sup>ぼ</sup>なしと云うがごとく、自己のうちに未来なしと云うものは、われに子を生む能力なしというと一般である。わが立脚地はここにおいて明瞭<sup>めいりやう</sup>である。われは父<sup>ふ</sup>母<sup>ぼ</sup>のために存在するか、われは子のために存在する

か、あるいはわれそのものを樹立せんがために存在するか、吾人<sup>ごじん</sup>生存の意義はこの三者の一を離る事が出来なのである」

聴衆は依然として、だまっている。あるいは煙<sup>けむ</sup>に捲<sup>ま</sup>かれたのかも知れない。高柳君はなるほど聴いている。

「文芸復興は大なる意味<sup>だい</sup>において父母のために存在したる大時期である。十八世紀末のゴシック復活もまた大なる意味において父母のために存在したる小時期である。同時にスコット一派の浪漫<sup>ろうま</sup>派を生まんがために存在した時期である。すなわち子孫のために存在したる時期である。自己を樹立せんがために存在したる時期の好例はエリザベス朝の文学である。個人について云えばイブセ

ンである。メレジスである。ニイチエである。ブラウニングである。耶蘇教徒は基督ヤソキョウト キリストのために存在している。基督は古えいにしの人である。だから耶蘇教徒は父のために存在している。儒者じゆしゃは孔子こうしのために存在している。孔子も昔えいにしの人である。だから儒者は父のために生きている。……」

「もうわかった」と叫ぶものがある。

「なかなかわかりません」と道也先生が云う。聴衆はどつと笑った。

「あわせ ひつえもの 衿は単衣のために存在するですか、綿入のために存在するですか。または衿自身のために存在するですか」と云って、一応聴衆

を見廻した。笑うにはあまり、奇警である。慎しむにはあまり飄ひょうきんである。聴衆は迷うた。

「六むずかしい問題じゃ、わたしにもわからん」と済ました顔で云ってしまう。聴衆はまた笑った。

「それはわからんでも差支さしつかえない。しかし吾われわれ々は何のために存在しているか？ これは知らなくてはならん。明治は四十年立った。

四十年は短かくはない。明治の事業はこれで一段落を告げた：  
…」

「ノー、ノー」と云うものがある。

「どこかでノー、ノーと云う声がする。わたしはその人に賛成で

ある。そう云う人があるだろうと思つて待つていたのである」

聴衆はまた笑つた。

「いや本当に待つていたのである」

聴衆は三たび関ときを揚あげた。

「私わたしは四十年の歳月を短かくはないと申した。なるほど住んで見れば長い。しかし明治以外の人から見たらやはり長いだろうか。

望遠鏡の眼鏡めがねは一寸の直径である。しかし愛宕山あたごやまから見ると品川の沖がこの一寸のなかに這入はいつてしまう。明治の四十年を長いと云うものは明治のなかに齷齪あくせくしているものの云う事である。後世から見ればずっと縮まつてしまう。ずっと遠くから見ると一弾指いちだんし

の間に過ぎん。<sup>かん</sup>——一弾指の間に何が出来る」と道也はテーブルの上をとんと敲いた。<sup>たた</sup>聴衆はちよつと驚ろいた。

「政治家は一大事業をしたつもりでいる。学者も一大事業をしたつもりでいる。実業家も軍人もみんな一大事業をしたつもりでいる。したつもりでいるがそれは自分のつもりである。明治四十年の天地に首を突き込んでいるから、したつもりになるのである。

——一弾指の間に何が出来る」

今度は誰も笑わなかった。

「世の中の人<sup>さ</sup>は云うている。明治も四十年になる、まだ沙翁<sup>さおう</sup>が出ない、まだゲーテが出ない。四十年を長いと思えばこそ、そんな

愚痴<sup>ぐち</sup>が出る。一弾指の間に何が出る」

「もうでるぞ」と叫んだものがある。

「もうでるかも知れん。しかし今までに出ておらん事は確かである。——一言にして云えば」と句を切った。満場はしんとしている。

「明治四十年の日月<sup>じつげつ</sup>は、明治開化の初期である。さらに語<sup>ご</sup>を換<sup>か</sup>えてこれを説明すれば今日の吾人<sup>ごじん</sup>は過去を有<sup>も</sup>たぬ開化のうちに生息している。したがって吾人は過去を伝うべきために生れたのではない。——時は昼夜<sup>ちゆうや</sup>を舍<sup>す</sup>てず流れる。過去のない時代はない。——諸君誤解してはなりません。吾人は無論過去を有している。し

かしその過去は老耄ろうもうした過去か、幼稚な過去である。則のっとるに足るべき過去は何にもない。明治の四十年は先例のない四十年である」

聴衆のうちにそうかなあと云う顔をしている者がある。

「先例のない社会に生れたものほど自由なものはない。余は諸君がこの先例のない社会に生れたのを深く賀するものである」

「ひや、ひや」と云う声が所々しょしょに起る。

「そう早合点はやがてんに賛成されては困る。先例のない社会に生れたものは、自から先例を作らねばならぬ。束縛のない自由を享うけるものは、すでに自由のために束縛されている。この自由をいかに使い

こなすかは諸君の権利であると同時に大なる責任である。諸君。偉大なる理想を有せざる人の自由は墮落であります」

言い切った道也先生は、両手を机の上に置いて満場を見廻した。雷が落ちたような気合である。

「個人について論じてもわかる。過去を顧みる人は半白の老人である。少壮の人に顧みるべき過去はないはずである。前途に大なる希望を抱くものは過去を顧みて恋々たる必要がないのである。

——吾人が今日生きている時代は少壮の時代である。過去を顧みるほどに老い込んだ時代ではない。政治に伊藤侯や山県侯を顧みる時代ではない。実業に渋沢男や岩崎男を顧みる時代ではない。

……」

「だいきえん大気焰」と評したのは高柳君の隣りにいたさつまがすり薩摩緋である。高柳君はむっとした。

「文学に紅葉氏一葉氏を顧みる時代ではない。これらの人々は諸君の先例になるがために生きたのではない。諸君を生むために生きたのである。最前さいぜんの言葉を用いればこれらの人々は未来のために生きたのである。子のために存在したのである。しかして諸君は自己のために存在するのである。——およそ一時代にあつて初期の人は子のために生きる覚悟をせねばならぬ。中期の人は自己のために生きる決心が出来ねばならぬ。後期の人は父のために生

きるあきらめをつけなければならぬ。明治は四十年立つた。まず初期と見て差支さしかえなかるう。すると現代の青年たる諸君は大に自己を發展して中期をかたちづくらねばならぬ。後ろを顧うしみる必要なく、前を氣遣きづかう必要もなく、ただ自我を思おもひのままに發展し得る地位に立つ諸君は、人生の最大愉快を極きわむるものである」

満場は何となくどよめき渡った。

「なぜ初期のものが先例にならん？ 初期はもつとも不秩序の時代である。偶然の跋扈はつこする時代である。僥倖きやうしやうの勢いきおいを得る時代である。初期の時代において名を揚げあたるもの、家を起したるもの、財を積みたるもの、事業をなしたるものは必ずしも自己の力量に

由<sup>よ</sup>って成功したとは云われぬ。自己の力量によらずして成功するは士のもっとも恥辱とするところである。中期のものはこの点において遥<sup>はる</sup>かに初期の人々よりも幸福である。事を成すのが困難であるから幸福である。困難にもかかわらず僥倖が少ないから幸福である。困難にもかかわらず力量しだいで思うところへ行けるほどの余裕があり、発展の道があるから幸福である。後期に至るとかたまってしまふ。ただ前代を祖述<sup>そじゆつ</sup>するよりほかに身動きがとれぬ。身動きがとれなくなつて、人間が腐つた時、また波瀾<sup>はらん</sup>が起る。起らねば化石するよりほかにしようがない。化石するのがいやだから、自<sup>みづ</sup>から波瀾を起すのである。これを革命と云うのである。

る。

「以上は明治の天下にあつて諸君の地位を説明したのである。かかる愉快な地位に立つ諸君はこの愉快に相当する理想を養わねばならん」

道也先生はここにおいて一転語を下した。いってんご聴衆は別にひやかす気もなくなつたと見える。黙っている。

「理想は魂である。魂は形がないからわからない。ただ人の魂の、行為に発現するところを見てほうふつ髣髴するに過ぎん。惜しいかな現代の青年はこれを髣髴することが出来ん。これを過去に求めてもない、これを現代に求めてはなおさらない。諸君は家庭に在あつ

て父母を理想とする事が出来ますか」

あるものは不平な顔をした。しかしだまっている。

「学校に在って教師を理想とする事が出来ますか」

「ノー、ノー」

「社会に在って紳士を理想とする事が出来ますか」

「ノー、ノー」

「事実上諸君は理想をもっており。家に在っては父母を軽蔑けいべつし、学校に在っては教師を軽蔑し、社会に出では紳士を軽蔑している。これらを軽蔑し得るのは見識である。しかしこれらを軽蔑し得るためには自己により大なる理想だいがなくではならん。自己

に何らの理想なくして他を輕蔑するのは墮落である。現代の青年は滔々<sup>とうとう</sup>として日に墮落しつつある」

聴衆は少しく色めいた。「失敬な」とつぶやくものがある。道也先生は昂然<sup>こうぜん</sup>として壇下を睥睨<sup>へいげい</sup>している。

「英国風を鼓吹<sup>こすい</sup>して憚<sup>はば</sup>からぬものがある。気の毒な事である。己<sup>おの</sup>れに理想のないのを明かに暴露<sup>ばくろ</sup>している。日本の青年は滔々として墮落するにもかかわらず、いまだここまでは墮落せんと思う。すべての理想は自己の魂である。うちより出<sup>いで</sup>ねばならぬ。奴隸の頭脳に雄大な理想の宿りようがない。西洋の理想に圧倒せられて眼がくらむ日本人はある程度において皆奴隸である。奴隸をもつ

て甘んずるのみならず、争つて奴隷たんとするものに何らの理想が脳裏のうりに醗酵はっこうし得る道理があるう。

「諸君。理想は諸君の内部から湧わき出なければならぬ。諸君の学問見識が諸君の血となり肉となりついに諸君の魂となつた時に諸君の理想は出来上るのである。付焼刃つけやきばは何にもならない」

道也先生はひやかされるなら、ひやかして見ると云わぬばかりに片手の拳骨げんこつをテーブルの上に乗せて、立っている。汚ない黒木くろも綿めんの羽織はかまに、べんべらの袴はかまは最前さいぜんほどに目立たぬ。風の音がごうと鳴る。

「理想のあるものは歩くべき道を知っている。大なる理想のある

ものは大なる道があるく。迷子まいごとは違う。どうあつてもこの道があるかねばやまぬ。迷いたくても迷えんのである。魂がこちらこちらと教えるからである。

「諸君のうちには、どこまで歩くつもりだと聞くものがあるかも知れぬ。知れた事である。行ける所まで行くのが人生である。誰しも自分の寿命を知ってるものはない。自分に知れない寿命は他人にはなおさらわからない。医者在家業にする専門家でも人間の寿命を勘定する訳には行かぬ。自分が何歳まで生きるかは、生きたあとで始めて言うべき事である。八十歳まで生きたと云う事は八十歳まで生きた事実が証拠立ててくれねばならん。たとい八十

歳まで生きる自信があつて、その自信通りになる事が明瞭めいりょうであるにしても、現に生きたと云う事実がない以上は誰も信ずるものはない。したがつて言うべきものでない。理想の黙示もくじを受けて行くべき道を行くのもその通りである。自己がどれほどに自己の理想を現実にし得るかは自己自身にさえ計られん。過去がこうであるから、未来もこうであろうぞと臆測おくそくするのは、今まで生きていたから、これからも生きるだろうと速断するようなものである。一種の山である。成功を目的にして人生の街頭に立つものはすべて山師やましである」

高柳君の隣りにいた薩摩さつま紘がすりは妙な顔をした。

「社会は修羅場である。文明の社会は血を見ぬ修羅場である。四十年前の志士は生死の間に出入して維新の大業を成就した。諸君の冒すべき危険は彼らの危険より恐ろしいかも知れぬ。血を見ぬ修羅場は砲声剣光の修羅場よりも、より深刻に、より悲惨である。諸君は覚悟をせねばならぬ。勤王の志士以上の覚悟をせねばならぬ。斃るる覚悟をせねばならぬ。太平の天地だと安心して、拱手して成功を冀う輩は、行くべき道に躓いて非業に死したる失敗の児よりも、人間の価値は遥かに乏しいのである。

「諸君は道を行かんがために、道を遮ぎるものを追わねばならん。彼らと戦うときに始めて、わが生涯の内生命に、勤王の諸士

があえてしたる以上の煩悶はんもんと辛惨しんさんとを見出し得るのである。――  
今日は風が吹く。昨日きのうも風が吹いた。この頃の天候は不穩である。しかし胸裏きょうりの不穩はこんなものではない」

道也先生は、がたつく硝子窓ガラスまどを通して、往来の方を見た。折から一陣の風が、会釈えしやくなく往来の砂を捲まき上げて、屋やの棟むねに突き当あたって、虚空こくうを高く逃のがれて行つた。

「諸君。諸君のどれほどに剛健なるかは、わたしには分らん。諸君自身にも知れぬ。ただ天下後世が証拠だてるのみである。理想の大道たいどうを行き尽して、途上に斃せつるる刹那せつなに、わが過去を一瞥いちべつのうちに縮め得て始めて合点がてんが行くのである。諸君は諸君の事業その

ものに由<sup>よ</sup>つて伝えられねばならぬ。単に諸君の名に由<sup>よ</sup>つて伝えられんとするは輕薄である」

高柳君は何となくきまりがわるかった。道也の輝やく眼が自分の方に注<sup>そそ</sup>いでいるように思<sup>おも</sup>われる。

「理想は人によつて違<sup>ちが</sup>う。吾々は學問をする。學問をするものの理想は何であらう」

聴衆は默然<sup>もくねん</sup>として応<sup>こた</sup>ずるものがない。

「學問をするものの理想は何であらうとも——金でない事だけはたしかである」

五六カ所に笑聲が起る。道也先生の裕福<sup>ゆうふく</sup>ならぬ事はその服裝を

見たものの心から取り除<sup>の</sup>けられぬ事実である。道也先生は羽織のゆきを左右の手に引っ張りながら、まず徐<sup>おもむ</sup>ろにわが右の袖<sup>そで</sup>を見た。次に眼を転じてまた徐ろにわが左の袖を見た。黒木綿<sup>くろもめん</sup>の織目のなかに砂がいつぱいたまっている。

「随分きたない」と落ちつき払って云った。

笑声<sup>しょうせい</sup>が満場に起る。これはひやかしの笑声ではない。道也先生はひやかしの笑声を好意の笑声で揉<sup>も</sup>み潰<sup>つぶ</sup>したのである。

「せんだって学問を専門にする人が来て、私<sup>わたし</sup>も妻<sup>さい</sup>をもろうて子が出来た。これから金を溜<sup>た</sup>めねばならぬ。是非共子供に立派な教育をさせるだけは今のうちに貯蓄して置かねばならん。しかしどう

したら貯蓄が出来るでしうかと聞いた。

「どうしたら学問で金がとれるだろうと云う質問ほど馬鹿氣た事はない。学問は学者になるものである。金になるものではない。学問をして金をとる工夫くふうを考えるのは北極へ行つて虎狩をするよ  
うなものである」

満場はまたちよつとどよめいた。

「一般の世人は労力と金の關係について大なる誤謬だいいごびゆうを有している。彼らは相応の学問をすれば相応の金がとれる見込のあるものだと思う。そんな条理は成立する訳がない。学問は金に遠ざかる器械である。金がほしければ金を目的にする実業家とか商買人に

なるがいい。学者と町人とはまるで別途の人間であつて、学者が金を予期して学問をするのは、町人が学問を目的にして丁稚<sup>でっち</sup>に住み込むようなものである」

「そうかなあ」と突飛<sup>とっぴ</sup>な声を出す奴<sup>やつ</sup>がいる。聴衆はどつと笑つた。道也先生は平然として笑<sup>わらい</sup>のしずまるのを待っている。

「だから学問のことは学者に聞かなければならん。金が欲しければ町人の所へ持つて行くよりほかに致し方はない」

「金が欲しい」とまぜかえす奴が出る。誰だかわからない。道也先生は「欲しいでしょう」と云つたぎり進行する。

「学問すなわち物の理がわかると云う事と生活の自由すなわち金

があると云う事とは独立して関係のないのみならず、かえって反對のものである。学者であればこそ金がないのである。金を取るから学者にはなれないのである。学者は金がない代りに物の理がわかるので、町人は理窟りくつがわからないから、その代りに金を儲けもうる」

何か云うだろうと思って道也先生は二十秒ほど絶句して待っている。誰も何も云わない。

「それを心得んで金のある所には理窟もあると考えているのは愚ぐの極きよくである。しかも世間一般はそう誤認している。あの人は金持ちで世間が尊敬しているからして理窟もわかっているに違ない、

カルチュアーもあるにきまつていると——こう考える。ところがその実はカルチュアーを受ける暇がなければこそ金をもうける時間が出来たのである。自然は公平なもので一人の男に金ももうけさせる、同時にカルチュアーも授けると云うほど<sup>ひいき</sup>贖<sup>ひいき</sup>にはせんのである。この見やすき道理も<sup>べん</sup>弁<sup>べん</sup>ぜずして、かの金持ち共は<sup>うぬぼ</sup>己<sup>うぬぼ</sup>惚<sup>うぬぼ</sup>れて……」

「ひや、ひや」「焼くな」「しっ、しっ」だいぶ<sup>にぎ</sup>賑<sup>にぎ</sup>やかになる。

「自分達は社会の上流に位して一般から尊敬されているからして、世の中に自分ほど<sup>りくつ</sup>理窟<sup>りくつ</sup>に通じたものはない。学者だろうが、何だろうがおれに頭をさげねばならんと思うのは<sup>びんぜん</sup>憫然<sup>びんぜん</sup>のしだい

で、彼らがこんな考を起す事自身がカルチュアーのないと云う事  
実を証明している」

高柳君の眼は輝やいた。血が双頬そふぎょうに上のぼってくる。

「訳わけのわからぬ彼らが己惚うぬぼれはとうてい濟度さいどすべからざる事とする  
も、天下社会から、彼らの己惚をもっともだと是認するに至つて  
は愛想あいその尽きた不見識と云わねばならぬ。よく云う事だが、あの  
男もあのくらいな社会上の地位にあつて相応の財産も所有してい  
る事だから万更そんな訳のわからない事もなからう。豈計あにはからんや  
ある場合には、そんな社会上の地位を得て相当の財産を有してお  
ればこそ訳がわからないのである」

高柳君は胸の苦しみを忘れて、ひやひやと手を打った。隣の薩<sup>さつ</sup>摩<sup>ま</sup>絢<sup>が</sup>はえへんと嘲<sup>ちやうつろつてき</sup>弄<sup>せきばうい</sup>的な咳<sup>せき</sup>払<sup>はら</sup>をする。

「社会上の地位は何できまると云えば——いろいろある。第一力ルチュアーできまる場合もある。第二門閥<sup>もんぱつ</sup>できまる場合もある。

第三には芸能できまる場合もある。最後に金できまる場合もある。しかしてこれはもつとも多い。かようにいろいろの標準があるのを混同して、金で相場がきまつた男を学問で相場がきまつた男と相互に通用し得るように考えている。ほとんど盲目<sup>めくら</sup>同然である」

エヘン、エヘンと云う声が散らばって五六カ所に起る。高柳君

は口を結んで、鼻から呼吸いきをはずませている。

「金で相場のきまつた男は金以外に融通は利きかぬはずである。金はある意味において貴重かも知れぬ。彼らはこの貴重なものを擁ようしているから世の尊敬を受ける。よろしい。そこまでは誰も異存はない。しかし金以外の領分において彼らは幅はばを利かし得る人間ではない、金以外の標準をもつて社会上の地位を得る人の仲間入は出来ない。もしそれが出来ると云えば学者も金持ちの領分へ乗り込んで金銭本位の区域内で威張つても好い訳になる。彼らはそうはさせぬ。しかし自分だけは自分の領分内におとなしくしている事を忘れて他の領分までのさばり出ようとする。それが物のわ

からない、好い証拠である」

高柳君は腰を半分浮かして拍手をした。人間は真似まねが好すきである。高柳君に誘い出されて、ぱちぱちの音が四方に起る。冷笑党は勢いきおいの不可なるを知って黙した。

「金は労力の報酬である。だから労力を余計にすれば金は余計にとれる。ここまでは世間も公平である。（否いなこれすらも不公平な事がある。相場師などは労力なしに金を攫つかんでいる）しかし一歩進めて考えて見るが好いい。高等な労力に高等な報酬が伴うであるうか——諸君どう思います——返事がなければ説明しなければならん。報酬なるものは眼前の利害にもっとも影響の多い事情だけ

できめられるのである。だから今の世でも教師の報酬はこあきんど小商人の報酬よりも少ないのである。眼前以上の遠い所高い所に労力を費やすものは、いかに将来のためになろうとも、国家のためになろうとも、人類のためになろうとも報酬はいよいよ減ずるのである。だによって労力の高下こうげでは報酬の多寡たかはきまらない。金銭の分配は支配されておらん。したがって金のあるものが高尚な労力をしたとは限らない。換言すれば金があるから人間が高尚だとは云えない。金を目安めやすにして人物の価値をきめる訳には行かない」

滔々とうとうとして述べて来た道也はちよつとここで切つて、満場の形勢を觀望した。活版に押した演説は生命がない。道也は相手しだ

いで、どうとも変わるつもりである。満場は思ったより静かである。

「それを金があるからと云うてむやみにえらがるのは間違っている。学者と喧嘩けんかする資格があると思ってるのも間違っている。気品のある人々に頭を下げさせるつもりでいるのも間違っている。

——少しは考えても見るがいい。いくら金があっても病氣の時は医者に降参しなければなるまい。金貨を煎せんじて飲む訳には行かない……」

あまり熱心な滑稽こっけいなので、思わず噴き出したものが三四人ある。道也先生は気がついた。

「そうでしょう——金貨を煎<sup>せん</sup>じたって下痢<sup>げり</sup>はとまらないでしょう。——だから御医者に頭を下げる。その代り御医者は——金に頭を下げる」

道也先生はにやにやと笑った。聴衆もおとなしく笑う。

「それで好<sup>い</sup>いのです。金に頭を下げて結構です——しかし金持はいけない。医者に頭を下げる事を知ってながら、趣味とか、嗜好<sup>しこう</sup>とか、氣品とか人品とか云う事に関して、学問のある、高尚な理窟<sup>りく</sup>のわかった人に頭を下げることを知らん。のみならずかえって金の力で、それらの頭をさげさせようとする。——盲目蛇<sup>めくらへび</sup>に怖<sup>お</sup>じずとはよく云ったものですねえ」

と急に会話調になったのは曲折があつた。

「学問のある人、訳のわかった人は金持が金の力で世間に利益を与うると同様の意味において、学問をもつて、わけの分つたところをもつて社会に幸福を与えるのである。だからして立場こそ違え、彼らはとうてい冒<sup>おか</sup>し得べからざる地位に確たる尻<sup>しり</sup>を据<sup>す</sup>えているのである。

「学者がもし金銭問題にかかれば、自己の本領を棄<sup>す</sup>てて他の縄張<sup>なわばり</sup>内に這<sup>うち</sup>入<sup>はい</sup>るのだから、金持ちに頭を下げるが順当であらう。同時に金以上の趣味とか文学とか人生とか社会とか云う問題に関して金持ちの方が学者に恐れ入って来なければならん。今、学者と

金持の間に葛藤かつとうが起るとする。単に金銭問題ならば学者は初手しよてから無能力である。しかしそれが人生問題であり、道德問題であり、社会問題である以上は彼ら金持は最初から口を開く権能けんのうのないものと覚悟をして絶対的に学者の前に服従しなければならん。岩崎は別荘を立て連つねる事において天下の学者を圧倒しているかも知れんが、社会、人生の問題に関しては小児と一般である。十万坪の別荘を市の東西南北に建てたから天下の学者を凹へこましたと思うのは凌雲閣りょううんかくを作ったから仙人せんじんが恐れ入ったろうと考えるよ  
うなものだ……」

聴衆は道也いさおの勢いきおいと最後の一句の奇警きけいなのに気を奪われて黙って

いる。独り高柳君がたまらなかつたと見えて大きな声を出して喝采した。

「商人が金を儲けるために金を使うのは専門上の事で誰も容喙が出来ぬ。しかし商買上に使わないで人事上にその力を利用するときは、訳のわかった人に聞かねばならぬ。そうしなければ社会の悪を自ら醸造して平気でいる事がある。今の金持の金のある一部分は常にこの目的に向って使用されている。それと云うのも彼ら自身が金の主であるだけで、他の徳、芸の主でないからである。学者を尊敬する事を知らんからである。いくら教えても人の云う事が理解出来んからである。災は必ず己れに帰る。彼らは是非共

学者文学者の云う事に耳を傾けねばならぬ時期がくる。耳を傾けねば社会上の地位が保てぬ時期がくる」

聴衆は一度にどつと関を揚げた。高柳君は肺病にもかかわらずもつとも大なる関を揚げた。生れてから始めてこんな痛快な感じを得た。襟巻に半分顔を包んでから風のなかをここまで来た甲斐はあると思う。

道也先生は予言者のごとく凜として壇上に立っている。吹きまくる木枯は屋を撼かして去る。

「ちつとは、好いい方かね」と枕元へ坐る。

六畳の座敷は、畳がほけて、とんと打ったら夜でも埃ほこりが見え  
そうだ。宮島産の丸盆に薬瓶くすりびんと験温器けんおんきがいつしよに乗っている。

高柳君は演説を聞いて帰ってから、とうとう喀血かっけつしてしまった。

「今日はだいたい」と床の上に起き返って後うしろから搔卷かいまきを背せの半  
分までかけている。

中野君は太島紬おおしまつむぎの袂たもとから魯西亞ロシア皮がわの巻蓐入まきたばこいれを出しかけたが、

「うん、煙草たばこを飲んじゃ、わるかったね」とまた袂のなかへ落  
す。

「なに構わない。どうせ煙草ぐらいで癒なおりやしないんだから」と

憮然<sup>ぶぜん</sup>としている。

「そうでないよ。初<sup>はじめ</sup>が肝心<sup>かんじん</sup>だ。今のうち養生しないといけない。昨日<sup>きのう</sup>医者へ行つて聞いて見たが、なに心配するほどの事もない。

来たかい医者は」

「今朝<sup>あつた</sup>来た。暖かにしていると云った」

「うん。暖かにしているがいい。この室<sup>へや</sup>は少し寒いねえ」と中野君は侘<sup>わび</sup>し氣<sup>げ</sup>に四方<sup>あたり</sup>を見廻した。

「あの障子<sup>しょうじ</sup>なんか、宿の下女にでも張らしたらよからう。風が這<sup>は</sup>入<sup>い</sup>って寒いだろう」

「障子だけ張ったって……」

「転地でもしたらどうだい」

「医者もそう云うんだが」

「それじゃ、行くがいい。今朝そう云ったのかね」

「うん」

「それから君は何と答えた」

「何と答えるったって、別に答えようもないから……」

「行けばいいじゃないか」

「行けばいいだろうが、ただはいかれない」

高柳君は元氣のない顔をして、自分の膝頭<sup>ひざがしら</sup>へ眼を落した。瓦斯<sup>ガス</sup>

双子<sup>たご</sup>の端<sup>はじ</sup>から鼠色<sup>ねずみいろ</sup>のフラネルが二寸ばかり食<sup>は</sup>み出<sup>だ</sup>している。寸法

も取らず別々に仕立てたものだろう。

「それは心配する事はない。僕がどうかする」

高柳君は潤うるおいのない眼を膝から移して、中野君の幸福な顔を見た。この顔しだいで返答はきまる。

「僕がどうかするよ。何なんだって、そんな眼をして見るんだ」

高柳君は自分の心が自分の両眼りょうがんから、外を覗のぞいていたのだなと急に気がついた。

「君に金を借りるのか」

「借りないでもいいさ……」

「貰うのか」

「どうでもいいさ。そんな事を気に掛ける必要はない」

「借りるのはいやだ」

「じゃ借りなくってもいいさ」

「しかし貰う訳には行かない」

「六<sup>む</sup>ずかしい男だね。何だってそんなにやかましくいうのだい。

学校にいる時分は、よく君の方から金を借せの、西洋料理を奢<sup>おご</sup>れ  
のとせびったじゃないか」

「学校にいた時分は病氣なんぞありやしなかったよ」

「平生<sup>ふだん</sup>ですら、そうなら病氣の時はなおさらだ。病氣の時に友達

が世話をするのは、誰から云ったっておかしくはないはずだ」

「そりゃ世話をする方から云えばそうだろう」

「じゃ君は何か僕に対して不平な事でもあるのかい」

「不平はないさありがたいと思ってるくらいだ」

「それじゃ心快こころよく僕の云う事を聞いてくれてもよからう。自分で

不愉快の眼鏡を掛けて世の中を見て、見られる僕らまでを不愉快にする必要はないじゃないか」

高柳君はしばらく返事をしない。なるほど自分は世の中を不愉快にするために生きてるのかも知れない。どこへ出ても好かれた事がない。どうせ死ぬのだから、なまじい人の情なさけを恩に着るのはかえって心苦しい。世の中を不愉快にするくらいな人間ならば、

中野一人を愉快にしてやったって五十歩百歩だ。世の中を不愉快にするくらいな人間なら、また一日も早く死ぬ方がましである。

「君の親切を無<sup>む</sup>にしては気の毒だが僕は転地なんか、したくないんだから勘弁<sup>かんべん</sup>してくれ」

「またそんなわからずやを云う。こう云う病気は初期が大切だよ。時期を失<sup>しっ</sup>すると取り返しがつかないぜ」

「もう、とうに取り返しがつかないんだ」と山の上から飛び下りたような事を云う。

「それが病気だよ。病気のせいでそう悲観するんだ」

「悲観するって希望のないものは悲観するのは当たり前だ。君は必

要がないから悲観しないのだ」

「困った男だなあ」としばらく匙さじを投げて、すいと起たって障子をあける。例の梧桐ごとうが坊主ぼうずの枝を真直まつすぐに空に向って曝さらしている。

「淋さびしい庭だなあ。桐きりが裸で立っている」

「この間まで葉が着いてたんだが、早いものだ。裸の桐に月がさすのを見た事があるかい。凄すごい景色けしきだ」

「そうだろう。——しかし寒いのに夜る起きるのはよくないぜ。

僕は冬の月は嫌きらいだ。月は夏がいい。夏のいい月夜に屋根舟に乗って、隅田川から綾瀬あやせの方へ漕こがして行って銀扇ぎんせんを水に流して遊んだら面白いだろう」

「気楽云ってらあ。銀扇を流すたどうするんだい」

「銀泥ぎんでいを置いた扇を何本も舟へ乗せて、月に向って投げるのさ。

きらきらして奇麗きれいだろう」

「君の發明かい」

「昔むかしの通人つうじんはそんな風流をして遊んだそうだ」

「贅沢ぜいたくな奴らだ」

「君の机の上に原稿があるね。やっぱり地理学教授法か」

「地理学教授法はやめたさ。病氣になって、あんなつまらんものがやれるものか」

「じゃ何だい」

「久しく書きかけて、それなりにして置いたものだ」

「あの小説か。君の一代の傑作か。いよいよ完成するつもりなのかい」

「病気になる、なおやりたくなる。今まではひまになつたらと思つていたが、もうそれまで待つちやいられない。死ぬ前に是非書き上げないと気が済まない」

「死ぬ前は過激な言葉だ。書くのは賛成だが、あまり凝<sup>こ</sup>るとかえつて身体<sup>からだ</sup>がわるくなる」

「わるくなつても書けりゃいいが、書けないから残念でたまらない。昨夜<sup>ゆうべ</sup>は続きを三十枚かいた夢を見た」

「よっぽど書きたいのだと見えるね」

「書きたいさ。これでも書かなくっちゃ何のために生れて来たのかわからない。それが書けないときまつた以上は穀潰しごくつぶ同然ださ。だから君の厄介やっかいにまでなって、転地するがものはないんだ」

「それで転地するのがいやなのか」

「まあ、そうさ」

「そうか、それじゃ分った。うん、そう云うつもりなのか」と中野君はしばらく考えていたが、やがて

「それじゃ、君は無意味に人の世話になるのが厭いやなんだろうか、そこのところを有意味にしようじゃないか」と云う。

「どうするんだ」

「君の目下もっかの目的は、かねて腹案のある述作を完成しようと云うのだろう。だからそれを条件にして僕が転地の費用を担任しようじゃないか。豆子ずしでも鎌倉かまくらでも、熱海あたみでも君の好な所すきへ往いって、呑氣のんきに養生する。ただ人の金を使つて呑氣に養生するだけでは心が済まない。だから療養かたがた気が向いた時に続きをかくさ。そうして身体からだがよくなつて、作さくが出来上つたら歸つてくる。僕は費用を担任した代り君に一大傑作を世間へ出して貰う。どうだい。それなら僕の主意も立ち、君の望のぞみも叶かなう。一挙兩得じゃないか」

高柳君は膝頭<sup>ひざかしら</sup>を見詰めて考えていた。

「僕が君の所へ、僕の作を持って行けば、僕の君に対する責任は済む訳なんだね」

「そうさ。同時に君が天下に対する責任の一分<sup>いちぶ</sup>が済むようになるのさ」

「じゃ、金を貰おう。貰いつ放しに死んでしまいかも知れないが——いいや、まあ、死ぬまで書いて見よう——死ぬまで書いたら書けない事もなかるう」

「死ぬまでかいちゃ大変だ。暖かい相州<sup>そうしゅうへん</sup>辺へ行つて氣<sup>らく</sup>を楽しんで、時々一頁二頁ずつ書く——僕の条件に期限はないんだぜ、

君」

「うん、よしきつと書いて持つて行く。君の金を使って茫然ぼうぜんとしていちゃ済まない」

「そんな済むの済まないのと考えてちやいけない」

「うん、よし分った。ともかくも転地しよう。明日あしたから行こう」

「だいぶ早いな。早い方がいいだろう。いくら早くつても構わない。用意はちゃんと出来てるんだから」と懷中ななこから七子の三折みつおれの紙入を出して、中から一束の紙幣しへいをつかみ出す。

「ここに百円ある。あとはまた送る。これだけあつたら当分はいだらう」

「そんなにいるものか」

「なにこれだけ持って行くがいい。実はこれは妻さいの発議ほつぎだよ。妻の好意だと思って持って行ってくれたまえ」

「それじゃ、百円だけ持って行くか」

「持って行くがいいとも。せっかく包んで来たんだから」

「じゃ、置いて行ってくれたまえ」

「そこでと、じゃ明日あす立つね。場所か？ 場所はどこでもいい

さ。君の気の向いた所がよからう。向むこうへ着いてからちよつと手紙を出してくれればいいよ。——護送するほどの大病人でもないから僕は停車場へも行かないよ。——ほかに用はなかったかな。——

―なに少し急ぐんだ。実は今日は妻を連れて親類へ行く約束があるんで、待ってるから、僕は失敬しなくっちゃならない」

「そうか、もう帰るか。それじゃ奥さんによろしく」

中野君は欣然きんぜんとして帰って行く。高柳君は立って、着物を着換ええた。

百円の金は聞いた事がある。が見たのはこれが始めてである。使うのはもちろんの事始めてである。かねてから自分を代表するほどの作物さくぶつを何か書いて見たいと思っていた。生活難あいまの合間合間に一頁二頁と筆を執とった事はあるが、興きようが催もよおすと、すぐやめねばならぬほど、饑うえは寒さむは容赦なくわれを追ってくる。この容子ようすでは

当分仕事らしい仕事は出来そうもない。ただ地理学教授法を訳して露命を繋いでいるようでは馬車馬が秣を食って終日馳けあるくと変りはなさそうだ。おれにはおれがある。このおれを出さないでぶらぶらと死んでしまうのはもったいない。のみならず親の手前世間の手前面目ない。人から土偶のようにうとまれるのも、このおれを出す機会がなくて、鈍根にさえ立派に出来る翻訳の下働きなどで日を暮らしているからである。どうしても無念だ。石に噛みついてもらう矢先に道也の演説を聞いて床についた。医者には大胆にも結核の初期だと云う。いよいよ結核なら、とても助からない。命のあるうちにとまた旧稿に向って見たが、絢る縄は遅

く、逃げる泥棒は早い。何一つ見やげも置かないで、消えて行くかと思うと、熱さえ余計に出る。これ一つ纏めれば死んでも言訳は立つ。立つ言訳を作るには手当もしなければならん。今の百円は他日の万金よりも貴い。

百円を懐にして室のなかを二度三度廻る。気分も爽かに胸も涼しい。たちまち思い切ったように帽を取って師走の市に飛び出した。黄昏の神楽坂を上ると、もう五時に近い。気の早い店では、はや瓦斯を点じている。

毘沙門の提灯は年内に張りかえぬつもりか、色が褪めて暗いなかで揺れている。門前の屋台で職人が手拭を半櫛にとって、しき

りに寿司<sup>すし</sup>を握っている。露店の三馬<sup>さんま</sup>は光るほどに色が寒い。黒足<sup>くろた</sup>袋<sup>び</sup>を往来へ並べて、頬被<sup>ほおかぶ</sup>りに懐手<sup>ふところ</sup>をしたのがある。あれでも足袋は売れるかしらん。今川焼は一銭に二つで婆さんの自製にかか  
る。六銭五厘の万年筆<sup>まんねんふで</sup>は安過ぎると思う。

世は様々だ、今ここを通っているおれは、翌<sup>あす</sup>の朝になると、もう五六十里先へ飛んで行く。とは寿司屋<sup>すしや</sup>の職人も今川焼の婆さんも夢にも知るまい。それから、この百円を使い切ると金の代りに金より貴いあるものを懐にしてまた東京へ帰って来る。とも誰も思うものはあるまい。世は様々である。

道也先生に逢<sup>あ</sup>って、実はこれこれだと云ったら先生はそうかと

微笑するだろう。あす立ちますと云ったらあるいは驚ろくだろう。一世一代の作を仕上げてかえるつもりだと云ったらさぞ喜ぶであろう。――空想は空想の子である。もっとも繁殖力に富むものを脳裏のうりに植えつけた高柳君は、病の身にある事を忘れて、いつの間にか先生の門口かどぐちに立った。

誰か来客のようであるが、せっかく来たのをとわざと遠慮を抜いて「頼む」と声をかけて見た。「どなた」と奥から云うのは先生自身である。

「私です。高柳……」

「はあ、御這入りおはい」と云ったなり、出てくる景色けしきもない。

高柳君は玄関から客間へ通る。推察の通り先客がいた。市樂の羽織に、くすんだ縞ものを着て、帯の紋博多だけがいちじるしく眼立つ。額の狭い頬骨の高い、鈍栗眼である。高柳君は先生に挨拶を済ました、あとで鈍栗に黙礼をした。

「どうしました。だいぶ遅く来ましたね。何か用でも……」

「いいえ、ちよつと——実は御暇乞に上がりました」

「御暇乞？ 田舎の中学へでも赴任するんですか」

間の襖をあけて、細君が茶を持って出る。高柳君と御辞儀の交換をして居間へ退く。

「いえ、少し転地しようかと思ひまして」

「それじゃ身体からだでも悪いんですね」

「大した事もなかうと思ひますが、だんだん勧める人もありますから」

「うん。わるけりや、行くがいいですとも。いつ？ あした？  
そうですか。それじゃまあ緩ゆっくり話したまえ。――今ちよつと用  
談を済ましてしまふから」と道也先生は鈍栗の方へ向いた。

「それで、どうも御氣の毒だが――今申す通りの事情だから、少し待ってくれませんか」

「それは待って上げたいのです。しかし私の方の都合もありまして」

「だから利子を上げればいいでしょう。利子だけ取って元金は春まで猶<sup>ゆうよ</sup>予してくれませんか」

「利子は今まででも滞<sup>とじ</sup>りなくちようだいしておりますから、利子さえ取れば好<sup>い</sup>い金なら、いつまでも御用立て置きしたいのですが……」

「そうはいかんでしょうか」

「せっかくの御頼<sup>おたのみ</sup>だから、出来れば、そうしたいのですが……」

「いけませんか」

「どうもまことに御気の毒で……」

「どうしても、いかなですか」

「どうあつても百円だけ拵こしらえていただかなくっちゃなんので」

「今夜中にですか」

「ええ、まあ、そうですね。昨日きのうが期限でしたね」

「期限の切れたのは知ってるです。それを忘れるような僕じゃない。だからいろいろ奔走して見たんだが、どうも出来ないから、わざわざ君の所へ使をあげたのです」

「ええ、御手紙はたしかに拝見しました。何か御著述があるそうで、それを本屋の方へ御売渡しになるまで延期の御申込でした」

「さよう」

「ところがですて、この金の性質がですて——ただ利子を生ませ

る目的でないものですから——実は年末には是非入用だがと念を押して御兄さんおあにいに伺ったくらいなのです。ところが御兄さんが、いやそりや大丈夫、ほかのものなら知らないが、弟に限ってけっして、そんな不都合はない。受合う。とおっしゃるものですから、それで私も安心して御用立て申したので——今になって御違約でははなはだ迷惑します」

道也先生は默然もくねんとしている。鈍栗どんぐりは煙草たばこをすばすば呑む。

「先生」と高柳君が突然横合から口を出した。

「ええ」と道也先生は、こつちを向く。別段赤面した様子も見えない。赤面するくらいなら用談中と云って面会を謝絶するはずで

ある。

「御話し中はなはだ失礼ですが。ちよつと伺つても、ようござい  
ましようか」

「ええ、いいです。何ですか」

「先生は今御著作をなさつたと承うけたまわりましたが、失礼ですが、そ  
の原稿を見せていただく訳には行きますまいか」

「見るなら御覧、待つてゐるうち、読むのですか」

高柳君は黙っている。道也先生は立って、床の間に積みかさね  
た書籍の間から、厚さ三寸ほどの原稿を取り出して、青年に渡し  
ながら

「見て御覧」という。表紙には人格論と楷書かいしよでかいてある。

「ありがとう」と両手に受けた青年は、しばしこの人格論の三字をしけじけと眺ながめていたが、やがて眼を挙あげて鈍栗の方を見た。

「君、この原稿を百円に買って上げませんか」

「エへへへ。私は本屋じゃありません」

「じゃ買わないですね」

「エへへへ御冗談ごじようだんを」

「先生」

「何ですか」

「この原稿を百円で私に譲って下さい」

「その原稿？……」

「安過ぎるでしょう。何万円だって安過ぎるのは知っています。

しかし私は先生の弟子だから百円に負けて譲って下さい」

道也先生は茫然<sup>ぼうぜん</sup>として青年の顔を見守っている。

「是非譲って下さい。——金はあるんです。——ちゃんとここに持っています。——百円ちゃんとあります」

高柳君は懐<sup>ふところ</sup>から受取ったままの金包を取り出して、二人の間に置いた。

「君、そんな金を僕が君から……」と道也先生は押し返そうとする。

「いいえ、いいんです。好<sup>い</sup>いから取って下さい。——いや間違つたんです。是非この原稿を譲って下さい。——先生私はあなたの、弟子です。——越後の高田で先生をいじめて追い出した弟子の一人です。——だから譲って下さい」

愕<sup>がく</sup>然<sup>ぜん</sup>たる道也先生を残して、高柳君は暗き夜の中に紛<sup>まぎ</sup>れ去つた。彼は自己を代表すべき作<sup>さく</sup>物<sup>ぶつ</sup>を転地先よりもたらし帰る代りに、より偉大なる人格論を懷<sup>ふく</sup>にして、これをわが友中野君に致<sup>いた</sup>し、中野君とその細君の好意に酬<sup>むく</sup>いんとするのである。

## 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気づきの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---